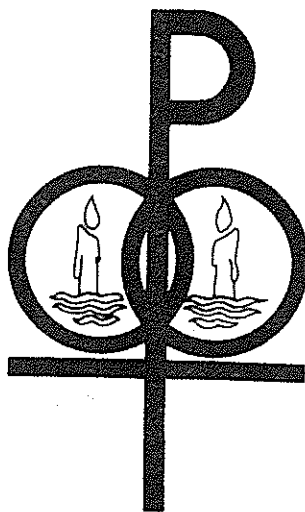


"わたしたちが一つであるように、
彼らも一つになるように"

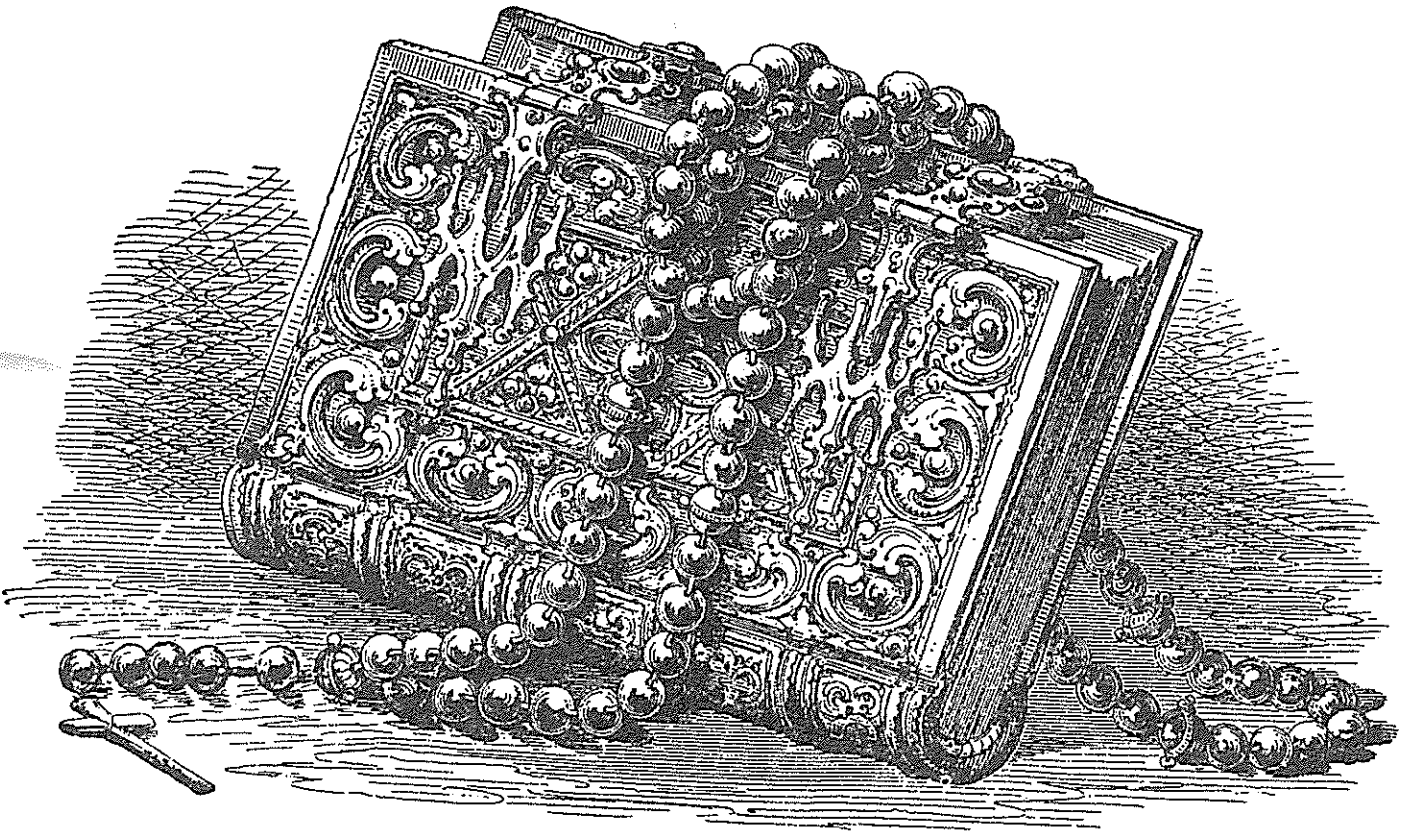
(ヨハネ17:22)

*The Origin and
Vision of . . .*
*Marriage
Encounter*



Rev. Robert White, O.F.M.

愛



前書き

結婚や家族のための仕事についてこの方、「何でマリッジ・エンカウンターなんて思いついたんですか」、「なぜマリッジ・エンカウンターを始めたんですか」、「いつがマリッジ・エンカウンター・プログラムの初回に当たるんですか」、「いったいどんないきさつで始まったんですか」といった質問を度々受けて参りました。

記者のインタビューや講演会でのこれらの質問に答えつつ、その都度自分の答えに何かしっくりしないものを感じておりました。特に- 世界各国で開かれるマリッジ・エンカウンターでの説明を聞いて- その起こりや根本がほとんど無視されているのではないかと思った時それを強く感じました。

こうしたことを気がかりに思いつつ日々を過ごし、執筆し、各地を駆け巡りながら、どうかしてマリッジ・エンカウンターのルーツをうまく伝える方法はないものだろうかと思案しておりました。

その同じ頃、私の親友や、今ある結婚と家族の生活のためのスペシャルイベントに関係している人達もこの活動の歴史をつづった本の必要性を提唱しておりました。

ある日、朝の祈りを終えた時私の頭にふっと一人の司祭の名前が浮かんで参りました。「ボブ・ホワイト神父」。私は「この人こそマリッジ・エンカウンター史の著者たる人だ。神父はニューヨークの聖ボナヴェンチュラ大学の歴史の教授で、アメリカでのマリッジ・エンカウンターの開拓者の一人。謙虚で賢く、気さくな人柄。マリッジ・エンカウンターの活動に熱心なこの神父を除いて適任者は他にいない。さっそく尋ねてみよう！」と考えたのです。

神父は即、承諾してくれました。そしてその時からすぐ本づくりのプランが始まり、私との連絡も密にとって下さるようになりました。神父は教授としての長期休暇を利用して、マリッジ・エンカウンターが、他の国や宗派での夫婦たちの間で、どのように行われているか確かめに、日本へも来られました。そして、いつも非常に啓発され、熱意に燃えて戻っていかれました。

そこで、もしあなたがマリッジ・エンカウンターの起こりに関する重要な問の答えをお探しでしたら、どうぞこのまま読み続けてください。この本がマリッジ・エンカウンターの「真髄・ルーツ」へとご案内いたします。

まず、前述の質問の一つをはっきりさせておきましょう。「いつが初回か」という問いに対しては、初の「正式マリッジ・エンカウンター」は、1961年だということになりますが、私個人としては33年前、私がまだ母の体内にいた時だといえるでしょう。というのは、私の両親は結婚後7ヶ月目で争い、別居しておりました。その時、私の誕生を間近にして、祖父母が賢く愛情豊かに両親を説得してくれたのです。それはきっと、神が祖父母を通して両親の消えかかった心の灯に息を吹きかけられ、再び燃え上がらせて下さったのだらうと思います。そして、私の誕生を3ヶ月後に控えて、両親は改めて結ばれ、生涯二度と離れることはありませんでした。

結婚は家族の中心、家族は人類すべてにとっての中心であって、このことは未来永劫変わることはないのです。家族の存在は変わることはない、家族は我々すべての希望なのです。

Fr. Gabriel Calvo
Washington D.C.
January 1, 1999

序 章

結婚、一人の男と女が夫と妻という関係で生きていくという誓約は、現代社会において最も必要とされる共同体である。この共同体は社会を形作る基礎となる核である家族の「中心」である。家族のあり方は、またそのまま社会のあり方だと言うこともできる。健全な社会のためには健全な家族が必要であり、すべての健全な家族のためには、強くて活力あふれる結婚生活が必須条件である。それは、夫婦は家族の栄養源だから、なのである。それゆえに、精神を奮い立たせ、結婚生活を強めてくれるものは何であれ、同時に家族を清く強く、そして高めてくれるものであり、ひいては社会を補強する助けとなっていくのである。およそ40年前につくられた健全な結婚生活を送る助けとなるために見いだされた方法はマリッジ・エンカウンター・プログラムと呼ばれ、今ここにその全貌を紹介することにする。

マリッジ・エンカウンターはここ38年の間に世界中の何千、ひよっとすると何百万という夫婦の生き方を変えてきた。その起こりについては、しばしば問題となる。どのようにして始まったのか？目的は？なぜマリッジ・エンカウンター・プログラムが今のような形になったのか？この本はきつとこうした質問に答えてくれるであろう。

マリッジ・エンカウンター・プログラムの創始者兼、立案者であるガブリエル・カルボ神父は「どこからマリッジ・エンカウンターのことを考えついたのですか」といったような質問をよく受けた。返事に神父はその疑問を持つこと自体を褒めた。なぜならその答えこそがマリッジ・エンカウンター「神秘、精神を真に理解することであり、それが目的」なのである。神父にとって、マリッジ・エンカウンターは実際、単純にひらめきの様であった。「私にはそれは2本のマッチ棒のぶつかり合いの様に思えた。なぜならその直感、初めにふたつの異なった感情、ふたつの感動的体験があってそれが互いにぶつかり合い、マリッジ・エンカウンターを生み出す火花を散らしたのだから。」このふたつの、神父が心を揺り動かされた体験とは？

何人もの作家が夫婦のための道具造りに協力して、カルボ神父にアイディアや考えを吹き込んだ。オットー・ウィルメンは「立派な理論程、実用的でないものはない」と言っている。しかしすべての立派な論も又幾分かは真実と関係がなければならない。ロイス・エ

ヴェリーは答のない問いは非常に辛い、疑問のない答えはもっと悪い、なぜなら答えが求めずに与えられてしまっているからだとして述べている。スペインの詩人、アントニオ・マッケイドの言葉に次のようなものがある。「我々は皆1杯の水のありがたさは知っているが、のどの渇きの価値を知っている者は少ない」。

夫婦達の疑問と渇きがマリッジ・エンカウンターとして知られている道具の発展の原因となった。夫婦達は彼等の生活をより充たし、結婚生活をより意味深いものにしてくれる『何か』が何なのか疑問に思い、その何かに渇いていた。カルボ神父はこの疑問と渇きに答えを差し出した。このプログラムでの概念は夫婦の実際のあり方に重点が置かれている。世の中には結婚したことを楽しむ者と、そうでない者がいる。ここでの挑戦はこの両者の間のギャップに橋をかけることである。マリッジ・エンカウンターはそのための道具となった。ここで語られる歴史はマリッジ・エンカウンターがいかにして、この橋をかけたかを明らかにしたものである。

「マリッジ・エンカウンターのルーツは？」という問いへのカルボ神父の返答は、「聖書と実生活との相互作用」というものであった。「聖書は神の御言葉で、それは人類と神との生きた体験^{#1}を述べている。聖書は神の御計画^{#2}と全人類への働きかけとを著わしている。生活は時間・夫婦・教会の教え（その権威）・家族そして家庭といったものが示すいろいろな知らせの合わさりあったものに左右されている。ここではそれがどのようになっているかを著わしている。

マリッジ・エンカウンターをしっかりと理解出来ていなかった私としてはこの本に非常に興味を持つことになった。プログラムで起っていることと指導書から読み取ったこととの間に相入れない点があった。本では、夫婦が神の御計画に沿って日々の生活をより豊かに暮らす方法を手に入れて行くことは明白であった。プログラムで私は、夫婦が互いを知る様になる対話での苦悩を見た。彼等が自分達に語られる神の御意志を見つけること、すなわち対話を通しての神の御計画は、残念ながらヴェールで覆われていて見えなかった。そこでマリッジ・エンカウンターの起こりを調べ始めたのである。この本はその調査結果だといえる。

^{#1} vivencia

^{#2} vision

この本の資料はガブリエル・カルボ神父へのインタビューと、アガベという名のマリッジ・エンカウンターの雑誌の神父の記載記事および神父の著書からのものが主となっている。神父は、マリッジ・エンカウンターの起草者・指導司祭である。ジェイミーとメルセデス・フェラール・エスコラたち、既婚者達のために『何か』を探し求めていた人達へ心からなるお礼を申し上げる。彼等はいろいろと説明を下さったりマリッジ・エンカウンターの初回への案内までして下さった。ホセとマルガリータ・ピッチ・ボティとはマリッジ・エンカウンターを国際的にまでこぎ着けるのに尽力して下さったし、こうした人々の助けなしには、この本の発行はあり得なかったであろう。



スペインの夫婦達、マリッジ・エンカウンターの発展のために価値ある洞察と明快な判断とを与えて下さったレノン夫妻とリカルト夫妻を含むすべての人々にも心からなる感謝を表明したい。このプログラムに参加している日本の夫婦達、そして、特にフランシスコ会のダナン・マーリー神父²⁸³に深く深く感謝する。神父はこれに国際的な理解と援助をして下さっている。こうした参加者達からの話を聞いていくとマリッジ・エンカウンターをその従来の方法を使い、本質に触れることで得られる、結婚の霊性はどの文化をも越えたもの、どこでも受け入れられるものなのだということがわかる。ここでの経験は夫婦達を新しい結婚生活へと導いてくれる。ある日本人の夫は次のように述べている。

「このプログラムから帰宅して、家内にお茶を入れてあげようかと聞いてみました。アメリカ人のあなたには恐らく理解できないでしょうが、これは私に起こった、私と家内との係わりにとっては、天と地程の変わり様なのです。日本では妻が夫のために動くことが

²⁸³ Fr. Donnon Murray O.F.M., Franciscan Chapel Center

一般的な姿です。私は今、心底変わりました。」

マリッジ・エンカウンター・プログラムを経験した人、誰からも受けるこの熱意に私もこのプログラムの起こりと構想を知りたいと望み、また、これが持つ元来の目的を次の世代へと受け継いでいけたらとしきりと思うようになった。

この本を、自らの生きた体験を分かち合っ下さった夫婦達、司祭達に捧げる。もしこの本が、結婚生活をより豊かで深く、神の御旨にそった意味あるものとしたい夫婦達の助けになるとしたら、編集や執筆などにかかった時間や苦勞はすべて吹き飛ぶというものである。もし、どなたかの結婚、家族がこれで確かな強いものになることができたとしたら、家族を通してこの世の中を少しだけでもよくすることに陰ながら貢献できたことになる。夫婦はいつでも家族の、社会の「中心」であるのだから。

目次

前書き	1
序章	3
Chapter I 創始者との出会い	10
ジェイミーとメルセデス・フェラール・エスコラ	10
フェラール夫妻とヴィセント・ローレス神父	11
フェラール夫妻の望みかなう	12
ガブリエル・カルボ神父	13
教皇ピオXII世の呼びかけ	14
カルボ神父とフェイミー&メルセデスとの出会い	16
Chapter II 活動開始	19
教皇の「呼びかけ」の波紋	19
メンバーの増加	22
教会の認可	22
Chapter III スペイン・チームの影響力	25
ベルギーとパリへの旅	25
スペイン・チームとよりよき世界のための運動	26
スペインの「よりよき世界」センターの基礎がため	28
オアシス運動	29
よりよき世界運動の波及	30
Chapter IV ロッカ・デ・パパへの旅、1958年	32
ロッカ・デ・パパへの旅の決断	32
ロッカ・デ・パパへの旅	34
失望	35
8月6日の教皇謁見	36
ロッカ・デ・パパでのコース	37
オアシス運動と参加者達	38
Chapter V 教皇との謁見と"FAC"運動	40
「FAC」運動の影響	43
Chapter VI 既婚者チームの基本観念	45
「時を告げる印」	45
考え方のポイント	47

Chapter VII	チームの構成と方法	54
	チーム：構成	54
	チーム：ミーティング	54
	ミーティングへの準備：課題	55
	ミーティングの順序	56
	祈りのネットワーク	58
	一つの運動へと結合されていくチーム	58
	新しいチームへの躍進	58
	初級エンカウンター（ゼロ段階）	59
	中級エンカウンター（1段階）	59
	上級エンカウンター（2段階）	61
Chapter VIII	マリッジ・エンカウンター その誕生	65
	挑戦	65
	『コップ』	66
	第1回マリッジ・エンカウンター	67
	再現	68
Chapter IX	マリッジ・エンカウンターの出発	70
	「マリッジ・エンカウンター」の方法	70
	マリッジ・エンカウンター各段階の本質	71
Chapter X	1961-70年スペインでのマリッジ・エンカウンター発展	86
	スペインでのMOCEAMの基礎確立	86
	スペインのMFC(Christian Family Movement)の形成	87
	教皇チームによるスペイン各地へのマリッジ・エンカウンター広がり	88
	マリッジ・エンカウンターコーディネーターとの約束	89
	マリッジ・エンカウンターテキスト、スペインにて印刷される	90
	マリッジ・エンカウンター発展	92
	マリッジ・レトルノ	94
Chapter XI	1960年代 マリッジ・エンカウンター、スペイン国外への広がり	97
	ICCFMの確立	97
	ラテン・アメリカでの初マリッジ・エンカウンター(1966)	98
	北米での初マリッジ・エンカウンター・プログラム	98
	パット&パティとマリッジ・エンカウンター	99
	「スパニッシュ・アメリカンのエンカウンター」の形成	101
	米国諸都市に持ち込まれたエンカウンター	102
	マリッジ・エンカウンターテキスト、スペイン語にて印刷される	102
	米国でのマリッジ・エンカウンターとスペインMFC	103
	ICCFMのもとでのマリッジ・エンカウンター	104

Chapter XII 1969-1971, 米国でのマリッジ・エンカウンター	105
エルベロン・ニュージャージーでの会合	105
CFMから独立した米国でのマリッジ・エンカウンター	106
マリッジ・エンカウンター・グループ同士の分裂	108
むすび	110

CHAPTER I

創始者との出会い

マリッジ・エンカウンター^{註4}はスペインのバルセロナで始まった。そこでジェイミーとメルセデス・フェラール・エスコラ夫妻はスペインのローマン・カトリックのI.D.L.^{註5}のカルボ神父^{註6}と出会った。当時彼等と神父はそれぞれに生涯を通して従っていかうとしている神の呼びかけを確かなものにする『何か』を求めていた。彼等は互いに自分のうちなる胸騒ぎを感じ、それに答えようと焦った気持だった。この出会いは別の二つの出来事を通して、さらに大きな誘因と方向づけを得ることになった。それは、1952年2月10日に下された教皇ピオXII世^{註7}の言葉とスペイン人夫婦の教会内に夫婦のための『何か』を必死になって求める心とであった。こうした3つの出来事によって、マリッジ・エンカウンターと呼ばれることになる道具の種は形造られそして蒔かれたのである。この生きた精神と神秘さ、マリッジ・エンカウンターの起こりと構想を理解して頂くためには、先ず1952年の彼等の生活や考え方、そして望みなどから話を始めねばならないであろう。

ジェイミー・メルセデス フェラール・エスコラ

ジェイミーとメルセデスは1943年11月5日モンセラットにあるベネディクト修道院で結婚式を挙げた。27才と29才。それまでもカトリックでの教会生活をしていた。1936年から39年に起こったスペインの内乱は、二人とも体験をしていた。ジェイミーは、バルセロナの共産圏から逃れて、フランコ政権に加わり、メルセデスは同じバルセロナで人々の傷ついた心のケアに全力を尽くしていた。この戦いの後も二人はそれぞれの教会で神の使徒職としての活動をしていた。又、高校時代にはスペインのカトリックの習慣通り、霊的指導者についていた。婚約時代、ジェイミーとメルセデスは結婚するにあたり、それぞれ別の霊的指導者をもつより、一人の霊的指導者についたほうが良いだろうと話し合った。なぜなら結婚の重要な点は、物理的に二人の人が結ばれるだけでなく、心や思想、信仰まですべてを含む統合だと考えていたからである。別々の指導者を持つことはそれに対してふさわしくないと考えた。彼等はメルセデスの霊的指導者、イエズス会のデメトリ

^{註4} Marriage Encounter (スペイン語"Encuentro Conjugal"の正式英訳)

^{註5} Institute of Diocesan Labor Priests in Barcelona, Spain

^{註6} Fr. Gabriel Calvo

^{註7} Pope Pius XII

オ・プレシアド神父につくことにした。ジェイミー側の司祭よりメルセデスの司祭の方がより力になってくれていたからである。プレシアド神父は、二人の婚約時代の良き霊的アドバイザーになってくれ、結婚後もこの役割をすることを約束してくれた。

フェラール夫妻とヴィセント・ローレス神父²⁸⁸

プレシアド神父は、彼等の結婚後2、3日して亡くなられてしまい、二人はバルセロナの神学校に暮らしていたDLP²⁸⁹の議長のヴィセント・ローレス神父に巡り会うことになった。神父は二人の霊的な指導司祭になることに同意された。彼等は、プレシアド神父の時と同様に、お互いに相手のためにならどんな質問にでも答える準備のある旨を伝えた。

しかし、実際二人は単なる霊的指導司祭以上の指導者を求めていた。彼等は教会の中に「夫婦が二人一緒にできる」『何か』を探していた。「教会は私たちが結婚させてくれたのに、結婚した後の我々には実際に何もしてくれない。かえって引き離している」と嘆いた。一般社会では、二人が一組の夫婦と認められた上でどこにでも行き、参加出来ているのに、教会の中では男性集会、女性の集いと分けられてしまっていて、夫婦が共に参加出来ることは何も考えられていない。」メルセデスとジェイミーは教会に今在るいろいろな会を試してみたが「夫婦」の「霊性」を深めるための集い一つも見い出すことが出来なかったのである。

ジェイミーとメルセデスは自分たちの考えを曲げることなく、いったん一人の男性と女性が結婚生活に入ったら生活のどの部分に於いても、霊的な面では特に、二人が一緒にかかわって行くべきだと確信していたし、それこそが最も大切なことだと信じていた。「もし結婚生活が単に肉体的喜びだけのことで、その結果として霊的にもつながりが出てくるのだとしたら、我々は決して結婚などしなかった」と話していた。彼等の意見は、結婚生活とは、夫婦が互いに助け合うことで、何よりも先ず第一に霊的な面での分かち合いが大切なのである、という点で終始一貫していた。なぜなら、「夫婦としてのあらゆる行動は、二人の心の霊的一致から生まれてくる」ものでなければならぬはずだからであった。

²⁸⁸ Fr. Vicente Lores

²⁸⁹ Diocesan Laborer Priests 「労働『刈り入れる』教区の司祭」

しかし、司祭によっては、靈魂はあくまでも神のものであるから、夫と妻の靈魂は別々に取り上げられるべきものだと言う人もいた。二人はこれに反対であった。「靈魂が神に属していることは認める。しかし同時に肉体もそうなのではないのか。神が二人の人を結婚というかたちで結びつけられるのなら、各々の靈魂も共に一致を目指すべきである。」彼等は今もそうだと確信している。彼等は教会の中に夫婦のための『何か』を求め続けた。彼等はこの靈的渴きを癒すべく何かを教会が提供すべき必要性を感じ取っていたが、個人的には、それを教会内に見いだすことがとても難しいだろうことも分かっていた。彼等は、また、自分達以外にも同じ悩みを抱えている夫婦達の存在にも気付いた。

ローレス神父に会うごとに、彼等は夫婦のための『何か』を、特に夫婦としての心の結びつきの在り方に関する靈的な面での何か、を造ってくれるように頼んだ。時を同じくして、彼等は他にも結婚の靈性を深める『何か』を発見する為の何かを同じように求めている夫婦、例えばフェラール夫妻の親戚や友人などを知っていた。一方、ローレス神父はDLPの議長として非常に忙しい日々を送っていた。バルセロナではこの会に所属する人は同じ教区の神学校に生活し、そこで教鞭もとっていた。

ローレス神父はDLPが独自の住居を確保でき次第、彼等の要求に応じた『何か』をしようと約束した。その『何か』が正確にどんなものになるのかは彼等には予想が付かなかった（多分、ローレス神父にも分かっていたに違いない。）神父は常にフェラール達に祈るように、そうしたらいつか神が道を御示しになるに違いないと言い続けていられた。1952年、遂にモドレール通り39番地にDLPの住宅が設けられた。ローレス神父はフェラール夫妻の催促もあり『何か』探しを急いだ。

フェラールの望みかなう

ジェイミーとメルセデスは、9年の歳月をかけて教会に夫婦のための『何か』を求めて探し、尋ね、そして祈ってきた。ある晩、彼等はローレス神父に呼ばれた。何の為かは知らず訪ねたふたりにローレス神父は、「あなた方の望みは要するに、どういうことなのか」と尋ねられた。「私達は教会に夫婦のための勉強会といったような『何か』を設けてほしいのです。そうすれば我々は夫婦として結婚の靈性を学ぶことが出来、その『何か』を夫と妻、つまり夫婦として受けることが出来るのです」と答えた。神父は熱心に耳を傾

けられたが答えは「難しいことではないが、忙しすぎて私には無理だ」というものであった。

ジェイミーとメルセデスはローレス神父の事情を理解し、そして、今度新しくDLPのメンバーになってバルセロナで仕事を始めるようになった新任の司祭はどうかと尋ねた。彼等がこの司祭について聞かされていることから判断すると、この人ならきっと助けてくれそうに思えた。ローレス神父は、この司祭が25才の若い人で家族や家族の持つ問題には経験のないことを告げた。

二人は「我々は家に起こる問題を解決して欲しいのではありません。ただ共にあって私達を励まし支え、そして導いて下さる神父様が欲しいのです」と答えた。「では、いいでしょう」神父は答えて会えるように取りはからって下れた。

ガブリエル・カルボ神父

ガブリエル・カルボ神父は、1927年2月21日バルセロナに、ガブリエル・カルボ・カネットとカルメン・ガルシァ・マンリク^{註10}との間の長男として生まれた。二人は後に次男をもうけたが幼くして亡くしてしまった。彼等には他に二人の娘があった。カルボ神父はカトリックの信仰のもとに育てられた。しかし、内乱下の1936年、バルセロナは共産主義者の支配下に置かれ教会は閉鎖、中には焼かれてしまったものも多く、カトリックの礼拝も教えも禁止され学校では共産主義の理論が教育された。

1941年、カルボ神父が14才の時、神父の生涯において忘れ難い出来事が起こった。神父の親友の一人が自殺を図ったのである。「なぜ？」答えを求めながら、気が付くと司祭になっていて、あたかも自然と青年達の間で働くようにレールが敷かれていた様であった。彼はDLPの修道会に入った。若者向けの仕事はその中心だったからである。神父は、バルセロナにはこの修道会に属する学校がなかったので、サランカの神学校へ入学して、哲学と神学とを専攻した。

サランカ時代にガブリエルの思考の基礎はつくられた。彼はベルギーの司祭が使って

^{註10} Gabriel Calvo Canet & Carmen Garcia-Manrique

いた心理学書の中に書かれている、ある方法について読んでみた。カーディーン大司教は彼の著書^{註11}の中で若い人に向けての運動について述べている。カルボ神父は、その当時を振り返って「観察する・判断する・行動する」という方法と「恋に落ちていた」に違いないと述べている。彼にとっては、この靈性の為の方法は信仰と実生活とを分かつものではなくむしろ聖書と現実生活をひとつに結びつけるもののように見えた。彼は、この方法こそ信仰と生活、信念と実行を正しく、心から深く結びつける道だと断言した。カルボ神父はこれを神父の祈りに取り入れた。サラマンカでの日々カルボ神父はその町でJOC運動^{註10}のメンバーとともに働いていた。若者達をこの方法によって指導していくために、神父は自らもこの方法のトレーニングを経験しこうして神父自身の生活の中でも体験を積み重ねていった。

教皇ピオXII世の呼びかけ

司祭就任の2～3ヶ月前に、カルボ神父は教皇ピオXII世の偉大なる呼びかけについて学んだ。それは神父を駆り立て、心に「火」をつけるものとなった。教皇はフランス・ルルド地方などで行われる聖母マリア出現の百年祭（1952・2・11）のイブでのお話で、「警告の叫び」を発せられて、この世界が「魂と肉体を、善と悪を、社会と人々を混乱に引きずり込んでいく道について気付くことなく」変化していっていると指摘された。教皇は、又、神の御前に在って教皇自身も教会も「人類をこの恐ろしい不幸から救い出すためにはあらゆる責任」を負うべきであると表明された。下記する教皇のお言葉はカルボ神父の心に深く印象づけられ今日もなお、神父の胸の内に燃えつづている。

「善意ある信者の人々よ、男性、女性を問わず、あなた方一人ひとりが人類の歴史を振り返って人知の及ばぬ出来事の在ったことを思い出し、神の御技を手助けしてこの荒廃しつつある今日の世界を救うために、自分自身何ができるのか、また、すべきなのかを考えることが必要である。」

「一触即発の状態が当たり前のような日々は続くはずがない。その原因は、多くの人々の信仰の甘さ、個人的、社会的に見た道德意識の低下に起因するに違いない。また、単純なる心で満足してしまっているからかもしれない。言うなれば、麻薬を

^{註11} Jeunesse Ouvriers Chretienne (J.O.C. Young Christian Workers) by Monsignor Cardijn

飲まされて、自由を迫りながらも、何が本当の自由なのか訳が分からなくなっているのと同じである。善良なる人々よ、荒廃する未来に対して、ただ腕を組んでじっとして許されるはずはない。それでは彼等と同じことだ。」

「その時が来たのです、愛する兄弟姉妹よ、断固として踏み出さなさい。善良なる人々よ、この世の運命について心を運ぶ人達よ、皆が一つになって団結する、今がその時なのです。『もはや眠りから覚めるべき時期なのです。救いはいっそう近いのです（ローマ13：11）』」

「全世界が造り直される必要がある。ちょうど未開の世界から人間の社会に、人間社会から神の御旨にそった、神の御国へ至るように。何千何万という人々が今の世界で泣き叫んでいるのです。」

「崇高なる精神を捨てたことに対する聖なる責めを受け止めよ。これが真実の生き方のルールとしての、神からの呼びかけであることを悟れ。この聖なる責めは羊飼いなあなた方の御父が、あなたがたに任せておられ、心を眠りから再び力強く呼び覚ませようとしておられるのだ。」

「目覚めのためには道徳の価値を護るクリスチャンとしての生活をしている人々の生き方を全面的に刷新することが必要である。そのためには、一人ひとりすべての人、聖職に就いている者も一信徒でも、権力者、家族、団体の区別なく皆が改める必要がある。」

「しっかりと心に留めておきなさい、愛する者たちよ、この現在の悪徳の根源、悲しむべき結果は、かつて異教徒達の決して悟ることが出来ない人間としての永遠なる宿命をおった異教の地に置かれたキリスト教の時代の様にではなく、むしろ、信仰に対する無関心さ、意志の弱さ、冷めきった心に原因があるのだということ。」

「今日我々が司祭とか信仰深い人とか呼んでいる者の行ないは、神の御旨を反映するものでなくてはならず、人々の行く道を照らし、心を一つにし、謙虚で優しくあ

らねばならないはずである。善良なる人々がこれを見て、自ずから従って来られるように導きなさい。無条件で救い主イエズス・キリストに従って行くようにさせなさい。神の御業が現れますように、神があなた方を使徒職として神の偉大なる御業を現すよう、働き導いていくことを望んでいられるのです。」

神の呼びかけを今か今かと熱心に待っている信仰の篤い者がいる。彼等は、じきに崩されることになる広大な世界を見ることになるであろう。又、今眠っている者は、目覚めさせられる。意気地無しの者は元気づけられるに違いない。混乱して考えがまとまらない者には、誰かの指導が必要である。これらすべての人が彼等のする仕事を通してこの世界を守り、征服し、よい方向につくり替える為に自らを役立たせるよう、勤勉であることが望まれているのである。」（著者訳）

教皇のお言葉は、1952年5月31日の聖職者としての天職に叙階する日を間近に控えたガブリエルの心に、強烈に焼き付いていた。彼には教皇が自分に向かって『何か』をするように呼びかけていられる様に受け取れた。彼は導きを、率直さを、寛容なる心を下さるやうにと切に祈った。そして彼はこの教皇の呼びかけにいかに答えたらよいかを悟らせる『時のしるし』が示されるのを待っていた。

カルボ神父とジェイミー&メルセデスとの出会い

叙階式の後、カルボ神父はバルセロナにあるCBDS^{註12} 所属の男子中学校で司祭としての仕事が始まった。神父は又、テレジア会^{註13}の女子中学校での霊的アドバイザーもすることになった。神父はバラッカスと呼ばれる簡易収容施設のある、海岸よりの貧しい地域「バルセロネッタ」の宗教教育^{註14}も同時手掛けることになった。

その年の10月、カルボ神父はジェイミーとメルセデスとを修道院長のローレス神父に紹介された。ローレス神父は、ガブリエル神父の部屋を尋ね「ガブリエル、どうか私の友人達に会って彼等の言うことを聞いてやってくれ、そして何を頼まれようと引き受けてやってほしい」と告げた。

^{註12} Christian Brothers of De la Salle in Barcerona

^{註13} Theresien Sisters

^{註14} Catechesis

カルボ神父は「何をして差し上げましょうか」と尋ねた。

ジェイミーとメルセデスは彼等が教会でも夫婦として、神のもとに一つの単位として認められ、信仰を深めていかれるようにして欲しいのだという主旨を述べた。彼等は、「神父様に我々二人の靈的指導者になって欲しいのです」とも加えた。「どちらのですか？」と驚いた神父の問いに、答えはただ「もちろん私達二人の、結婚した二人のため」というものであった。

カルボ神父は戸惑った。神父にとってはこれは奇妙な注文で、というのも当時どこの教会でも、靈性はひとりずつ個人を対象とした問題だと考えられていたからである。神父の今までの暮らしの中でも、神学校での教育でも個人が対象であり、夫婦として、とか家族といった複数を対象とした見方をしたことはなかった。神父は正直にこの戸惑いを話した。彼等は理解はしてもなお、教会に夫婦を対象にした靈性を扱うところが必要だと迫った。彼等はマタイによる福音書19章6節を指摘して、「『神が合わせたものを、人間が離してはならない』これが神の御計画で、我々はこれに従って生きていきたいのが分からないのですか。力になって下さい」と訴えた。

この時になって、神父の心に教皇のあのメッセージがひらめいたのである。きっと、これが彼が求めてきた『時のしるし』なのだ。神父は部屋に戻って教皇の「行動への呼びかけ」を引きだしてきて二人に見せた。一緒に読み進むうちに彼等の心の炎も燃え上がった。メルセデスは教皇の『家族』という所を指さして「分からないの、神父様！教皇は『家族』と言ってられるではありませんか。私達は、この中の家族の一つになりたいのです。長い間結婚した者として家族として神に生き、神に仕えたいとひたすら欲してきたのです。でもこれを実行するには、どうしても神父様が必要なのです！」

カルボ神父は答えて、「でも、どうやって！正直言って、私には分からない。私は司祭時代ずっと、若者こそがこの社会や歴史を担っていくかなめだと思ってきた、そして司祭として彼等に仕えて行くよう教育されてきたのだ。」

フェラール夫妻は納得せず、そして断固として言った。「若い者はどこから来るのです

か。家族からです。家族こそが人類にとっての未来であり希望であって、我々結婚した者たちこそがすべての健康で幸せな家族のかなめ、中心的存在なのです。」

ジェイミーとメルセデスは人間性の未来と指導者は家族であって、その家族の中心的存在が夫婦なのだという説を主張し続けた。今日教会にある団体のすべてが夫達と妻達、又両親と子どもたちというように分ける傾向にあること。二人は、もし、教皇の呼びかけにあるように神の御意志が家族へ心に向けることだとしたら、家族が健康で強い生活を送れるように、それぞれが互いに深くしっかりした絆で結ばれた夫婦にするために、教会が何らかの形で手を貸すべきだと確信していた。

カルボ神父は家庭生活にはうといことを告げた。すると二人は、「我家へ来て下さい、そうしたら我々の生活が、結婚した者の生活がどんなものなのか分かるでしょう」と答えた。その瞬間、カルボ神父は、彼等の賢さ、熱意あふれる要求に自分の今まで抱いていた難しさも恐れも引いていくのを感じたのである。

「あなた方のような考え方を持った夫婦が他にもいますか。」という神父の問いに、彼等は「もちろんです！何十組という夫婦が、彼等の生き方に今までにない違った方向を求めているんです」と即答した。神父はうなずいた。

神父はメルセデスとジェイミーをそばの小聖堂に呼んで、共に御聖体の前に主の御導きを祈った。

カルボ神父とフェラール夫妻は、この大切な瞬間のことを思い出す度に、あの時こそ神の霊が、彼等一人びとりの心に今までに語られなかったたくさんの夫婦や家族の人たちのための貴重な『何か』をすべく、予定された時だったのだという思いに達するのであった。カルボ神父は三人がそろって歴史的「人知を超越した瞬間」を味わった思いがした。問題は「神はどこに彼等を導かれるのだろうか」ということであった。

CHAPTER II

活動開始

カルボ神父訪問の後、フェラール夫妻は親戚や友人、近所の人で同じように教会の中にある男性や女性のために分けられて組織されたかたちに満足せず『何か』夫婦単位向けのものを求めている人達に連絡をとった。この人達も、自分たち結婚した者同士の霊的向上を助けてくれる『何か』の出現を夢見ていた。5家族の名は次の通り。 Jaime & Mercedes Ferrer Escola, Ricardo & Rosario Ferrer Espona, Jaime & Anita Plana Rodriguez, Ignacio & Carmen Renom Plana, Alberto & Maria Casanellas Bassols. 彼等は1952年の9月末頃カルボ神父の所で開かれた最初のミーティングにも参加している。そして、次のミーティングに向けてそれぞれ他の夫婦にも声をかけた結果、前回の二倍の夫婦が集まり、すぐに20組ほどになった。これでは一緒に集まるには大き過ぎるので二つのグループに分けることにした。リカルツ夫妻とレノムス夫妻は「心の奥に、このミーティングに参加するやうにというささやきを聞いた気がした」と言い、「私達は結婚した者同士、互いの霊性を深めるだけでなく、夫婦としてお互いに対する関係と、夫婦として神に対する関係を深めてくれる『何か』の出現を切に願っていたのです」とも加えた。

教皇の「呼びかけ」の波紋

前述の教皇の御話を聞いて、彼等は教会で、又そこから世界に発して働き掛けていく使命が自分達に向けられているのを感じた。そして、彼等には、既にそれに応える準備が出来ていた。教皇の「行動への呼びかけ」に応えるために、「神の御意志に沿うべく」彼等は家族ぐるみ、全身全霊で向かっていった。そしてこの家族生活を通して、他の家族にも「よりよき世界」をもたらすために献身努力し始めたのである。彼等は、日々混乱していく現実の世界を改善しようとなさる神の働きかけに喜んで貢献した。彼等が教皇の呼びかけに応えたのは、「奉獻という崇高な気持ちや、これが神御自身からの呼びかけであると確信し、神とともに生きていくにふさわしい姿」であると考えただけではなく、教皇が個人的に、この思考や行動を力強く目覚めさせる為の聖なる船出を自分達に託しているのだ、と確信したからである。そして、この目覚めには、全カトリック教徒の姿勢が高まる事が必要で、それには家庭から始められることが求められており、それはすなわち

自分たちからという結論に達し、これに向かって歩いていくことを決心したのである。

彼等は神の御計画に従って生き、自分自身の本当の姿を見つめるためには、まず第一に聖書について、また教会が示す婚姻の秘跡について知らねばならないことに気付いた。又、教会を通じて、神は夫婦として、親または家族としてどうあれといわれているのかも知るようになった。こうして、彼等は自分たちが教皇の呼びかけの一部を担っているのだと信じられる様になっていった。メルセデスは、教皇の呼びかけに応えることはそのまま、良い世界にしていくことだと皆して信じていたと言っていた。「この世を根本から造りかえよう」という教皇の呼びかけは、彼等の心に深く根づいた。特に他の組織に向けて発せられた教皇の「警告の叫び」は、スペインのこの小さなグループの人達の心を、電気に打たれた様に目覚めさせたのである。彼等は実に熱心で、神の御計画のうちにある結婚とは何なのか深く考え、又その思いを他の夫婦達にも伝えていった。

一回目のミーティング

これらの夫婦達はカルボ神父の下で定期的集まる様になった。住まいが選ばれるには、近くに御聖体が安置されていたことが考慮された。（御聖体と言うのは聖室の中に安置してあるパンの形をもってイエズス様の御体を担っている秘跡のことで、これは世の中にキリストが存在されるということの真の現存である。）夫婦達とカルボ神父は「共に祈り、結婚における信仰のあり方について学び、生きた体験を分かち合う」ことをその会の目的とした。これがすなわち『ヴィヴェンシア』である。こうして、彼等は自分自身と、神の御計画のうち定められている自分達の役割に気づき、ひいては聖書に示された神の御計画に沿った生活を他の人々にも出来るよう助け励ましていかれる様になっていった。この会には、当初決まった型はなかったが次第にその仕方もはっきりしていった。

何ヶ月かの後、彼等は、神の教義を知って、聖書や教会が結婚や家族について教えている通りの生き方をするには、結婚や家族に関する最新の回勅^{註15}を学び、検討する必要があると感じた。教皇ピオXI,XII世のそれ、特に後者が（1936-43）に出された「新婚者への演説^{註16}」、がそれに当ると考え、皆してこの演説の写しを手に入れた。

^{註15} 教皇様からのその他の戒めや教え

^{註16} Discourses to the Newlyweds

いつもの会合に先立って、夫婦はそれぞれこの回勅や教皇からの教えから選ばれた話題とそれにあった聖書の箇所を渡された。そして、それぞれが示された4段階の生き方を試みて次の会合へと臨んだ。4段階のその1、夫婦二人して聖書の与えられた箇所を共に読み、それが彼等に伝えていることをが何かを把握する。その2、与えられた聖書の御言葉と自分自身を照らし合わせて内省をし、それを書き記す。その3、夫婦二人して、互いに得た内省事項を話し合い、神が彼等の家庭にどう変わる様に求めているのかについて話し合う。その4、今回の設問にそって実際に経験してみた結果、気づいたことをふたりの共同の証しとして書き記す。この証しは次回、他のカップルと分かち合っていくことになる。

この例会は2週おきにもたれ、その都度始めに御聖体の前の祈りで始められた。御聖体の前で祈りを持つことによって、会の目的を達成することすなわち彼等の生き方のゴールへの御導きを与えられると彼等は信じた。また、御聖体の前で祈ることによって、会場内で、常にイエズスを自分達のそばに実感し、神に対して心から話すことが出来た。会の間中、彼等は神が彼等と共にいて下さるよう願った。祈りの後で、彼等はそれぞれの部屋に移って持ちよった証しを分かち合った。分かち合いは集まったカップル達が互いに聞きあったことに関して行なわれた。会の終わりに、夫婦は家で新たに目指すべき課題に向けて、真心込めて実行してくるとの誓約をたてた。この方法を通して夫婦は生まれ変わり、夫婦としての絆を深め、神の御旨にかなった家族生活にしていく道を求め歩いていく様になるのである。カーディーン大司教の創られた『観察する・判断する・行動する』という方法は、こうしてこの夫婦達に受け継がれていった。

ピオXII世の演説は結婚の霊性、家族の霊性を学ぶ者たちの最も基礎となる教書となった。神の御言葉は彼等に生まれ変わりのための光・力そして神の霊を与えた。家庭での家族の関わり合いが彼等が先ず手がけなければならない場所である。家族という環境を通して初めて、二人は「主において」成長でき、神の定められた結婚の計画を全うすることになるのである。

メンバーの増加

他の家族にも広めるという目標を達成するために、彼等ははっきりとした結婚の霊性に

対して同様に渴きを感じた他の夫婦達を祈りの分かち合いのある集会に招き始めた。メンバーの増加に従い、一つのグループは8組から10組の夫婦で編成される様になった。どのグループにも司祭が入り、まず始めに皆そろって小聖堂に集まった。手順は従来通りに進められた。彼等は次第に自分達を「チーム」と呼ぶようになった。メンバーの増加に伴い、彼等は全員が一堂に会して、共に同じ趣旨で、同じ目的のために歩んでいることを確認し合い、互いの結びつきを深める必要性を感じ出した。こうして合同集会は1ヶ月か1ヶ月半ごとに開かれる様になり、「黙想会」^{註17}と呼ばれた。また、カルボ神父を助ける為にメリトン神父とファン神父^{註18}も会に参加する様になった。

月例の黙想会を通してチームは次なる発展をしていった。それはチームに加わる意志の有無に係わらず、広く一般の夫婦達にも伝えていくことであった。この「教会としての『ecclesial』^{註19}チーム」、つまりひと組の夫婦と神父で構成されたチームが黙想会を指導していった。ふつう小さいホールか会議室でもたれた黙想会の後で、夫婦達は結婚や家族生活に付いての内省をした。話題は主に前述の教皇の演説に基づいていた。これには、各秘跡（洗礼、堅信、御聖体、回心、婚姻等）、夫婦の誠実さ、夫婦の貞潔、従順、聖性、相互の信頼感、夫婦の親密さ、夫婦の祈り、夫婦間の霊的助け合い、子どもの教育、仕事を含む家庭問題など一般にまでが含まれていた。目的は夫婦の結びつきを強め、神の御心のうちに豊かな生活を得る助けをすることである。こうして、夫婦達は司祭と共にこれが結婚生活、家族生活を聖性へと導く手段なのだとして理解するようになっていった。

教会の認可

既婚者達の間で起こったこの目覚ましい現象はバルセロナの教区中に広がった。始めの二人とカルボ神父はこの「運動」を教会が認可してくれることを願った（ここでの「運動」は、精霊によって導かれた動きのことで組織を指すのではない）。ローレス神父は大司教に会って、教会から正式に認可をもらう様に頼まれた。グレゴリオ・モドレゴ司教^{註20}は彼の教区に起こったこの「新しい現象」を心配して、モドレール通り39番のDLP管

^{註17} retreats

^{註18} Fr. Meliton Carrillo & Juan Pinto

^{註19} 全体の教会を意味し、常に夫婦と司祭の両者とから構成されるチームのこと。以後エクレジアル・チームと表現する時は常に、このチームのことを意味する。

^{註20} Msgr. Gregorio Modrego

た問題のうわさが起きることであった。そして、司教はロレル神父に会った折、この集まりは参加者にも司祭達にも問題を振りかける危険を含んでいるとして、取り止める方が懸命だと提案した。ロレス神父はそれを聞いて、彼等にその旨を伝えれば、彼等はそれなりに納得するであろうと答えた。

司教はローレス神父を通じて、彼等に追って知らせがあるまでは会合を開くことを禁じた。参加者達は非常にながかりし、又腹立ちもしたが、渋々それに従うことにした。1953年3月、チームは集会を開くことはしなかったが、月例黙想会は許されていた。この会合で、チームが司教の申し出を受諾してまもなく、司教は非常に重い病に倒れられた。チームの人々は、この禁止が解かれるチャンスがなくなってしまうのではないかと案じた。彼等はひたすら祈り、黙想会を開き続けていた。

半年程たって、司教が病から完全復帰された時、カルボ神父は彼の修道院長と三組の夫婦とともに司教に会いに行き、既婚者達が、夫婦として神の道を歩んでいきたいこと、そして彼の教区に起こった新しい「現象」についての説明をした。司教はそれに熱心に耳を傾けられ、特に夫婦達の言うことを素直に聞いてくださった。その後で、司教は既に彼等の申し出を受け入れる心の準備があること、さらにその「運動」に祝福を下さる用意もある旨を話されたが、その前に彼等に、その運動に何か名前が必要だと言われた。「教会の法によれば、正式名称のない運動やグループは認可出来ない」ということであった。

カルボ神父、修道院長、それに一緒に行った夫婦達は天にも昇る心地がした。ついに監視つき生活から解放された思いで、勇んで司教の言われた正式名称を考えることに専念した。カルボ神父や夫婦達は名称には、それほど重きは感じてはいなかった。実際、カルボ神父は「当初から我々は名前に対して拒否反応を持っていた」と述べていたが、かえって名を付けることによって、又新たに教会の組織に組み込まれてしまうのを恐れていた。それより、自由で開放的で、単なる「結婚と家族のための神の導きの動き」のままでいる方が望ましかった。

あるIDLIPのメンバーが修道会に所属する名前を提案してきたが、カルボ神父は反対で、それによって名もない一般の夫婦達のための動きだという特殊性を失いかねない、と心配した。祈りを重ね、互いに話し合っ、ついに「よりよき世界のための既婚者チーム」

^{註21} と命名された。そして、1953年11月、司教により、運動は正式に認められ、チーム・ミーティングもまた完全に再開できる様になった。

『動き』は順調に伸びていき、夫婦達はキリスト教の真理に基づいた光に導かれながら、歩みを進めていった。「よりよき世界のための既婚者チーム」の一人ひとりが深い信仰に根差し、結婚の意味を秘跡のうちにしっかり理解しながら生活していた。これが完全なる彼等の生活信条になっていた。スペイン人夫婦が始めたこの生活習慣の最も重要な点は妻と夫との間の『相互の信頼』にある。『相互の信頼』は神の御意志にそった結婚生活で互いが心を閉ざしてしまわない為のマスターキーなのである。

CHAPTER III

スペイン・チームの影響力

「より良い世界のための既婚者チーム」は当初、結婚の靈性を形作りそれを確かなものへと成長させていくことを目指していた。そのために、カルボ神父を指導者と仰ぐグループの人達は出来るだけ多くの他の運動にもふれてみたいと考えた。これらの経験は運動の起こりや夫婦として、またこのチームとしての成長や精神にある種の影響をもたらしていった。

ベルギーとパリへの旅

1952年カルボ神父は JOCのカーディーン大司教による『観察する・判断する・行動する』という方法の体験と理解を深める為にベルギーを訪れた。この旅ではカーディーン大司教に直接会うことはなかったが、チームのために又黙想会の人々のためにより鮮明に、はっきりと運動の意味をくみ取る助けとなった。

1953年7月、カルボ神父はヘンリ・キャファレル神父と「聖母マリアのチーム」^{註22}をパリに訪ねた。キャファレル神父は1947年、すでに既婚者のためのグループを作っていた。グループは4組から8組の夫婦で出来ていた。第一の目的は、祈りと勉強を通じて、夫婦として、家族としての靈的な生活を深めること、そして次には、夫婦が聖書に基づいた生活をやり遂げていく助けのための月例会（食事と話し合いからなる）を持つこと、そして3番目は、夫婦の祈りと神の前に祈り、夫婦の対話を通して二人の親密さを強めることであった。カルボ神父としては、キャファレル司教グループの試みが毎月の会合で、対話に重点を置くことによって、結婚の靈性を深めているという印象を受けた。しかし、司教の聖母マリアのチームは夫婦の靈性以外のどんな活動にも使命にも興味を示さなかった。

カルボ神父はスペインに戻って、この経験、特に対話についての経験を報告した。スペインのグループは対話の間隔を一ヶ月もあけるのは長過ぎると感じた。経験上、彼等にとっては夫婦間の変わらぬ『相互の信頼』がある環境こそ最も重要なのだと考えていた。

^{註22} the Teams of Our Lady

神はいつでも彼等に生活を通して話しかけられているのを知っているの、この夫婦達にとって対話は義務ではなく、終生変わることない気持ちでし続けていく必要があるものだと感じていたのである。彼等は又、教皇が個々の家族に向けて「世界を基礎から作りかえよ」と呼びかけられたと信じていた。そこで「黙想」を通してこの様にしていくことが、結婚した者として、家族として、神に仕えていくことだという確信をもってた。

スペイン・チームとよりよき世界のための運動

このチームの発展と、方向づけに重要で根本的な影響を与えたこの二つの経験は、リカルド・ロンバルディー神父の「よりよき世界に向けてのトレーニング」^{註23}と、ヴァージニオ・ロトンディー神父の「オアシス運動」^{註24}であった。これらは、1958年8月の教皇ピオXII世の発表と共にスペインに生まれた『動き』に、はかりしれない強烈な印象を与えることになった。

叙階式を終えて、1952年11月になるまでの2~3ヶ月間に、カルボ神父は教会発行の冊子^{註25}を手にした。これはリカルド・ロンバルディー神父がイタリアのモンドラゴンで編集したものであった。それにはロンバルディー神父が1952年の教皇の「呼びかけ」を特別なものと信じているという記事が載っていた。そして、ロンバルディー神父は自分でこの「呼びかけ」を世界中に広めるために貢献しようという意志を示していた。神父はイタリアのみならずフランス・ドイツの諸都市を巡り、その行く先々で大群衆の歓迎を受けた。が、神父は、大衆に向かって話すことはともかく、教会の指導者達の意識、心や魂に訴えることの方がもっと重要ではないかと考えた。その考えを満たす為に、教皇の夏の住まいのカステルガンドルフォに近い村のモンドラゴンに「よりよき世界に向けてのトレーニング」センターを造ったということが書かれていた。教会の指導者達に向けられたトレーニングは、教皇が1943年6月23日に発行された回勅^{註26}に基づいていた。ロンバルディー神父の目標は、教会指導者達の心や魂、信仰を神への感謝や、深めを得させると同時にもっと燃え、奮い立たせていくことで、教皇の出された回勅にそって、教えをいかに現実の歩みとしていくかを理解させることであった。

^{註23} Essercitazioni per un Mondo Migliore (Training for a Better World)

^{註24} Oasis Movement (Oasis Movement)

^{註25} "Ecclesia"

^{註26} "The Mystical Body"

この記事を読んでカルボ神父は自分自身の深めのため、夫婦が回勅によって深められていく助けの為に、また教皇の書かれた回勅の精神の為に非常に熱心になった。神父はフェラル夫婦に自分の望みを伝えた。彼等は心から神父を応援し、神父がモンドラゴンへ行ってトレーニングのコースを体験して来る案に同調した。彼等は今日教会にある運動のどれもに、もし結婚の為に・家族のための靈性を高める為のより良き世界運動が作られるとしたら、このコースを経験すべきだと信じた。

この体験から、カルボ神父はふたつの重要な結論に至った。まず、第一に教皇の回勅にある**一致とオープン**、という部分に深い影響をうけた。深い内省の末、神父は、一致とオープンさとは共にあるべきだと考えた。そして、**オープンのための一致**という言葉が導き出された。キリストの神秘体と教会、そしてそれに属するすべての部分がこのためにある。すべての部分がオープンになっていなかったら、教会であるキリストの神秘体と完全に一致しているとは言えない。そして、その場所をオープンにする為には残りの部分が教会であるキリストの神秘性と一致していることが絶対的に必要なのである。その神秘性の部分における基本的観点は、世界を対象としていることであって、部分的にとしか神秘性のみのこととして捉えられるべきではない。そこで、キリストの神秘性に属するどの運動も、常に世界に向けられていなければならない、教会であるキリストの神秘性と世界とをつなぐ掛け橋となっていなければならないのである。

この基本点、「オープンのための一致」はカルボ神父の考え方や意識に非常に深く根づいた。神父は、婚姻の秘跡の教えにこれを結びつけた。一人の男性と女性が夫婦としてキリストの名のもとに結ばれ、聖なるキリストの体、教会の一部となるのであるから、夫婦は心を開き世界への掛け橋となって働かなければならない。本当に心を開くには、常にキリストと一体になっているよう注意している必要がある。そして、この様に暮らしていくには、二人は二人の関係においても、又主における夫婦なのだという点においても常に反省や修正を続けていくことが要求される。

次に、カルボ神父はスペインのチームにこの「一致とオープン」の教義のための靈操^{注27}を十分に体験してほしいと考えた。夫婦達にとって、彼等自身が活動に没頭してしまうことは訳もないことだったが、教皇の「呼び掛け」を満足させる為には、視点を自分達

^{注27} Essercitazioni

の外に向けなければならなかった。チームの一人ひとりが、オープンのための一致をしているという自覚を持っていることも必要であった。夫婦は単にその二人だけのため、もしくはその家族のためだけに結婚するのではなく、彼等が、彼等を含む家族を通して、神秘性と世界のほかの家族達とを結びつける役目を果たすためにするのでなくてはならない。カルボ神父は、この教えはもしこのチームがイタリアのモンドラゴンで体験することが出来れば、彼等のうちでますます深め、生き生きしたものとなるだろうと信じた。

こう考えて、カルボ神父はロンバルディ神父の所に「世界をつくりかえる」ために家族達に与えられた役割、を聞きに行った。カルボ神父は教皇の「家族の新たなる目覚め」を指摘したフェラール夫妻と始めて会った日のことを思い出していた。その時は、ロンバルディ神父は彼等をセンターに呼ぶべきだとは考えていなかった。神父は、彼等は教会の指導のもとにいれば安全だし、福音化の良き対象とは見ていたが、福音を述べ伝える必要性は見えていなかった。カルボ神父によれば、この時点でのロンバルディ神父は後にスペイン、フランス、南北アメリカで彼等が果たすことになる夫婦や家族のための指導者的役割には気付いていなかった。

スペインに戻ったカルボ神父は、グループの人達とローレス神父に、ロンバルディ神父としては、この夫婦と家族のためのグループが福音化する者になる訓練を受けることに、余り乗り気でないことを話した。ローレス神父はそれに対して気にすることなく今まで通り続けていくよう指示し、カルボ神父達一同はすべてを神の御手にゆだねることにした。

D.L.Pの総指揮者^{註28} ローレス神父は何人ものスペイン人聖職者を知っていた。これはローマにD.L.P創設者によるスペインの大学があるためだった。スペインの司教の多くは神学校時代をここで過ごしていた。

スペインの「よりよき世界」センターの基礎がため

スペインの司教の中には自分の教区のうちにも、遅れをとることなしに「よりよき世界運動」のセンターを創る機会を探している者もいた。この司教達は彼等の教区で「靈操」をして、その精神をもっと燃え立たせたいと願っていた。

^{註28} General Superior

スペインの司教はロンバルディ神父をスペインに招いた。この旅で、マドリッドを訪れていたロンバルディ神父は、そこで「よりよき世界運動」のセンターをスペインに建ててくれるようにと頼まれた。マドリッドのカトリック・アクショングループ^{注29}は神父にセゴビア近くのラ・グランジャ・デ・サン・イルデフォンソという場所を提供した。ここがスペインのセンターに予定された場所で、監督にはフェデリコ・ベリード神父とジュアン・アロンソ・ヴェガが指名されていた。

フェラール夫妻とリカルト夫妻は、夫婦や家族達を福音化する者として、1952年に出された教皇の「よりよき世界」への呼びかけを伝え広める役をになうことが出来ると信じていた。夫婦達はベリード神父に夫婦達も結婚した者の為の講義も受けられるように頼んだ。神父は、トレーニングは個人を対象としたものなので夫婦のためにはどうすべきか尋ねてきた。この夫婦はラ・グランジャでやっているコースを参考にしてみたらどうかと話してみた。ベリード神父はこの案を受け入れたが、それにはまず、この夫婦達がモンドラゴンの国際センターでのトレーニング・コースを体験する必要があるのではないか、と考えた。夫婦達もこれに同感した。

1956年7月「よりよき世界のための既婚者チーム」^{注30}からバスと2台の車に便乗して22組の既婚者がモンドラゴン^{注31}にやって来た。彼等はここでトレーニングを体験し、この構想を理解し吸収しようとしていた。彼等はまた、ここでの体験を是非スペインに持ち帰りたいと望んでいた。彼等は全教会と完全なる一致に至る広い構想を理解したいと望んでいた。彼等は自分達がたやすく自分達だけの動きに閉じこもってしまったり、彼等だけの見方に捕らわれてしまうことを知っていた。よりよき世界センター監督のロンバルディ神父は彼のチームとともに、「既婚者カップルと神父のチーム」^{注32}に教皇回勅「キリストの神秘体」に基づいた「教皇のよりよき世界のための大いなる呼びかけ」を手渡した。

オアシス運動

センターにいる間に、彼等は近くにある他の運動センターも訪れてみた。ヴァジニオ・

^{注29} The Catholic Action group in Madrid

^{注30} Matrimonial Teams for a Better World

^{注31} the International Center at Mondragone

^{注32} " Matrimonial Team of Married Couples and Priests"

ラトンディ神父^{註33}はロンバルディ神父の古くからの親友で「よりよき世界運動」の創設時には良き協力者でもあった。ラトンディ神父は説教で、多くの若い層を含む信者に感動を与えていた。神父は教皇の呼びかけが若者をもその対象に含んでいると考えていた。そこで、若者のために「オアシス運動」を創ったのである。「オアシス」の由来は、精神面から見て彼等の住んでいる世界を砂漠の様だと喩えたのである。この運動は砂漠にあるオアシスのように、餓え渴いている彼等の霊的必要性に命の水を与えより深く癒し元気づけることにあった。このコースを体験した若者たちは、すべてを神の御旨、特に男女間の関係、に任せて生きていく誓いを立てることになっていた。これは、聖母マリアの天使よりの受胎告知の話から来ていた。聖母マリアの『yes』を真似て、一時的な貞潔の請願まで立てていた。

『yes』の心はスペイン人夫婦達の胸にも深く浸透した。この夫婦達は今でもその時のオアシスでの『yes』を「非常に感動した、まるで踏み絵を体験した様だった、これは既婚者の精神修養のために、既婚者のためのチームのオリエンテーションのために役にたつものだ」と述べた。ラトンディ神父に導かれて、神・イエズスへの『yes』を体験したこの夫婦達は、生涯を通して最も霊的に有意義な姿勢を味わった思いであった。そして、この言葉は神の言われるままに全て従うという気持ちの象徴となった。この形式はスペインに持ち帰られた。イグナシオ・レノンによれば、この言葉がチームと、その参加者達の「基準」となったということである。

よりよき世界運動の波及

「よりよき世界運動」と「既婚者チーム（ロンバルディ神父の）」は親交を深め1957年6月にはラ・グランジェ^{註34}での初コースに4組のカップルが参加することになった。ホセ・ラモンとエレナ・リカルト・カラタラは古くからよりよき世界運動で活動していた人達で、既婚者チームをセゴビアに行かせただけでなく、ロッカ・デ・パバに移動してしまった国際センターへスペインチームを行かせた人達でもあった。ホセとエレナによれば、この動きはセゴビアで度々、定期的に行われているということである。このコースは、それに参加する者達の態度を「オープンの為の一致」という趣旨をより深く学び、それに沿って生きたいという熱心な姿に変えていった。この運動を取り入れたおかげで既婚

^{註33} Fr. Virginio Rotondi, S.J.

^{註34} La Granja

者チームの、オープンという態度はしっかりと地に着いたものとなっていった。

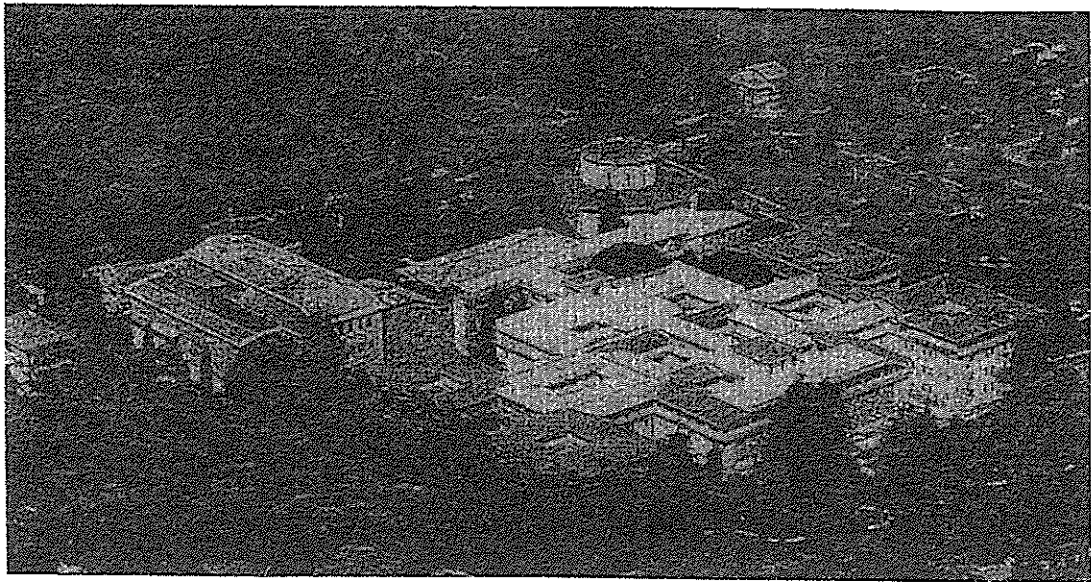
よりよき世界運動の精神の実りと美点は、既婚者チームにも顕される様になってきた。希望、信頼、寛大さ、愛等にそれを見られるようになり、バルセロナの司祭達はこれを島々を含むスペイン半島の他地域の夫婦達へも広げていった。聞き知った夫婦達は、同じ動きが彼等の教区でも起こるよう各自の司教へ申し出た。こうして1957年末までに、この動きは多数の教区にまでその波紋を広げていった。

また名前にも変更がみられた。指導者達は従来の名前が他の運動のと似ていて混乱を生む恐れを感じた。「よりよき世界運動」^{注35}と「既婚者カップルと神父のチーム」^{注36}とは、全く意を異にしていた。このことは1957年11月の「霊操」コースの時に、フェラール夫妻によってラ・グランジャ氏に提案されたことであった。彼等はもちろん賛成で、この提案に感謝した。討議の末、スペイン人夫婦達は自分達の集まりを「ピオXII世のための既婚者チーム」^{注37}とすることに決めた。それは、教皇ピオXII世が彼等の基礎に影響を与えた方であったし、教皇のお言葉こそがよりよき世界にしていこうという運動の基礎になっているからであった。ジェイミー・フェラールは彼等のチームでは1957年から、そして1958年1月1日以降の発刊物にはすべてこの新しい名前が使われるようになったと述べている。バルセロナの大司教も、その年の5月12日にその名の変更を認可された。

^{注35} the Better World Movement

^{注36} the Matrimonial Teams for a Better World

^{注37} Matrimonial Teams of Pius XII



Rocca Di Papa Center For "The Better World Movement"

CHAPTER IV

ロッカ・デ・パパ^{注38} への旅、1958年

1958年3月チームの人数は3倍に膨れ上がり、何とかしなければならない必要が出てきた。この運動がスペイン各地でますます盛んになるにつれ運動は増々全国的なものとなっていった。そしてカルボ神父は全国を対象とする司祭に、フェラル夫妻は全国を対象とするコーディネイターに推薦された。4月になって、この全国チームは他教区のチーム訪問をも始めた。

フェラル夫妻とカルボ神父は、19組の別々のグループを一つにまとめ、力をより活発なものとしていきたいと願い、6月にマドリッドで、リーダー達の集いを持つことを提案した。このミーティングで両者はすべてのグループは同じ一つの存在理由と構想を持つべきだと提案した。そのためにはすべての夫婦達、司祭、そして特に各組織^{注39}のリーダー達がラ・グランジャでの「練習^{注40}」を体験する必要があるのではないかと述べ、聖母マリアのチームを除く全員が賛同した。こうして、じきにスペインでの全国的規模のミーティングはラ・グランジャで開かれることになったのである。

ロッカ・デ・パパへの旅の決断

^{注38} Rocca Di Papa

^{注39} 教会内における組織のこと

^{注40} Ejercitaciones por un mundo major

ラ・グランジャでの「よりよき世界のためのトレーニング」は1年半にわたって行われ、すべての組織、特に既婚者チームにとって実り多いものとなった。このトレーニングは、スペインでの既婚者と家族のための使徒職にとっての大きな助けとなったが、フェラール夫妻とカルボ神父は、これはあくまでも国内での会であって、本当の意味での世界的見方に立った体験を得るには限界があると感じた。全国的環境と体験が増すことによって既婚者チームや他の既婚者のグループは、教会の使命に対する広い理解をする様になると共に、運動の本来の意味にもふれる機会を与えられるようになった。ピオXII世のチームと他の夫婦、司祭達が加わり、1958年8月ロッカ・デ・パパのトレーニングを経験することになった。彼等はそこでの彼等の願いや計画の中にひそかに、ロッカ・デ・パパ近郊のカステルガンドルフォ^{註41}で夏の間を過ごしておられるピオXII世との単独謁見を加えていた。

1958年8月にロッカ・デ・パパへ行くという計画は、8月6日から13日の間に新しく今までとは全く違うコースが開かれる、というピオ国際センターの報告を受けて急きよ決められた。これはセンターの指導者達、ロンバルディ神父とその助手達、ヴァージニオ・ラトンディ神父、そしてフランシスコ会のジュアン・パブロ・バルデットによって計画された。そしてラ・グランジャでのトレーニングを受けた者だけに参加資格を与えられた。このコースがスペイン語で行われるというのがその具体的理由であった。

フェラール夫婦とカルボ神父、そして夫婦達は、1958年5月にリカルド神父とウルグアイからの3組の夫婦達をスペインへ訪問をしたことによって決意を強くしていた。リカルド神父はラテン・アメリカで受難会^{註42}の司祭として働いていた人で、クリスチャン・ファミリー・運動^{註43}と言う名の既婚者の集まりをつくっていた。このチームは在世会の使徒職・第2回大会^{註44}に参加するためにローマを訪れていた。その機会を利用して、彼等は個人的によりよき世界運動を訪れ、スペイン人夫婦達のことを聞いたに違いない。この南米のクリスチャン・ファミリー運動の代表者も8月のロッカ・デ・パパに呼ばれていた。彼等はスペイン夫婦を訪ねようと決めていた。

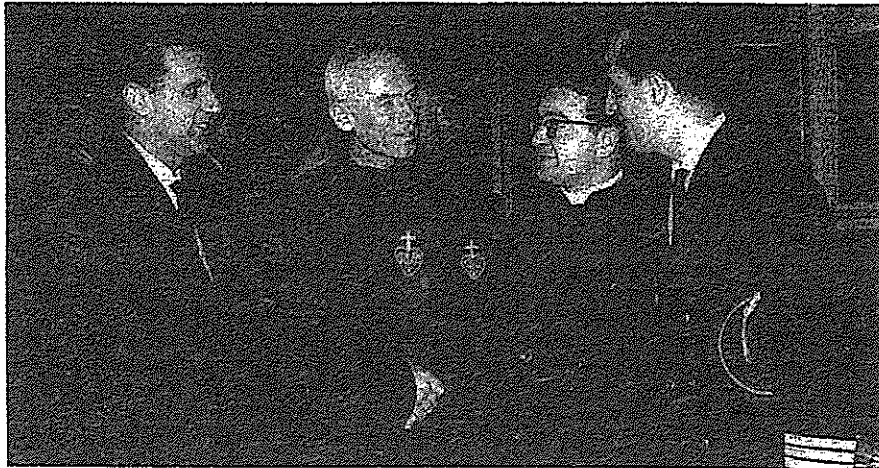
^{註41} Castalgandolfo

^{註42} Passionist

^{註43} the Christian Family Movement 「家庭会」

^{註44} the Second Congress of the Secular Apostolate

5月の終わりまでに、彼等は後になって彼等の将来に非常に重要になる旅の支度を始めていた。夫婦達、特に行くことになっている夫婦達は彼等の靈的生活に神経を集中していた。彼等は手に手をとって祈り、神に彼等の判断をゆだね、ロッカ・デ・パパでの収穫と参加しているすべての人達への満足の行く結果になるよう懸命になった。



*Fr. Richards (with the Cronx Heart) Fr. Calvo - José R. Ricart
(left) Captain of the Plase (right)*

ロッカ・デ・パパへの旅

(1958年9月19日ー20日、バルセロナ新聞)

(ホセ・ラモン・リカルドとエレナ・リカルド夫妻の記事より)

多くの夫婦達は、自分自身が直接参加する、しないにかかわらず、悩みや困難を克服するために疲れを知らず寝食を忘れて準備に没頭した。彼等は必要書類を入手する助け、仕事を休む許可を得るため、子どもを親戚や友人へ預ける助け等、様々な形で働いた。参加者が費用のために行けるチャンスを逃さずに済むよう足りないところは他の人々によって補充もされた。

このグループは100組の夫婦と7人の司祭、そして7才から15才までの何人かの子ども、母親を必要とする赤ちゃんふたりとで成り立っていた。彼等の多くはピオ教皇のチームからであるが、もちろん他の会からの参加も加わっている。参加者はスペインのあらゆる都市（アルファラ、アヴィラ、バルセロナ、ビルバオ、ジェローナ、ハロー、レリーダ、マジョルカ、マンレッサ、マルシア、パンプローナ、サン・サルディーニ、セゴビア、ヴァレンシア、ザラゴサー）から来ていた。グループはバルセロナの保護者、憐れみ

の聖母マリアの大聖堂^{註45}で祈り、8月4日午後4時半の列車で出発した。

彼等は旅の間中、毎時間ごとに特別な意向のために祈った。グループのメンバーはその都度、祈りの時間が来たことを知らせるベルを鳴らしながら列車中を歩いた。聖母マリアに天使祝詞を祈った。この行動は他の乗客にも移っていった。又、度々4・5人の夫婦が「チーム・ミーティング」の方法に従っての会合をも開いた。

ローマでは、まだローマを訪ねたことのない夫婦のために2・3日見物の機会が与えられた。他の者たちは2台のバスに乗ってロッカ・デ・パバを目指し、真夜中に到着した。彼等はセンターのスタッフのあたたかい歓迎に心から喜んだ。彼等の気持ちは期待とこの聖地巡礼から受ける実りを予感してふくらんだ。

スペインを出発する前に、彼等は教皇が病気であるにもかかわらず、彼等に個別に会って下さるかも知れないという情報を耳にしていた。期待と個人的謁見の確信は彼等をどんなことにも耐えさせ、その旅を完べきにするためにはあらゆることをいとわない状態にしていた。その上、参加していた司教の多くは「靈操」と、聖なる父との謁見の大切さを悟ってその願いがかなう様にと言ってくれ、祝福の手紙まで持たせてくれていた。このことにスペインの司教がいかに支援をしているかを感じ取ることが出来る。一方夫婦達はこれから体験する「靈操」から成果をあげることに、ある種の責任を感じるとともに、教皇との会見が司教と、彼等を待っていてくれる仲間の信徒への最も価値あるみやげになると確信していた。

失望

ロッカ・デ・パバにつくとすぐに、彼等は教皇が病状重く、すべての個人的謁見はキャンセルされ、参加者達は全員8月6日の夕方に開かれる一般の謁見場へ行かされることになるだろうとのうわさを耳にした。このキャンセルは彼等にとって絶望的な出来事であった。失望とあせりが募った。事態解決のため司祭共々、彼等は祈りに祈った。彼等は又、御聖体の前でもこの「巨大で、彼等には克服することの出来ない困難」の解決方を是非とも示して下さいよう神に祈った。

^{註45} the Basilica of Our Lady of Mercy, Patron of Barcelona

教皇の聴罪司祭ビルヒニオ・ラトンディ神父^{註46}は、スペイン司教が預かってきた多くの夫婦達からの手紙を集め、カステルガンドルフォへ差し出した。そうすれば教皇は全体謁見場へ出られる前にそれに目を留め、特別にスペイン人グループの人達に挨拶を下さると考えたのである。

8月6日の教皇謁見

翌日、水曜日の午後5時までに教会の庭には、彼等を含め5,000人を超える群衆が集まっていた。マダガスカル、アイルランド、カナダ、フランス、ポルトガル、ドイツ、ブラジル、イタリア、そして他の国々からも来ていた。余りに大勢で、庭から外にあふれていた。人々はそれぞれの自国語で聖歌を歌っていた。とても暑い日だったが誰一人文句を言う者もなく、ただ教皇の出でこられるのをじっと待っていた。

6時少し前、教皇はバルコニーにお立ちになった。教皇は熱心にそして、興奮気味に挨拶をされ祝福を与えられた。いつものように、すべての人をねぎらわれ彼等の望みがかなうよう祈られた。心をこめて祝福と挨拶をされた後、教皇はあるグループに後で会いに来るようにと言って下さった。もちろんスペイン人グループのことであった。

謁見の間、ラトンディ神父はスペイン人グループと一緒にだったが、何が起こったのか分からない様子だった。神父は深い祈りのうちにあって、突然、現実に引き戻された様な気がした。この時、一人のバチカンの私服護衛兵が神父の元に来て、謁見の後で来るようにとささやいた。ラトンディ神父は「はい」と答えて、又祈りに入られた。スペイン人グループはこの変化に気付き、何か重大なことが起こる予感で皆して祈り始めた。教皇は手を掲げて皆を祝福され、そして退場された。

庭を出ながら歓喜の歌声はますます高まった。ラトンディ神父はゆっくりとパレスの階段を内へと昇っていった。夕食の前に「教皇はあなた方との個別の謁見を許可された。謁見は8月10日、日曜に予定されている」との知らせがバルデット神父から伝えられた。

^{註46} Fr. Virginio Rotondi, the confessor for Pius XII

ロッカ・デ・パパでのコース

そうこうするうちにセンターでのコースが始まった。センターにはそこの特徴を顕した構造に出来ていて、独特の雰囲気があった。場所はちょうどアルバノ湖の丘の上に位置していた。どこにもドアはなく「オープン」というシンボルが物語られていて、来客を歓迎しているようだった。8月15日の聖母被昇天祭^{註47}のために、教会には聖母マリアに仕える12使徒がおかれていた。建物の1階には大きな会議場、事務所、食堂や教室があって、トンネルによってセンターの翼のような形に広がった生活空間と結ばれている。各部屋は質素ながらもきちんと家具が置かれていた。建物の廻りはオープンテラスになっていて外でも会議が出来るようになっていた。

スペイン人と南米のグループの人達は、既にコースの「霊操」を経験してしまっているので、通常のととは違ったもので行われた。ロンバルディ神父は参加者全員が前回は終了して、決心が出来ていると言う前提で、この特別なトレーニングをしたいと望んでいた。神父は彼等みんなに新たな見方を見つけて欲しかったが、特別なゴールは示さなかった。言い換えれば、彼等に知らされたのは、出発点と方向、すなわち結婚と家族のための霊性ということだけであった。程度の差はあるが既存のいくつかのグループによっては、こうした霊性を持ってはいても、一般的にはクリスチャンに当てはまるどころか実際にこのような霊性はまだはっきり定義さへされてはいなかった。結論は、もちろん「よりよき世界」すなわち神の御旨の通りに生きていくことであった。しかし、絶対的で、完全に近いこの答は初めから決められてはいなかった。「コースはあたかも、集会在常に改められる教会活動とクリスチャンの家族を生き生きとさせるための現行の努力との間にある相互作用に付いて考えるためにもたれたかのようにデザインされていた。」

スケジュールはかなり過密に出来ていた。特に、夫婦達が彼等の意見や体験を交換するときにそれが見られた。コースはパルデット神父のお話しに始まり、それに”対話”のミサが続いた。神父の祈りは常のごとく、彼等を元気づけ好奇心を与えてるものであった。朝食（10時30分）後すぐに、1時間から1時間半にわたるロンバルディ神父による第一回目の教義がもたれた。そして、各地方から集まった参加者達はグループに分かれて各自の体験や目的、問題点についての分かち合いが行われた。昼食後から5時半までは自由時間で、勉強したり、復習や祈り、そして休み等に使われた。晩には、ロンバルディ神父とも

^{註47} the Assumption

う一人のスペイン人神父によって教義がもたれ、日程が終了。そして最後に、ロザリオの祈り、短い聖体拝領、夕食そして後は、その時々メンバーの即興による余興で楽しまれた。最後に礼拝堂でその日への感謝と夜への祈りをして一日が終わり、床についた。

オアシス運動と参加者達

ラトンディ神父はスペイン人のグループに非常に興味・好奇心を抱いた。カルボ神父はラトンディ神父に、このグループがオアシスを体験して誓いをたてる事が出来るかどうか尋ねた。ラトンディ神父が若い人達に「神の国に生まれた」ことを体験させようとしているならば、カルボ神父は結婚や家族のためにも使えると考え、その可能性を尋ねた。純潔に生きることの誓いとともにより若い人達は出来るだけ毎日ミサにあずかること、そして聖体拝領することを誓い、少なくとも一日のうち10分は告解し、最低月一度は教義とロザリオの祈りをする事も約束させられていた。スペイン人グループの人達はすでにこの生活をしていた。ラトンディ神父はオアシス運動に加わりたい人がいることを知って喜んだ。何組かのスペイン人夫婦達がこれに参加した。彼等にとっては『yes』の精神はすでに彼等の生活の一部になっていた。彼等は自分達も若者のオアシス運動に似た集まりを造れるに違いないと考えた。彼等にとっては貞潔を誓うことは教会の教えにあるように、神の御計画に沿った夫婦生活をする事に他ならなかった。

何人かがこの結婚による夫婦の貞潔の誓いを取り上げた。彼等は他の人の前で改めて認めることでますますクリスチャンのカップルとして認められると信じた。今日になって、カルボ神父はこの時の彼等の誓いを預言的行動、英雄的行動と呼んでいる。ジェイミーとメルセデスもその中の一組であったが、その時のことを下記のように述べている。

「この誓いによって私達は他の仲間と共に神の御力と、神への忠誠とそして恩寵のうちに私達の信仰を表現することが出来た。これらは婚姻の秘跡ゆえに私達の結婚生活を通して常に賜っていたものである。この行動によって結婚した夫婦は神の寛大さの証人となったのである。恩寵を賜わる寛大なる神へは感謝と高潔な行為によってでしか、報いることは出来ない。」

メルセデスとジェイミーはリカルドとロサリオ・フェラール、ジェイミーの兄弟と義理

の姉妹、そしてその他の人達は、同様に次の様に述べていた。神のたてられた結婚のための御計画は夫婦たちに深く根付いており、夫婦二人と家族生活に深くて心の底からの喜びや実りをもたらしてくれた、と。又、この体験には、この誓約が必要不可欠であるとも述べていた。

CHAPTER V

教皇との謁見と"FAC"運動

ロッカ・デ・パパ、8月10日(日)の早朝、教会ではスペイン人グループはミサの補助を、そしてコースで講義をしていた司祭がミサを執り行っていた。朝食後、拡声器は彼等に8時30分にはカステルガンドルフォでの個別の謁見に出発するようくり返し告げていた。センターの2台のバスと数台の自家用車がセンターの表玄関で彼等を早く連れて行くために待機していた。第一陣がロビーに現れると人々はその特別な日の興奮に胸の高鳴りを感じていた。彼等のめかし込んだ様子にあたりは華やいだ雰囲気にも包まれていた。中の一人は「妻を探そうとしても黒ずくめの婦人達ばかりで見つけるのは難しかったし、皆が誇らしそうに胸をはっているように見えた」とその時の光景を表現していた。

カステルガンドルフォまでの湖沿いの道の里は短かった。日はさんさんと照り、朝の空気が新鮮だった。ロンバルディ神父はドン・カサールとマリー・カルメン^{註48}というより『良き世界運動』のスペイン人秘書二人と一緒に小さな車で向かった。彼女がここにいるのは当然で彼女は長いことコースの「守護の天使」として存在していて、1957年までラ・グランジェのセンターの院長をしていた。そこで彼女は既婚者達が『よりよき世界運動』から精神的に豊かな実りを手に入れているのを見ていた。カステルガンドルフォに着いた一向は教皇官邸に入り、案内の人に連れられていくつかの広間、部屋を過ぎてあるドアの開まった部屋の前にやって来た。そこでロンバルディ神父はじめ一同は、背後の部屋に入るように案内をもらうまでの数分間を極度の期待感に震える思いで待った。彼等は前席の方を残して席に着いた。

ロンバルディ神父はそこを他地方からのグループに、そして何より一番いい席はウルグアイからのクリスチャン・ファミリー運動の代表者に開けておくよう伝えた。あと少して午前9時30分になるという時、ドアが静かに開いてある司祭の凜とした、熱のこもった声が響いた。「教皇様がお見えになりました！」

彼等は一斉に膝まづき、部屋には拍手が鳴り渡った。そして教皇は非常に遠くから来られたように、「そして愛する者たちに会いに来られたように、御自身をすべて与えるかの

^{註48} Don Casale & Mari-Carmen

ごとく両腕を広く広げて」入って来られた。教皇は一段高くなった台の椅子につかれ、一同をうなずきながら優しく御迎えになった。教皇に続いて入場した司祭は少し離れたところに控えていた。教皇は法衣の袖から4つにたたんだ紙を取り出された。それを開かれた時、会衆の何名かはそこに何ヶ所も教皇自身が書き加えられた筆の跡を見つけ、教皇が自分達のために特別にその声明を書いて下さったのだということに気づいたのである。

教皇のメッセージ

教皇はスペイン語で読み始められた。

「時間も場所も限られてはいるが、我々はあなた方と単独にお会いしたかった。最愛なる兄弟姉妹達よ、選ばれた人々よ、短いが特別の挨拶を送ることにしよう。これはあなた方へ父としての心からなる愛情を与えるだけでなく、よりよき世界への既婚者チームの運動に対する関心の表明でもある。」

「世界をその根底からつくりかえるというのは途方もなく困難な仕事である。しかしもし本当に望むなら最初の構成単位である家族を堅固にすることがなりより必要となってくる、家族は常に社会の基本をなす核と呼ばれてきた。それがどんなであれ、全体はそうしたものが集まって形づくられていくのだ。」これは悪と逃れられない欲望の力に立ち向かおうとしている彼等にとっては分かりやすい話であった。

「だから、あなた方の家庭を常に神が栄光を表される真に聖なる場所にしなさい。そこは共に礼拝を護り聖体を受ける最も小さな単位の所である。そこはまた神の法が遵守されているところ・その一つ一つの家庭が家族生活の義務を通して完全になることを熱望するところ・教会にふさわしい人達の精神を作り上げるところ・自分のためになっけてくれている人達を十分な温かさと灯で照らしてくれるところ・神が心を休められるところなのである。」神は、ここが神の聖なるところであり、崇拝すべき信仰が終わることなく持ち続けられているところだということを知っておられる。

頑張ってください、ここに集う人々よ、えりぬかれた人々ゆえに他の人達のためへの義務をも負っているのだ。がんばろう、スペイン人の家族の人達、キリスト教の美德を備えた人びとよ！「頑張ってください、全世界の人々よ！この世界を聖なる神の世界にするために！そこではキリストがあなた方の歩いていく見本となり、あなた方の力と永遠なる慰めとになるであろう。」

「そして、これだけが人類が、家族が、そして一人ひとりの魂が平和と慰めに至る道であって、他に方法はない。」

「我々は心からなる祈りを捧げた。我々の誓いが神の元に届き、そのような崇高なる構想がじきにかなえられますようにと。
(訳及び注釈：著者)

教皇のメッセージはゆっくりながらも一種のメロディーを帯び、はっきりしたスペイン語で語られ、彼等は時の経つのを忘れた。聞き終わって、彼等は教皇が非常に長く話して下さった気はしたが、それでももっと話してほしいと思った。バルセロナの新聞記事によれば教皇は実際には2分間であったことが記されている。その記事の記者は、なぜ教皇のお話が実際の時間以上に長く感じられたのだろうと疑問に思った。夫婦達が教皇の言われることを一言も聞き逃すまいと夢中になっていたからだろうか。それとも、教皇が彼等の何年もかかってゆっくりと規律正しく歩んで作り上げてきたアイディアと教えを厳格に取り上げられ、それに対して彼等の羊飼いであられる神は力を貸して下さると言われたからなのだろうか。または、今までになかったような大きな手助けと、重大な責任を果たす第一歩を彼等に力説されたからであろうか。それとも、これらすべてのことが合わさって彼等に時間を忘れさせたのかもしれない。

この教皇の声明は彼等の心深くに刻まれたが、それとともに教皇も彼等とその声明の重みを感じられていた。「世界を根本から造りかえる」という1952年の教皇声明からの引用は、教皇が『警告の叫び』への返答とされているのだということを改めて気付かされた。その上さらに、教皇は家族は単に家族だけの聖性な場所なのではなく、家族の生活こそこの目的をかなえていくための中心的存在なのだと強調された。そして神の御意志のようにこの世界をつくりかえるには家族によって、家族から始める以外、達成する道はない

ということを力説されたのである。

彼等は、本当にそのような家族生活をしていくには、この教皇の言葉について話し合いを重ね、完全に納得する必要があると考えた。また、この言葉が彼等の人生の青写真になること、彼等の信仰を呼び起こさせるものであるとも理解した。バルセロナ新聞の記事には、教皇の言われる「神の超絶性^{註49}」は「彼等にまっ先に歩んでいるのだという自信を持たせることによって、彼等の最大限の価値を靈性の最も新しい分野に到達させることができるに違いない、すなわち結婚した者達の普段の靈的生活・夫婦として、福音化する者としての輝きのための家族の靈性の成長を自信をもって進めて行くことが最良の価値に導くことだ」と言うことではないかと載っていた。

スペイン人グループは熱に浮かされた様な気分のまま、ロッカ・デ・パパに残りのコースをこなしに戻ったが、今までと違って自分たちの目指すゴールや責任をよりはっきりと心に描きだせ、また説明することが出来た。

「FAC」運動の影響

スペインへの帰路、彼等はアルプスのふもと、ミラノの北に位置するヴェラーテ・デ・ヴァレッセ^{註50}という村に立ちよった。この旅で彼等は非常に深い感動を受けた。ここには「ほほ笑みのマリアの村」^{註51}がある。村は学習の中心になっていて、『よりよき世界運動』の精神を発展させ、広めるための体験を提供していた。この村のモットーは「FAC」といいラテン語での『動き』を意味した。運動のリーダーは、ポーロ・アルナルディ神父^{註52}でサレジオ会の司祭であった。経験のために使われている広場はかつては小教区のものであったが、他のグループにも影響を及ぼす様になった。村の精神にスペイン人夫婦達は興味をおぼえ、そのコースの詳細を知りたい、と思った。ヴァレッセでのトレーニングコースはロッカ・デ・パパのそれより簡単であった。コースは、2～3日で「キリスト教思想の偉大さ」を一応学び取らせるようになっていた。このコースの要素は「キリスト教徒としての戦いは、もし望むなら行動主義者として、社会で使徒職の家族の一員

^{註49} "the transcendence"

^{註50} Velate di Varese

^{註51} the villa Sorriso di Maria(Villa of the Smile of Mary)

^{註52} Fr. Paolo Arnabaldi, a Salesian priest

としてキリスト教の教義を豊かに明示して神の役に立つ」ことであった。プログラムはすべて二つの焦点にあわせられていた。それは、このキリストの兵士となって神のために働く意志があるかどうか、あるとしたら、いかにして働いていくかという二点であった。

これらの問いかけとモットー『動き』とは、彼等がロッカ・デ・パパの旅から地元スペインへ持ち帰った信条となった。彼等は教皇の示された通りに道を歩いていく決意をしていた。彼等は教皇の「家族を聖性なるところの中心にせよ、他の家族のために努力せよ、他のために奉仕せよ」という言葉を励まし力説されただけでなく、自分達に与えられた使命、任務として受け取った。

スペインへの帰路、彼等は神に与えられたこの実り多い旅への心からなる感謝で満たされていた。彼等は又、いついかなる時に神から何を求められようと、ただ『yes』と応える覚悟、「霊の受諾」、すなわち「FAC」の心構えが出来ていた。

彼等は目的を達成した満足感と熱のこもった思いとで故郷へたどり着いた。この気持ちは10月になってより高まることになった。10月9日教皇が御帰天されたからである。彼等との単独謁見から2ヶ月ほど後のこの出来事は、彼等にあれが教皇からの遺言であったと受け取れたからである。彼等にだけ向けられたと信ずる教皇の遺言は彼等の使命感を炎の様に燃え上がらせた。そして、教皇の講義の一句一句が行動に的確につながるよう注意しながら学び、既婚者グループ、家族の人達へ正しく伝えていくようにつとめた。

CHAPTER VI 既婚者チームの基本観念

前述の出来事にはチームの者達がこれこそ『時を告げる印』だと思ふような事がいくつ
かあった。その「印」のおかげで彼等は自分達の活動や、1958年8月10日に出された教
皇の言葉にそって、生活し使命を果たそうとする人達への案内書を作る為に必要な方法、
目的の基本的要素などをきちんとした文書にする必要を感じるに至った。

『時を告げる印』

印としてまず初めに挙げられるのは、彼等に賛同してくる夫婦達の急増であった。ロー
マから感激して自分達の教区に帰ってきた人々は、今までに起こったことを懸命に伝え歩
いた。司教へは、彼等が教皇から直々賜ったと信じる使命や役割についても語った。既婚
者チームをまだ持たない教区の司教達は自分たちの所にも同じ様に作りたいと思った。こ
うして新しい既婚者チームは、島々の隅々にまで及ぶスペイン各地に作られるようになった。

その2。翌1958年9月、リカルド神父がバルセロナに戻られた。神父はこの既婚者のた
めの、家族のための組織が急増するだろうと予知していた。実際、79の別個の組織が出
来、そのどれもに人が倍増していた。Team of the Holy Family, Clubs of Married
Couples, Groups of Cana, Apostolic Work Groups, Nazareth Groups of Families
等は初期に出来たものである。リカルド神父はカルボ神父とメルセデス・ジェイミーに、
かって南米でやったように、すべての異なった団体が一つの組織にまとまるべきだと告げ
た。なぜなら、そうした一つ一つが本当にしっかりしたものになるまでには、時間と各自
の奉仕が是非とも必要であったからである。この団体を一つにしていく為に全力を投じる
ことが、教皇のチームの特別なゴール（特にリーダー達にとって）となった。こうした
組織を生み出すのに必要な条件のひとつは、先ず、本来の趣旨を理解していること、そし
てどのように参加し、教会や団体内の他グループにどのように働きかけていくかというこ
と等があげられる。

その3、1959年から1960年の間にチームの独自性をより明らかにするいくつかの出来

事があった。1959年1月、教皇ヨハネXXIII世^{註53}が教会の刷新の為に第2回ヴァチカン公開議への召集をかけられたのである。スペイン人夫婦達は、きっと結婚や家族のための靈性も含まれているに違いないと確信していた。もし彼等が確かな手順を踏んでいたら、この靈性の発展の為の助けを担えたかもしれない。次の出来事は1959年11月で、第2回家族使徒の国際集会在スペインで開かれたことである。これを経て、結婚と家族の靈性についてのより深い認識が向けられるようになった。こうしてこのチームに、より明白な趣旨と方法を作り上げる必要とを自覚させることにもなった。

1960年、何組かのスペイン人夫妻がロッカ・デ・パパに、国際的雰囲気の中でのコースを体験する為に行った。この夫婦達は教皇ヨハネXXIII世の祝福を受け、教皇は彼等の運動の重要性を繰り返され、夫婦としての、家族としての靈性向上の道を励まされた。この教皇のお話はピオ・チームのもう一つの基本的書物となった。

1960年11月、第3回全国集会在マドリッドで開催された。集会是スペイン司教で家族のための会の会長をしているビンセント・P・エンリカ・タランコン司教^{註54}の進行で進められた。会期中に多くの結婚や家族のための違ったグループにMOCEAM^{註55}を作ることによって掛け橋が渡された。司教は活動をより活発にする為には教皇のチームをもっと大きく育てていくように、とカルボ神父を激励された。そして司教自身は彼等の監督顧問とされた。

その4、この時期になると世界中の既婚者のグループの間でいろいろなことが起こってきた。パリのアビー・ヘンリー・キャファレルの「聖母マリアのチーム」、ウルグアイのペドロ・リカルド神父の家族運動、スペイン各地での広がりと言ったものだけでなく、1947年にはパット・パディ・クローリー^{註56}がアメリカのシカゴにCFM^{註57}を設立し、この運動はカナダにまで及んだ。どれも初めは、互いに知った指導者をも持たずに始められた。そして、ローマやロッカ・デ・パパでの「話」やふれあいを通して彼等のことを次第に知るようになっていった。カルボ神父はこの当時のことを回想して「同じ靈・神の靈が、

^{註53} Pope John XXIII

^{註54} Bishop Vicente P. Enrique Tarancon, the secretary of the Spanish Episcopate and the president of the Family Life Commission in Spain

^{註55} Movimiento Catolico de Espiritualidad y Apostolado Matrimonial (Catholic Movement of Marital Association)

^{註56} Pat and Patty Crowley

^{註57} the Christian Family Movement

世界中の既婚者の間に沸き上がってきた印だ」と言っていた。

これらの目覚ましいはっきりとした『時の印』を見て、スペイン人夫婦達のチームは2つの課題、「叫び」に応える為にはどのように生きていくべきか、そして他の人達に伝えていくにはどうすべきなのか、に応えていく使命へと強く踏み出し、『yes』と『動き』に対してより明白に、信仰深く立ち向かっていった。ロッカ・デ・パバへの旅、そして教皇ヨハネXXIII世の謁見は、ピオXII世グループに文書、「ピオXII世チームの基本的観念とその方法」を作り上げさせる大きな原動力となった。夫婦・司祭達は自分たちの生活の仕方を参考にこの書類の内容を考えあわせていった。この文書の目的は彼等に加わりたい夫婦達すべてにその靈性を知らせることにあつた。この考え方と方法はとりもなおさず、マリッジ・エンカウンター・プログラムの目的と発展の基本となるものである。

又、1958年から60年にかけて、カルボ神父は『動き』の靈性を生活態度として受け入れやすいように3段階の概要にまとめ上げていった。次の章では教皇グループの基本的考え方と、カルボ神父のまとめられた概要を含むその方法を述べていくことにする。

考え方のポイント

第1点目

チーム・『動き^{註58}』

教皇ピオXII世チームの根本的な概念は『動き』にある。教皇ピオXII世の「根本から世界を造りかえる」という呼びかけへ応えるために、彼等は結婚生活において「完徳に向けての積極的向上」をする為に勤める様になった。チームのメンバー達は互いに励ましあい、クリスチャンとしての夫婦や家族のあり方をより良く変えていくために努め始めた。

『動き』の概念はチームが常に行動的でダイナミックな心構えに基づいていることだが、それは元来『動き』という言葉が続行といった意味を含んでいることにもよる。チームのメンバーにとってはこれは、昨日の靈的状态で今日いることに満足する者はいないということになる。そこで受け身的態度で、そこに留まっていたり、すでに満足の行く点に到達してしまったと思っている人達は、本当の意味ではこの活動に参加しているとはいえないのである。この様な人達は、外見上は参加しているように見えるが、神の前に在って^{註58}「運動」とは違った意味

は、隅っこにただたたずんでいるだけで、常に生き生きと、互いを高め堅固な心でいようと日々努力をし続けている訳ではない。こうした理由から「基本的項目」として夫婦達はクリスチャンとしての完徳を目指して努力をしていくことを強調しているのである。神はすべての人に完徳を要求されている、一人ひとりが神の言われる姿になるよう叫ばれている。夫婦はその結婚を通して家族生活のうちに完徳になるよう要求されている。クリスチャンとしての完徳さはそれが現れてくるように活動し続けることにある。これらの夫婦達にとっては、それを目指して努力するということはすなわち「常にもっと」動き続けているということなのである。この完徳へ向けての『動き』が夫婦・家族の日々の生活の構成要素なのである。

そうした『動き』にはある骨組みが必要となるが、それはその場に適した簡単で、その上持続性があることという点が要求される。骨組みは『動き』だけを目的としていなくてはならず、骨組みのための『動き』であってはならない。そこで骨組みがこの組織のプランしているものを越えないように気をつけることが大事で、常に最小限のものでよく、家族や社会をキリスト教的に建て直すため、夫婦の精神を高めるために必要なレベルがありさえすればそれでよい。

メンバーの人達は自分自身が、教皇ピオXII世のお言葉を通して教会から伝えられた『警告の叫び』への応えを堅く護っていく者だと信じ、またそうなろうと努めた。彼等は彼等とその家族達によってはじめた、世界の建て直しへの力になるという決意と、その決意の確かさを互いに分かち合うためにチームメンバーとして互いに会ったのだと考えているのである。

第2点目

結婚のための靈性の特徴

チームの人達は結婚の靈性にはそれぞれ特有の特徴があると感じていた。このことは折にふれ、わずかずつ無意識に近い程度で話され、自分達のものとして納得されていった。結婚の靈性の根底となるのは『相互の信頼』である。この『相互の信頼』とは自分達の結婚生活の中の自然な、また神秘的な視点において夫婦がお互いに自分の考え、心をオープンにしていくことである。『相互の信頼』は夫婦がそろって同じ方向を向き、共に歩いていかなければ

ればならない。すなわち、神の差し出されているゴールに向かって向上するために彼等を結び付けるごく自然な絆である。この『相互の信頼』は又、結婚の秘跡の実りであり基本的価値である霊的な神髄でもある。このチーム・ミーティングをすることによって、ついには夫と妻の通じ合いが最大限にとれるようになる。『相互の信頼』は教皇が結婚の霊性に関するお話の中で最も強調されている点である。『相互の信頼』は常に『動き』に伴って生ずるのであるから、夫婦は常により相互理解を深めていく様にしていくべきである。夫婦相互の信頼を増し深めていく助けとなるものなら何でも『結婚の霊性』に含まれるとすることができる。

第3点目

必要条件・祈りと聖なる生活

チームに属している夫婦達の絶対行わなければならないとされるのは正しい祈りと聖なる生活だけである。チームの人達は、とかく彼等の経験から、頭でっかちで理論に偏った祈りになりがちであるが、それが危険であることにも気付いている。普通、やらなくてはならない仕事が山とある時には誰でも、急いでそれを片づけようと祈りが短く省略されてしまう。しかし、神は「私抜きで、あなた方だけではなにも出来ない」と断言されている。祈りを短く切り上げることは聖書の御言葉、神の御意志に背くことになる。仕事が多ければ多い程、神に祈ることが必要となる。そして、神は我々にどうすべきか最良の仕事の仕方を示して下さる、神御自身が助けて下さるのである。一人ひとりがこの祈りを何よりも初めにするという自分を自身の中に、行ないにしっかりと刻んでいくようにしなければならない。

チームの人達にとっては、御聖体は『一致の証し』であり、神と人間一人ひとりとの間の『愛の絆』なのである。御聖体は夫婦の絆を作り出してくれたものであり、強めてくれるもので、互いを、そして夫婦を神と結ぶ帯なのだ。そして、夫婦をチームと結びつけるためのものでもある。こうして『動き』は夫婦とチームの双方の聖なる生活を高めることになるのである。

第4点目

寛大な心

「ピオXII世のチーム」の夫婦達は次第にイエズスとともに寛大な態度を身に付け、他の人々に仕えるようになっていった。この姿勢は彼等がしなければならないいかなる職務、仕事においても彼等を素直にさせていった。この点を理解するには「オアシス運動」の『yes』の精神が必要とされた。

この精神には非常な寛大さが必要とされる。又、終極の目的に向かって常に寛大であること、すべてを積極的なプラス思考で見えていけることも必要である。夫婦は誰かに言われて『yes』するような受け身の体勢ではなく人がして欲しいことを予想し、まだ言われていないことも前もって気がつくように努めなくてはならない。この姿勢、寛大さ、永久に続く行為が論理的に、夫婦の靈的生活を「向上」の完全なる姿へと導いていくことになるのである。

第5点目

取り組むべきははっきりした生活プラン

ピオXII世のチームの夫婦達は彼等の置かれたそれぞれの環境や彼等自身の生活に直接当てはまる仕事や指示を取り入れるようになった。生活の方向とか仕事量を課せられることはなく、チームのメンバーだからと言って特別の奉仕を要求されることもない。これは『動き』の精神に反すると考えられていた。

『動き』の精神は心を開放することで、これはどんな靈的レベルにいる夫婦達にも当てはまることであった。クリスチャンの夫婦として完璧な歩みができるように成長して行く望みだけが求められる点であった。初めの頃の夫婦達だけは、彼等自身の生きた経験 (vivencia) から、もし与えられた方向や方法に誠実に従う夫婦がいたら、それは彼等の信仰が常に「向上」しているのだと教え込まれていた。夫婦におけるこの靈的「向上」を確かにするために、彼等はしっかりした生活設計をたてている必要があった。チームは、これも又経験から、夫婦は靈的生活でよくあるような輪²⁵⁹を避けるように努めた。そこで、このチームは夫婦達に早急に向上するように願った。向上の邪魔になる迷いを避けるために夫婦ははっきりとした道、これから先の生活へのしっかりと事細かに決められたプランを持たなくてはならない。このプランは特殊で、夫婦ごとに自分達のものを持つべきなのである。すなわち夫婦の生活状態、性格、能力そして聖化の仕方によって夫婦ごとに全

²⁵⁹ 自分達だけで閉じこもってしまっているサークル

て違ってよいのである。

「誰のケースもそれを鑑定・批判する者はいない」ので、この靈的向上の骨組みは彼等の靈的指導者とともに描かれるべきである。靈的指導者には彼等の靈的生活について、彼等の強さ、夫婦としての生活そして家族との生活をよく知っている司祭がなってくれることが望ましい。この靈性に対する指示は夫婦共々に対して重要である。夫婦を一致させるには、二人が同じ司祭に靈的指導を受けることが最も望ましいことである。

第6点目

教会内の他の活動との関わり

ピオXII世のチームは、「『教会の体内』で活発に活動している他の人達」とも一緒に働きだした。ここでも例外なく、彼等のすべき仕事は一致と協力している姿を実際に、顕していくことであった。この一致となって他のグループや組織と協力しあうという生きたアイディアは神秘体の教えとして、一つ一つの、そして全体での働きとしても大切なことなのである。教会の働きは、それが本当に使徒職的なものであれば、キリストの神秘体と人との間に架けられた掛け橋を意味する。掛け橋の目的は神秘体の精神を世界中の人々の生活の中にパン種として注ぎ込むことにある。神秘体から遣わされて使徒職的な活動に携わっている人達全員がイエズスの『すべては一つになるであろう』という祈りに心を留めていなければならない。チームのメンバーは、この一致する行動こそがイエズス、すなわち神秘体の頂点の御意志だと理解していた。

メンバーは皆、この神の最期の願いにかなう道を探し、かなえることを切望した。リカルド神父はスペインの既婚者の集まりでこの一致となる行ないのことを話した。神秘体の元にあるグループやそれぞれのメンバー達の一致がなければ、神の御心にそった社会への変革はありえない。この教会の”体内”での活動組織の力を集めて一つにするには非常なる犠牲を払わなければならない。その犠牲とは、『すべてを一つとするべし』という神の御意志を充たすために自分を捨てなければならないことであった。教会のメンバーの一人ひとりが、一人でもグループとしても、ある特殊なカリスマ性を持って、それぞれがその特殊性を提供して、互いを強めながら活動していた。こうした一致協力なくしては神秘体-信徒たち-はばらばらになってしまい弱まり、現にある潜在的能力も発揮できなくなっ

てしまうであろう。

第7点目

使徒職的な活動

夫婦達の精神的実りは『使徒職』としての活動に明白に現れている。それぞれの夫婦は、夫婦として及びチームのメンバーとして、神から使徒職として働くように示されていた。『使徒職』という言葉は遣わされた人という意味で『使徒』からきている。彼等の心のうちではかってイエズスが使徒をお遣わしになった様に、今度は彼等を使徒として世界に遣わされたように受けとめられた。これは「使命職的な」使命^{註60}として受けとめられている。これは夫婦達の心のうちから自発的にわき出てくるべきもので、慌ててやるべきことではなかった。

この活動は神がそれぞれの夫婦達をそれぞれの場所で行なう様にあてがわれ、遣わされたのであって、一人ずつがどうしたいと言ったような個人的関心は必要とされていなかった。要するに、神御自身が彼等の心を動かし行動をとらせておられる根本的源なのである。そこに「私」は必要ない。

結婚の霊性はその実りの一つとして、一致に至ることに熱心な信徒というものを得た。時には活動が組織的に十分に固まっていなかったり、確かに認識されないまま難しい思いをすることも何度もあったに違いない。夫婦達は使徒活動のどの部分に参加しても構わなかったが、二人してやり通せるものを自分達だけで判断して、見つけなくてはならなかった。そして困難を感じた時はいつでも、霊的力として内なる協力が得られた。使徒職は、それがどんなに高德なものであっても常に反省をともなっていた。それは、二人の、活動におけるオープンさが、全て彼等の神との一致からあふれだし、対話されているはずだからであった。

第8点目

チームの目的

夫婦達は、チームに属することが『動き』の目的とは思っていなかったが、それが唯一

^{註60} "apostolic mission" or "apostolate"

結婚の靈性に生きる道だと考えていた。彼等のゴールはクリスチャンとしての完璧さに近づくこと、福音の栄光に向かって絶え間なく努力し続けることである。チームのメンバーになって働くことは人間業を越えたものであり、各々の生活や行動を通して福音の光を照らすのだということに何の疑いも持っていなかった。彼等が最も気を使ったのは広い視野に立った神の公益についてであった。チームとしても個人としても誰もが、この目的の邪魔になるものは取り除こうとした。彼等の心配は、ただメンバーだけで強固に固まってしまふことであった。それは彼等だけで閉じこもってしまうと、世界中の夫婦と家族の生活を建て直すという構想は失われ、活動を実りないものとしてしまうことになる。同時に、夫婦やチームがそこだけでよどんでしまい、教皇の提唱された本来の精神から完全にかげ離れることを意味することになるのである。

CHAPTER VII

チームの構成と方法

以上のような構想を満足させ、なおかつ増え続けるメンバーを考慮すると、創始者達はその骨組みをしっかりとし、グループとして何らかの標準的形を造る必要があるのを感じた。同じころスペインではいくつもの、結婚のための運動や霊性を扱うものが出てきて様々な構想や変動が入り乱れた。そして、もしそれらの影響で何らかの変化を受けたとしたら、運動は光を失い本来の目的を根本的にくつがえされてしまうことになる。この危険性をなくすため、チームは詳細なる構成と方法とを開発することにした。

チーム 構成

基本的単位は『チーム』と呼ぶこと。一つのチームは4組から8組の夫婦と一人の司祭で構成されること。教皇ピオXII世の呼びかけに従う意志さえがあれば誰でもメンバーになる資格があること。夫婦の各々はチームのために活気をつける核となるべきことなどである。

チームメンバーはチームの力となる責任を負う。1952年からの経験を通して、彼等は同じような生活背景、生活習慣を持った夫婦同士で集まった方が、互いにより実りがあることを知っていた。余りにかけ離れた教育、年齢や地位、文化の者同士だと、互いに理解を深めるのは複雑で難しい。そのような状況は夫婦達にもグループにも実り少ないものである。又グループは最低4組、最高8組なのが最も好ましい。

チームのメンバーは『動き』からの自然な流れとして全般的活動に、また特に地域ごとにかかれる毎月の黙想会には参加することが義務づけられていた。この黙想会では共同体の祈りをもったり夫婦として関心のある事柄についての指導、他のチームのメンバーからの色々な分かち合いなどが用意されていた。

司祭は各チームが成立する為に不可欠な一員である。チームの人達は自分たちが全体的意味での教会員^{註61}、つまり教会と同じ目的のもとに同じような働きをしていると考えている。又、チームの最終目標は本質的に霊的なものである。司祭は教会を代表しており、

^{註61} 夫婦だけでも司祭だけでもない

神が人々に力を与えるために遣わされた人だと認識されていた。司祭は教師兼、父親兼チームの羊飼役でもある。司祭の役割は夫婦達の信仰を後押しし、活気づけることにある。チームにとっては司祭がどんな会合にも出席されるのは、自然であり本質的なことであつた。司祭達はまた、事前に司教や所属する院長に許可を得なければチームの一員になることは許されていなかった。

チーム・ミーティング

結婚の靈性における夫婦の結びつきと向上を確かなものにする為に、チームは隔週おきにかかれた。元からのメンバーの体験からこの形が一番だと考えられたからである。メルセデスは次のように述べている。

「家事や子どもの世話を考えると毎週では与えられた課題を十分に実行する時間が無いのです。ローレス神父は月一度では不十分で、結局活動も与えられた課題も無視しがちになってしまうと言われる。全くその通りで、2週に一度というのが、家事・仕事の妨げにならず一番適當のようです。そして、『動き』の面を取ってみても1週間ではその反応を見るのに難しく、月一度となると長すぎて忘れてしまいがちなのです。」

夫婦は二人してチームミーティングに参加します。二人は与えられた課題の報告として祈願書と書き記したものとを持参しました。その課題はどちらか一人が参加できない場合には、参加できる一人によって持参され、二人ともが無理なときは他の参加者のために郵送されました。課題に対しての準備ができなかった場合も、こんなことはまれでしたが、ミーティングには参加することとなっていました。

ミーティングへの準備

課題

「課題」とか「観察」^{注62}とかは、婚姻の靈性を高め、強くする助けのために使われた方法である。それは、例えば夫婦相互の信頼・仕事・夫婦の祈りといった結婚に関するある決められた範囲や話題についての質問で出来ていて教皇ピオXII世のお説教から取り入

^{注62} "inquiry" or "survey"

られたものである。これは『観察する・判断する・行動する』という3段階に分かれている。

夫婦たちは次のミーティングまでの2週間の間に少なくとも1時間は前回受けた課題に対して応える時間を持つようにした。二人は、心を割って分かち合い互いを分かりあうのに最適な、落ち着いた静かな部屋を見つけてそこで静かにこの時間を持った。夫婦が共に短い祈りをして、感謝を捧げ、自らを神にゆだねるのは、自分達が神の現存の中に包み込まれていることを実感する為であった。又課題に関する聖書の御言葉を読み、その御言葉が彼等に伝えていること読み取っていく。それから一人になって聖書の御光のうちに与えられた課題に対して自分自身の答えを用意する。そして再度二人して、相手が得た答えに素直に積極的態度で耳を傾ける。最後に二人の結論として次の会に持ち込む為の答を要約して書き記しておく。これには前回彼等に出された課題や、聖書の教えにそって生活してみた感想等も含まれる。この要約こそ二人にとって一番大切な点で、与えられた課題を二人して、神からの呼びかけに答えて生きていくのに必要な点で、自らの生活を修正し見直すべき点に気づくことを義務づけている訳である。二人は各課題に対して出した答えを整理して保存しておく。

課題をしっかりとこなすには、先ず最初に各自で自己発見をし、次に二人して自分たちの結婚、家族生活における完全さと行動への呼びかけを見つけ、分かち合い、そして三番目に自分たちの出した結果をチームのメンバーと分かち合う必要がある。この『課題』への答えは決してうまく書かれている必要はなく、むしろ簡潔で、短く、そして彼等の体験が正直に書かれていることが一番である。これは各自の家で、主にあって初めて生じる『霊的な子ども』であり、出会いによってもたらされた実り、神が二人へ下された御心によって見つけだされたものである。『行動』は夫婦に『課題』によって見つけた生き方、それは聖書と教会の教えに基づいたものだが、を普段の生活に生かしてしっかり歩み続けていくことを要求している。

ミーティングの順序

二週ごとの会合の目的は、『課題』によって得た実りを夫婦達の分かち合いを通して豊かにしていくものである。夫婦間のこの交換は、教会について考え、世の中の真理を探し

つつ純真に心から行われた。これに最も適した時間は2時間だということも分かった。これだけの時間があれば集まった夫婦の皆と司祭が互いの答に対して意見を言いあい、自分と違う可能性に対しても理解を深めるのに充分であった。2時間は5分割されていた。それは祈り、出されていた『行動』に対する見直し、聖書と『課題』に対する答えについての分かち合い、次回への課題といったものである。

会は、失敗させない為にまず、教会で聖体拝領と祈りとを護ることから始められた。この祈りは最低20分から30分もたれ、絶対に省略できない最も重要な部分でミーティングの焦点となっている。従ってどんな『課題』の話し合いよりも先にもたれ、生き生きとした心からのものが要求され、自然と参加者一人ひとり感謝の心へと導かれていった。何か難しいことが起こりそうだと思う時はいつも、聖体拝領の祈りの前にチームの人がコーディネイターに前もって知らせておくと、適切な正しい解決法が示されるのであった。

会を始めるに当たって司祭は御聖体を安置し、一同を祈りへと導いていった。司祭は夫婦達に彼等の考え、感じたこと、夢、秘めた願い等、何でもをごく自然に、率直に、そしてはっきりした声で話すように仕向けた。すべてがこの率直で正直で、どこにでも通じる雰囲気の中で行われた。なぜなら夫婦達の中にはこのようにして祈ることの難しい人達もいたからである。御聖体におけるイエズスの愛が、夫婦の直面しているどんな苦しみをも癒しとなって助けて下さるのである。

祈りの後はそれぞれの部屋に別れ、輪になって席に着く。この会合中夫婦達は自分たちの発見を安心して話し、人の話へも熱心に耳を傾ける。始めの5分間程を使って指導司祭は彼等の前回の課題に対する『活動』を読ませる。続く10分は聖書の問題箇所について話し合われる。各々が彼等の意見を短く告げ、司祭がまとめる。その後で『課題』について分かち合いが約75分から90分かけてもたれる。各々の夫婦は各項、「観察する・判断する・活動する」ことに関して互いの考えを交換しあった。夫婦のうち一人が自分達の書いてきたものを読む。司祭が彼等の言わんとすることを皆が分かるよう表現になるように助ける。又、各々の夫婦の言うことをまとめ、他の意見と考え合わせ、司祭自身の意見も交えて話していくことに努めた。会の中に夫婦が順に書記を努め会話を書き残した。

会の終わりには全員集まってそれぞれの要点をまとめた。会と会の合間に司祭が担当に

当たった夫婦が要点を見直し、次回にその会で分かったこととして伝えられた。会が終わる前に、皆が『動き』についてよく納得し、次回までの日々がよりよく『動き』に沿って暮らして行かれるように話し合われた。又、夫婦によって次回のテーマが決められ、会は司祭による祝福で閉じた。

祈りのネットワーク

チームメンバーの間には、祈りのネットワークが広がり、病人や子どもはこの祈りのうちにいち早く取り入れられた。各チームは集いに諸聖人の通功が息づいているとじかに感じ深める為に、この靈的関心の種を既婚者の間に広く蒔くよう求められた。

一つの運動へと結合されていくチーム

運動の広がりにつれて、スペイン人の運動起草者達はスペイン各地の教区に広がったチームを一つにして正しい目的・方向へとまとめていく方法を考え出す必要を感じた。

チーム同士の間は簡単な構造で運動と結ばれていた。4組から8組で構成される各チームは、それぞれひと組をその地の代表とした。1963年までにこの地区会は、バレアレス、北スペイン、カスティーレ、カタロニアそしてマドリッドにもつくられた。地区会からは又、1チームが全国司教をメンバーにする中央コーディネイティング・チームに参加した。中央チームは本部をバルセロナに置き、各会との連絡と情報提供のために定期的に刊行物を発行していた。

新しいチームへの躍進

新しいチームを靈的に正しい方向に根ざしたものにするため、地方会は各会から『プロモーター』としての夫婦を一組づつ出すこととなった。この役目は新しいチームを指導してだけでなく、種まきをし、チームが常に靈的向上をして行く姿勢でいられるように力づけ、励ますことで、非常に重要なものであった。彼等は又このチームが信仰の上でも他にそれないように目を向け、常に正しい目的を持って踏み出していけるように気を配った。この目的で、『プロモーター』達は初心者に向けて活動に慣れるように、黙想会をセ

ゴヴィア近くにある『よりよき世界に向けてのトレーニング』に参加できるように霊的訓練に力を貸した。『プロモーター』の期間は通常2年以下であったが、場合によって長くなることもあった。

この期間中、新しく生まれたチームを軌道にのせるために『プロモーター』達は司教に特別な『エンカウンター』を受ける必要があった。このエンカウンターは黙想の特別な方法で、泊まり込んで行われた。これははっきりした定義に沿って行われた。ここでの目標は夫婦達に、個人としてまた夫婦として、彼等を結びつけることになった婚姻の秘跡の意味をよりはっきりとつかみ、チームでの活動を含め、自らの結婚生活や一般における生活設計を忘れることなく、結婚生活における共通の対象を見つけ、力づけることにあった。この『エンカウンター』は、新しく加わったメンバーに『活動』への扉を開くのに必要な霊的訓練と考えられていた。1960年から61年の間にカルボ神父は3段階の『エンカウンター^{註63}』を考案した。活動の参加者は誰も皆、この3段階を体験することが要求された。これらはマリッジ・エンカウンター・プログラムとレトルノとをその基本的要素として含んでいた。

初級エンカウンター（ゼロ段階*）

初級エンカウンターは、オリエンテーションで、参加した夫婦に自分が何者であるか、結婚の霊とは何か、そしてクリスチャンとしての結婚の誓約とは何であるかを紹介するものである。これは連日7日間、夕方各2時間づつ開かれる。ここでは次のようなことが取り上げられる。先ず、精神的離婚、対話、夫婦の愛情、親としての責任、子どもたちの教育（問題と解決法）という点での夫婦の使命、婚姻の秘跡、結婚の霊性、そして最後にクリスチャンとしての結婚の誓約などである。この初心者達の意識を高めるために指導者として参加した夫婦等（チーム）の経験談（vivencia）が大いに役にたった。新しいメンバーも又それぞれの話題にあった『課題』を与えられた。

中級エンカウンター（1段階^{註64}）

^{註63} "Encuentro de zero grado" 最初のエンカウンターは、オリエンテーションだけなので"ゼロ段階"と呼ばれた。

^{註64} "Encuentro de primer grado"

この中級エンカウンターは、結婚の靈的を高めたい一般の夫婦のために作られている。こちらは一晚だけのコースで、内容は観念的、靈的、そして指導的なことから出来ている。観念的な内容には、理性に導かれた結婚、信仰に導かれた結婚、社会の一つの核である結婚、そして教会の一機関である結婚等が含まれている。靈的なものには、神の御言葉、教会の教え（よりどころと伝統）、祈り（個人、夫婦そして地域としての）、秘跡の『yes』への更新、そして聖室（御聖体：神の現存）。指導的なものには祈りのネットワークと御聖体、プロモーターかそれに当たる活気を与える人3人、司祭二人と医師が一人とで構成されている。時間は、夫婦の対話（個人的内省と二人の対話）が基本になっているが、より深い話し合いや『課題』・生活プランに対する見直し、反省なども含まれる。

この中級エンカウンターは神の御言葉に基づいて進められる。まず、マタイによる福音書5章8節「心の清い人は幸いである、その人は神を見るであろう」、そしてマルコによる福音書4章3節「聞きなさい、種をまく人が種をまきに出ていった」。最後は、ヨハネによる福音書のカナの結婚の祝いの席でイエズスが現れてマリアの求めに従って、御父の御旨を人々に現わすたとえからとられている。ヨハネによる福音書15章14-16節「私が命じることを行なうなら、あなたたちは私の愛する者である。もう、私はあなたたちを僕とは呼ばない。僕は主人が何をしているか、知らないからである。私はあなた方を『愛する者』と呼ぶ。父から聞いたことはすべて、あなた方に知らせたからである。あなたたちが私を選んだのではなく、わたしこそあなたたちを選んだのである。わたしがあなたたちに使命を与えたのは、あなたたちが出かけに行き、実をみのらせ、その実がいつまでも残るためでありまた、あなたたちがわたしの名によって父に願うことは、何でもかなえていただけるようになるためである」。

コースは4段階から出来ている。各段階は参加者のやる気を高めるプロモーターか司祭によって始められ、ここの『課題』に対するそれぞれの意見、夫婦としての対話、そして全員での分かち合いがそれに続く。**第1段階**の皆を活気づける話「理性による結婚^{注65}」が話される。指導者として参加の夫婦は、結婚の自然な真理の概念、間違った概念、そして我々を取り巻く環境の中での結婚生活の経験談などを扱う。司祭は創世記1章2章をもとに本来の結婚のあり方について話をする。医師からは受胎と誕生について、その問題点と自然な解決法が交えて説明される。

^{注65} "Marriage in the light of reason"

第2段階・『信仰による結婚』^{註66}と題されたこの段では、結婚に関して、人知を越えた真理が語られる。先ずは婚姻の秘跡の間違った解釈が、そして司祭が婚姻の秘跡の何であるかを、秘跡からの恵み、心構え、姿勢などを含めて語られる。また「なぜ近年、婚姻の秘跡についての知識の乏しい人が多いのか」といった質問についても扱う。

第3段階・結婚を教会の「印章」「印」^{註67}として取り上げる。結婚はそれ自体が目的ではなく、目的のための道具である。チームの夫婦達は「もし各自が結婚生活を改善していったら、世の中の為にもなる」と意欲に燃えている。各夫婦が社会をより良くしていくためには、この態度でいることが必要なのである。プロモーターは家庭が小さな社会だと話す。社会の重要な要素は多様性、結合、よりどころそしてサービスからなっている。そして司祭は結婚とは教会の一細胞になることだと言われる。家族は一つの『小さな教会』であって、役割としては全体の大きな教会と同じなのである。

第4段階・参加者達は自分達の使命を見つけるように促される。この段階は4つの部分から構成されていて、参加者は自分達を囲む廻りに目をやる。このコースの各部分は「観察・判断・行動」という道具に従ってなされる。質問は、「彼等の住んでいる環境で、どんな物質的、道徳的トラブルがあるか」「出席者達はその原因が何だと考えているか」「その問題を徹底的に解決する方法を提供することが出来るか」2番目、現在どんな霊的、信仰的問題を抱えているか。「本当の原因は?」「夫婦は何をすべきか」。3番目は社会におけるクリスチャンとしての、結婚の使命についてである。「なぜクリスチャンの結婚がこの社会に与える影響がそんなに目立たないのだろうか。」4番目、「このエンカウンターを精神を持ち続けていって、何が出来るのだろうか」。これらの答えが自然と各夫婦達の生活設計をたてる上での助けとなっていく。

上級エンカウンター（2段階^{註68}）

2段階目、上級エンカウンターは5部から構成されていて、これは教会の既婚者グループに属している夫婦達のためのものである。このエンカウンターによって、参加者は夫婦としての反省や自分達の結婚を振り返る手助けを得ることができる。これは夫婦達にとって、霊的完成に近づく集中コースなのである。ここでの目的は二人の絆を強め、それを通

^{註66} "Marriage in the light of Faith"

^{註67} "seal" or "sign"

^{註68} "Encuentro de segundo grado"

じて教皇グループの各既婚者チームの連体を強めることにある。内容は心理学的、観念的、靈的そしてテクニクの観点を含む。

心理的内容には各夫婦の証言、個人的内省、夫婦の対話そしてチームの集いなどが主なものである。心理的内容は自分自身に正直であることに基づいた自己との出会いで、現実の日常、特に家族の実態を通しての御父との出会い、夫婦二人の間の愛情を通しての御子との出会い、秘跡、教会を通しての聖霊との出会いなどである。

精神的要素には神の御言葉、一人の祈り、夫婦の祈り、公共の祈り、『yes』の更新、聖室、チームの指導者としての司祭、家族の真の姿での黙想、種蒔く人の喩え話、ナザレ、カナそしてセナクル（最後の晩餐が行われた部屋）等がある。

方法としては、祈りのネットワーク、体験をより生き生きとさせること、各々の黙想、生活プランに対する反省、見直しの後の個人的、共同の質問（課題）などである。

「上級のエンカウンター」の順として、1番目に来るのが今日の家族の抱える危機に対する黙想である。「チーム」の夫婦は、事実、データそして家族の生活に関する統計等を紹介する。目的は、参加する夫婦全員に家族の危機を十分に気付かせることと、これに関しての各自の責任を見つめるようにさせることにある。

2番目のステップとしては種蒔きの喩え話（マタイ13章）に基づいての黙想である。目的は始めに自己と正直に向き合うことである。自己を深く掘り下げて見つめることは、相手をもっと理解するための基礎となる。次の目的は夫婦二人を励まして互いの和解を得させることで、二人の心が一致した後、他の人達とも一致をもつ。夫婦間の一致は夫婦二人を神との一致に導くための基礎がためである。

3番目のステップはナザレについてである。このステップの目的は、御父との出会い、そして超自然的現存、特に人間に対する神の本質との出会いにある。聖家族は理想的な例である。ここには重要な点が二ヶ所あって一つは御父の御旨を実行すること、そして二番目はカナ（ヨハネ2章）の話である。カナでの話は御子との出会いを、秘跡の恩寵、結婚の秘跡によって得た実のり、そして恩寵と奉仕のうちに置かれる結婚生活をとおして

見いだすことである。夫婦はマリア様の「力ある取りなし」を読み取ることになるであろう。・・・『何でもこの人の言うとおりにして下さい。』

第4段階・セナクルについて（セナクルとは聖霊が使徒たちの上に火の舌の形で降ったときの部屋である）ここでの目的はクリスチャンとしての生活（教会、教区司祭、チーム）を意識し、積極的に参加して、神の霊と出会うことである。

第5段階、生活を振り返り見直す。ここでは生活をあらゆる角度から見た後での質問から構成される。「私はあなたのどこが好きか」「私はあなたのどこが嫌いか」「我々を別れさせるものは何なのか」「我々は神の恩恵のうちに生きているか」「神と我々を結びつけるものは何か」「我々を神から引き離すものは何か」「婚姻の秘跡を認識しているか」「これを告げる印は何か」「一緒に祈っているか」「共に告解をしているか」「一緒にミサに参加して御聖体拝領をしているか」「しているとしたらいつ」「聖書を読んでお互いに分かち合ったことがあるか」マリア様との関わりについて「我々は彼女に対して信心があったか」「その印はどんなであったか」「共通の信頼を寄せる司祭を持っているか」「司祭とは定期的に会って話を聞いているか」「いつ」「我々は神の望まれる子どもを持っているか」「子ども達一人ひとりに対してどう思っているか」「子ども達についてどこで意見の同意をしているか」「同意でない部分はどこか」また、子どものいない夫婦に対しては、「社会の中で、教会で、家族、親戚のうちに置かれた使命を見つけたか」「すべての人達と仲良くやっているか」「他の人のことを大切にしているか」この答えには具体的な範例が必要とされた。

結び

この構成と方法は参加者及びチームを生活形態、目的、ものの見方といった点で一つにする働きがある。これによって「自分の家族を聖なるものの中心に置くように」という教皇の『呼びかけ』にそって思いを深め、一生懸命努力していくようになる。しかしフランシスコ会のパウロ・パルデット司祭の指摘のようにここには夫婦崇拜に陥る危険が潜んでいる。というのは参加者達が「善良なる夫婦の集い」という中だけで固まってしまって、無意識のうちにそこに浸っているだけで安心してしまうことがよくあるからである。夫婦達は「心地よい山頂」の生活に慣れ親しみ、谷間にいる困った人達のことには忘れてしまい、元来の運動の使命を忘れ去ってしまうのである。彼等はこの危機を知らずしるしを感じ

じ取り、カルボ神父達はこの危機をなくす為に、新しく『マリッジ・エンカウンター』と呼ばれる道具を生み出していくことになるのである。

CHAPTER VIII

マリッジ・エンカウンター その誕生

カルボ神父がチームのために世界狭しと働いている時、他グループの夫婦達が彼のドアをノックしてきた。この夫婦達は離婚、けんか、緊張状態、失望、落胆といった日々起る問題に困り、失望していた。彼等は子どもたちが泣き叫び、争い、隠れ、ごまかしなどしているのを知っていた。結婚の意味、目的はなんだろうと疑問を持ち始めていた。結婚生活には、このほかに何も無いのだろうか、あるとしたら何が、そしてどうやったら手にすることが出来るのか。結婚へ抱いていた夢は幻想で、おとぎ話の中だけのことなのだろうか。夫婦二人がお互いに話し合うのがどうしてそんなに難しいのだろうか。かつてのようになぜ楽しめないのだろうか。彼等は難題に苦悩し、別の生き方、結婚生活を待ち望んでいた。カルボ神父は、また、彼等には既存の運動に属してもいなければ参加する気もないことも知らされた。

カルボ神父はこの人達の痛み・渴きを理解した。こうした夫婦に会う度に、彼等の痛み・怒りは「蜂のとげ」のように神父を刺した。「私に一体何が出来、どうすべきなのだ」。こうした苦痛に満ちた疑問がカルボ神父を一人の人として、キリスト教徒として、司祭として夫婦達や家族に対して仕えていく重要性を増々はっきりと認識させていくことになった。

挑戦

一方、カルボ神父は過去8年間、今までのグループの夫婦達とともに活動し、見守ってきた。この夫婦達にも似たような問題は日々起ってはいても、彼等は結婚や家族としての生き方の楽しみや意味も同時に知っていた。彼等は、問題のただ中であって、日々の変化の中に希望を持って暮らしていた。そして彼等の暮らし方が結婚の正しいあり方を示していた。彼等はお互いの思いを打ち明けながら『相互の信頼』に基づいた生き方をしていた。彼等が暮らしていくうえでの、二人のこの霊的土台は、結婚を信仰的に秘跡的に深く理解しあう彼等の姿勢から生まれてくるものなのである。

これを見たカルボ神父の挑戦はこの二つの全く違ったグループに橋を渡すことであった。のどの渇きを覚えている人達に水を運ぶ『コップ』が必要であった。心の中にむくむくと湧きだしてくるこれへの挑戦心に、神父は従来のグループから何組かの夫婦と神父とを呼び集めた。参加者達は神父の話聞いて皆、同感し、この人達へ関心を向け始めた。

『コップ』

こうした疑問・当惑・憂いのうちにある人々への助けに満場一致の賛同を得て、カルボ神父は『渇きに在る人へ水を運ぶコップ』づくりに取りかかり始めた。神父は当時を振り返って「不安と希望の入り交じった複雑な思いで、結婚の、家族の結びつきの秘密と幸せを持っていそうな家庭のドアをノックして歩いた」と語っている。カルボ神父が訪ねた夫婦達は皆快くドアを開けてくれ、二人の心の奥深く、生活の最も聖性な部分を提供してくれた。

これらの訪問から、カルボ神父は彼等の持っている結婚生活への秘訣こそ、まさしく、もう一つのグループの人達が持っていない、欲しがっているそのものだとことを発見した。彼等の話から、カルボ神父は彼等は神が定められた結婚の、家族のあり方（これは聖書を通してごく早くから、不思議にも示され教皇の教書から説明されていた）にそって、家族関係を保って行こうと努めていることに気付いた。彼等は日ごろから夫婦二人の信頼を強め、神が彼等に示された場所を見つけ、受け入れて行こうと努力していた。カルボ神父はこうした家庭からの経験を「飛び抜けて素晴らしく、本当の意味の恵み、神の啓示を感じられる」所で、自身、神父として、聖家族に仕えている神の使者として啓発され、強められるところであったと述べている。カルボ神父にはこれが「神が示された新しい道」に違いないと感じられた。

カルボ神父はチームの夫婦のうち何組かに参加を求め、この二つの相反するグループの間の溝に橋をかけるために、また彼等の渇きを癒すための『コップ』になってくれるように頼んだ。これには神の導きが是非とも必要であった。カルボ神父はグループの人達に家族共々祈りを運んでくれるよう頼むとともに神にも御導きを下さるようにと祈った。神父は一人、バルセロナ地方の山の中にあるモンセラットのベネディクト会修道院^{註69}で祈り

^{註69} the Benedictine Monastery of Montserrat, in the province of Barcelona

と断食を護った。(この修道院はかつて、1943年、ジェイミーとメルセデスが結婚式を挙げハネムーンを過ごした所でもある。)

懸命なる祈りの後、カルボ神父は『コップ』に取り掛かり始めた。神父は、夫婦二人の心が一体となり、幸せな結婚は既に二人の中にあるのに、問題は彼等がその「隠れた宝」に気付かないだけではないかと考えるようになった。彼等に必要なのはその宝物の見つけ方なのだ。神父は今までの体験から得たもの、特に3段階のエンカウンターと神父の家庭訪問から得た洞察とを引きだしてきてその手段を発展させていった。又、新しい道具の効果を見るためにチームに試す数多い質問事項をまとめた。

カルボ神父はバルセロナの自宅へ戻り、神父の運動に協力してくれる夫婦達にこの新しい数多い質問事項を渡し、期限付きで答えてもらうことにした。その間、両者は静かに祈りがもてるところに集まった。夫婦達は彼等自身でも質問事項を作り、彼等の賢い提案と、夫婦として親としての経験から神父の予想できないであろう部分を付け足して豊かなものとした。こうして1ヶ月の後、彼等は人々の助けとなる新しく、見事な道具を手にする事が出来たのである。

第一回マリッジ・エンカウンター

1961年1月(5日から7日までは聖家族の祝日がある)カルボ神父とジェイミーとメルセデスは、問題を抱えた28組の若い夫婦とともにバルセロナから25km離れたコルベラ^{註70}という村に集まった。ここに始めてのマリッジ・エンカウンター^{註71}が開かれることになった。開始に当って彼等は思いを新たにしていた。

「我々はただカルボ神父様に命じられるままに行なった。神父様は問題を抱える夫婦を助けようとしており我々は神父様の意志に従っただけである。又同じことが繰り返されるとは思ってもみなかった。神父様は我々、ジェイミーと私が私たちの経験からアイデアや構想を書き込んだメモ用紙を持っていらした。」

(ジェイミー&メルセデス)

^{註70} Corbera

^{註71} "Encuentro Conyugal" (Marriage Encounter)

カルボ神父は熟考の末、自分のうちに、これがある新しいことの始まりだという予感を感じた。

この期間中、チームの人達は何か「新しい」ことを感知していた。金曜日の夕刻、コースに参加する為に到着したチーム以外の夫婦達は、ほとんどというか、みじんも夫婦らしい愛情、一体感、平安といった感じを見せなかった。それが土曜日の晩には、カルボ神父が書いていられるように、彼等は家族や親戚、友達に電話をして「ついに新しい生き方を見つけた！」と一刻も早くその喜びを知らせようとしていた。

これが教皇のチーム以外の夫婦達が結婚生活をより満足しておくって生ける『コップ』、癒しなのであろうか。この道具がチームが挑戦していたことの答なのであろうか。これが「神の御旨にそって世の中を作り変えて行く」という使命を充たそうとしてチームの求めていた答なのであろうか。チームの人達はもう一度考えてみる必要があった。

再現

今回の集会でメルセデスとジェイミー、そして特にカルボ神父は何か素晴らしい、今までにないすごいことが起ったという感じを得た。神父は又同じような集会をもう一度開いた方がよさそうだ、とどこかで霊的にひっそりと感じていた。「繰り返したらどうなるのだろう」カルボ神父、ジェイミーとメルセデスは、チームの他の夫婦達と彼等の印象について話し合った。話を聞いたこれらの夫婦達は、ぜひ続けるべきだと熱心に勧めた。彼等は祈り、他の夫婦達にもこのマリッジ・エンカウンターのことを話した。伝え聞いた従来の会のメンバーの人達も興奮して、このコースをやった結果自分達の生活に起った素晴らしい出来事を話し広めた。彼等の証言は同じような体験を持つほかの夫婦達にも渴きを覚えさせた。そして4月の初めにもう一度開かれることになった。この知らせは非常な勢いで伝えられ、宿泊施設に収容できない程の人々が申し出てきた。そこでついに3回目までが計画されマリッジ・エンカウンターはバルセロナの従来のチームの活気ある活動の一つとなっていったのである。

バルセロナのチームの人達はマリッジ・エンカウンターこそが結婚生活でより深まりを持った生き方を求めている夫婦達へ、霊的結婚を紹介する道具だと信じるに至った。又

これが教皇の「呼びかけ」に満足のいく応えになると信じた。加えて「頑張ってください、そしてここに集う人達よ、・・・」という教皇から与えられた任務が彼等の使命として完全に姿あるものとなったのである。

これは正式に『マリッジ・エンカウンター・ウィークエンド』^{註72}と呼ばれるようになり、教皇ピオXII世のチームの夫婦達に「主にあって」「主の御計画のうちに」生きていく生き方を他に知らせて行くのをよりしやすくする助けとなった。

「神の定められた結婚の御計画に沿っていくなら、我々は幸せになれる。我々が望む幸せは神によってのみ与えられる。なぜなら神はこの贈り物を神御自身に対して用意されているからである。神の御計画に従うことは夫婦が互いに神の定められた夫婦として、一体になって生きることを意味する。この霊的な要素は一体と幸せとである。これは実際の経験から得た答でチームの全員に共通したことが言える。又、もしこれ以外の道をたどっていたら、我々は道を踏み外すか、それこそ悪魔にそそのかされていたかもしれない。我々教皇チームはよくこのことについて話し、神の御計画に従って生きることこそが本当の幸せに至る道であると確信した。チーム以外の夫婦達も、この新しい体験を通して、神の御計画に従って生きていく努力をすることによって教皇チームの人達と同様に結びつきからの贈り物、喜びを味わうことが出来る様になったのである。では、『コップ』の中身と、それを飲む方法はどうなっているのだろうか。」（ジェイミーとメルセデスより）

^{註72} "THE MARRIAGE ENCOUNTER WEEKEND"

CHAPTER IX

マリッジ・エンカウンターの出発

マリッジ・エンカウンターは、カルボ神父と教皇チームの夫婦達によって夫婦達のために改良された、よりよき結婚生活に向けての道具である。これは1952年以来、夫婦としての生き方を探し求めていた「チーム」の夫婦達の信条や体験に基づいている。この道具は、形式と相互関係というはっきりとした方法とできていて、各部にそれぞれの働きと目的がある。その方法は記述することが出来、その形態もいくつかの部分から成ってはいるがこれも説明することが出来る。しかし、他の道具にも共通して言えることだが、夫婦によってすべて違うこと、個人的なことなどから、その可能性、素晴らしさ、価値といったものはそれを筆で書き表すことは不可能で実際に体験しなければ充分理解し、感謝の心にいたることは出来ない。

「マリッジ・エンカウンター」の方法

ここでの主な目的は、夫婦の結婚生活を神の御計画にそった形でもう一度体験し直してもらうことにある。形式としては、大胆な構成に分かれていて、夫婦達に自分達の結婚生活の現状を見てもらうこと、そしてより大切なのは、彼等のうちに隠れて見えない可能性を見る機会を提供することである。そこでまず、夫婦に自分達の結婚生活の現状を観察させ、次に生活を聖書にある御言葉の「照らし」のうちに判断させ、そして自分達の完成を神の御計画、すなわち「主にあって」生きる夫婦として生き抜いていくために二人が夫婦として取らなくてはならない行動へと導いていく。この過程を経て、夫婦達は、主にあって一致した夫婦となり、ひいては一致した二人として主と一致するにいたる。こうして一体化と幸せ、という神の贈り物を得ることが出来るようになるのである。

夫婦達は「ecclesialチーム」の人々に手伝ってもらってこの体験をする。この「チーム」メンバーは司祭と、この生き方を努めている数組の夫婦とで構成され、自分たちのアイデア、思想、感じ方、そして実際の生きた体験談 (vivencia)を話し、分かち合うことで新しくこれを目指す人達を動機付け奮起させ、先導者となっていこうとしている。こうした分かち合いをしていくうちにチームは次第に「自分たちを覆ってくすぶらせている灰を吹き払うことができ、信仰と希望とそして愛の炎となって自らの精神を燃え上がらせ

て」いったのである。『ecclesialチーム』は自分たちを悟らせ、隠れた可能性を発見させ、何よりも自分たちの結婚生活のうちに既にあって気付かなかった素晴らしさと可能性を発見、体験させるにはこれしかないと信じている。

マリッジ・エンカウターの各段階の本質

第1段階

導入とオリエンテーション

この段階は2つの部分からなっており、始めは夫婦の自己紹介から始まる。続いて施設の説明とマリッジ・エンカウターの基本的内容が説明される。リラックスした、居心地良いあたたかい雰囲気に参加できるように心がけられている。

ここの2段階目として、チームはマリッジ・エンカウターとは何なのか何でないのかをはっきり定義する。彼等は、神の御声を聴く妨げとなる態度や彼等の助けになる体験などを指摘する。そして動機付け、個人の内省、夫婦の分かち合いという3つの流れを説明する。

終りに近づくにつれ夫婦達は気持ちが楽になり、次第にこの体験に対する期待に胸膨らますようになる。

観 察

我々の結婚の現状はどうなっているか？

「観察」はその名の示すように、遠近法的に自分を外から眺めることと、受け身的に眺められることの2つから構成されている。マリッジ・エンカウターは自分の現実の結婚生活をその当事者の一人として眺めることに始まり、これは「自己態度^{註73}」と呼ばれ、エンカウターの流れのもとになっている。そのため参加者一人ひとりに自己と深く向き合うための時間が与えられる。ここから自分たちの結婚の現状の姿を見つめることが始まるのである。

⁷³ attitude of self

第2段階

自己との出会い

自己との確かな出会いによって我々は自分自身をしっかりと見つけることができ、それがまた実り豊かなエンカウンターにするためにどうしても必要なのである。この段階の靈的基準はマタイによる福音書5章8節「心の清い人は幸いである、その人は神を見るであろう」という部分にある。マリッジ・エンカウンターの目的の一つは夫婦のかかわりの中に神がどのように在られて、働きかけられているかを観察ことである。又、これを通して一人ひとりが自分自身を見つめ、互いの中にある強さと弱さに気づき、受け止められるように、そして又互いの中に成長できる部分を認め、変えて行こうとする心を開らかせるようにしていくことである。

そこで、夫婦は互いの才能、性質、可能性、大志、夢といったものに改めて気づくことから始まる。自分自身の生い立ちを振り返って自分の個人的なこと、態度、判断基準、そして希望とか夢とかいったものを形作ってきた要素も同時によみがえらせるのである。これは各個人にとって必要なことで、可能な限り自分がどんな人間なのかを見つけ、あるがままを受け入れる、長所も短所も強さ、弱さ、徳の高い点、低い点そのすべてを、そしてどこが変えられる点なのかを知って、その成長のために心を開いていくのである。その為には、各々が自分に正直に、自分を大事に思いながら優しく向かい合わなければならない。そして、自分の本性を隠している仮面をはがしてしまわなければならない。仮面をかぶっていることは、それを本人が意識するか否かに関わらず常に自己から逃避するために使われているのである。正直であること、納得すること、心を開いていることはこの項で一番大切なことである。この段階の最後には各々が「本来の自己の姿勢」で暮らすようになる。この態度こそがまさしくマリッジ・エンカウンターの体験の基礎であり、各々個人の内省の源なのである。

この自己との出会いはまた、他の人をもその人自身としてあるがままに受け入れること、健全な、後に続く良い関係を保っていくことも必要としてくる。自分自身を真実完全に受け入れることなしに人を受け入れることは決して出来るものではない。自分を理解し受け入れられずに、人を理解することも受け入れることも出来ないし、夫婦として相手に自分のすべて（心も体も）を与えるには、与える自分自身が何であるかを知っておく必要があるのである。

第3段階

現代社会の中での我々の結婚

この段階では、互いの視点から見た自分たちの間に現在見られる心離れの兆候、個所を指摘する。この段階でいよいよ本格的にエンカウンターが始まる。そしてこれは「精神的離婚の兆候」「理解するための課題」の二点からなる。

結婚生活においては夫婦は互いに決して観客になることは出来ず、二人ともが常に舞台の上に立っている役者である。二人は互いに自分達の結婚の結びつきに必要な修復や、どんな分離、孤立といったものにも平等に責任を持つ。どんな結婚関係も修復、改善して行くことができる。特に心離れしているところではなおのことである。夫婦関係には互いに違うところ、相いれないところがあって、それが意識の非常に深い部分に居座っていることがよくある。その結果、二人の心と気持ちは離れたままで、これは俗にいう同じ屋根の下に暮らしている独身者達二人と同じ状態である。エンカウンターではこれを「精神的離婚」と呼び、心、気持ち、精神の分離をいう。これらにはある特有の症状が見られる。この状態の夫婦は、自己態度から自分たちの間に存在するこの分離の印をみてとることが出来る。これを悟ることが二人の成長のための、二人の絆を強めるための初めの大きな一歩となるのである。

先ず初めに、重要な点がふたつある。愛情が育つには法則があるということ、そして愛は意思の中にあるということである。そして、それを受け入れるか拒絶するかはその人次第である。そのために「愛は決意である」といわれるのである。

精神的離婚の兆候を書いたリストは参加者達に渡されている。自己内省の間に各自、自分たちの生活に見られる危機の原因、それぞれが自分の側に在る責任を見極め、受け容れる。夫婦の対話の間に二人は正直な霊的信頼の雰囲気の中で互いに内省したことを話し合う。

この段階の第2部として、二人は存在する最も大きな心離れの兆候に話題を集中させる。中には夫婦二人が話したがらない課題や、二人で充分に分かち合われていない点や、相手の視点を受け容れられない部分もある。しかし、こうした状態が存在する限り、二人が完全な結婚をしているとは言い難い。又、理解や受け容れに、非常な努力が要求される場合

がある。あるいは結婚生活の中で互いに手を差し伸べ、たやすく二人の絆を深めていかれる所もある。各自に渡されている、夫婦を分かちようという話題や個所についての内省や対話のリストがここで役に立つ。この内省から夫婦は相手が避ける課題、よく理解していない点、相手の受け入れられない点を明白に理解でき、自己態度からなぜそうなるのかを分かろうとするようになる。こうして心離れの原因となっている部分を見直すことになる。夫婦の対話はこうした課題に心を開き、互いを理解し始めるのに役に立つ。中には非常に話しづらい課題があり、落ち込んだりもするが、みな希望を持っている。

"ecclesialチーム"の人達は自分たちの生きた体験(vivencia)を交えて、こうすることの意味、妻と夫として互いに結びつくことの意味を参加者に分かち合う。

判 断

我々の結婚はどうあるべきか？

観察し、各自の結婚の分離点や、新しい一体となって成長していける部分を確認すると、夫婦は自らの結婚があるべき姿を頭に描き始める。そこで、二人は結婚における神の御計画について考え始める。これは聖書に啓示されている。神の御言葉に耳を傾ける前に、彼等は自分達に、神の御言葉を聴かせなくさせる障害物を自らの生活の中に探さなければならない。そしてその障害物を努力して取り除き、御言葉に精いっぱい耳を傾けるべきである。神の、結婚のための御計画や構想は御言葉の中にのみ読み取ることが出来るのである。これこそがエンカウンターの純粹で本質的な頂点、すなわち神の御計画による結婚なのである。そして次の段階で、二人は現実の生活の中に神の御意志にそって生活することによって感じ取れる、人間的そして超自然的な働きを発見していくようになる。そして、二人の関係のうちのすべての可能性の中で、自分達の結婚を見直していく。

第4段階

種々く人の喩え話。各自が神の御計画を素直に受け止めること

この段階の目的は各自が神の御言葉に心を開くことである。この段階の始めに

は、夫婦は自分たちが夫と妻として、完全な一体とはなっていないことを痛感することになるが、良くなるという期待を持っている。チームの人達のおかげで、一体となる秘訣を感じるようになる。秘訣を受け入れる準備が必要となる。この準備が4段階での重要な点で、信仰における一段と高い飛躍が必要とされる。

基礎となるのは種蒔く人の喩え話で、マタイによる福音書13章に見ることが出来る。これを理解するために、神の御言葉、少なくとも種蒔く人の喩え話は各自が手にしていなければならない。喩え話はゆっくりと読まれ、じっくり聴いてもらうことが大事である。御言葉を心の奥深くに聴きながら同時に、自分に問いかけることも必要である。イエズスは私に何を話されているのだろうか？私への御言葉は何なのだろうか？夫婦はそれぞれ、自分達が神の言葉に根を張ってそこから実を結ばせることに対して、何が妨げになっているのかを発見するであろう。夫婦は又、互いの土の状態をも知るであろう。自分達はいつも御言葉を聞くための耳を持っていたらどうか。御言葉を聴くには、御言葉がいつも相手の口を通して語られるので、互いに相手のいうことに耳を傾けていなければならない。御言葉に対してオープンである限り、お互いに対してもオープンになれる。なぜなら、神からの御導きを受けることによって、二人は大きなカップルになっていけるからである。従って、御言葉に対する夫婦の対話によって、神が何を望んでおられるか、二人に対する神の御旨は何であるかを発見する様になる。神の御旨を知ることによって、相手にも耳を傾けることもできる様になる。そしてもし相手の言うこと、御言葉、が聴けるようになれば、二人の内に30倍、60倍、そして100倍もの豊かな実が結ばれるようになるのだ。

司祭は喩え話の説明をする。夫婦達は自分達に語られている御言葉に対して、聴くまい、とさせる彼等のうちの妨げについて話しあうことが出来るようになる。又、どのようにして御言葉の通りに生きていったらいいかという努力の仕方に対しても話し合えるようになる。

こうして二人は自分たちの土の状態、御言葉の種を根づかせる妨げについて考えをめぐらすことが出来、同時に相手のいうことを聞けるようになるのである。

第5段階

神の御計画にある結婚

これがこのコースの最重要項目である。ここでは聖書に書かれている神の御言葉に聞き従い、それを自分達の生活に取り入れていくようにすることがその根本である。結婚に対する神の御計画は、創世記に見ることが出来る。夫婦は各自、聖書のその個所を、たとえコピーでも持っているべきである。初めの2章は結婚に対する御計画が、3章以降はその御計画に従わなかった場合が示されている。心してよく聴くべきである。その金言は、神の御計画と望みにかなった者だけが夫と妻、夫婦と神との真実の結合を得ることができると示している。夫と妻の間を、夫婦と神の間を引き裂き、危うくし、険悪にするものは何ものと言えども、御言葉に背くものなのである。

すべての夫婦が既に御言葉に沿った生活をしてきた体験があるに違いない。しかしながら、ほとんどの夫婦がその瞬間を御言葉にしたがって喜びにある時だとは受け取っていないのである。内省と夫婦の対話をやっている間に、彼等は自分たちの今までの生活で二人が最も近づき、深い絆を感じた出来事を3つ挙げさせられる。彼等は、それによって最も美しく、不思議な、はかりしれない喜びの瞬間を新たに体験することになる。対話の中で二人はこの瞬間に戻り、その時の気持ちを分かち合うのである。こうして、二人はかつて、御言葉にしたがって生きていたこともあったことに気づき、もう一度そこに戻りたいと思うようになる。そこで、次の段階、どうしたら毎日を御言葉のうちに過ごすことが出来るのか、というところに移っていくのである。

司祭が創世期の個所について話され、チームの夫婦達が自分達の生活のどの点でそれを生かしているか、いないかを生きた体験として (vivencia) 参加者夫婦達と分かち合う。

第6段階

相互の『信頼 (コンフィアンザ)』と『通じ合い』

この段階では、相互の『信頼』を持っていくことが御言葉通りの結婚生活をしていくのに不可欠な要素で、これを可能にさせるには通じ合い以外にない、ということについて学ぶ。これには人間と神の両要素がある。まず、人に必要な要素を振り返ると、相互の安心、相互の『信頼』ということがあげられる。二人は相互の『信頼』関係を妨げている対象を明らかにし、取り除かなければならない。和解のない結合はなく、通

じ合いなくして和解はなく、自己を見つめることなくしての通じ合いはあり得ない。

相互の安心には相互の『信頼』が必要である。この安心あって始めて互いに心を、考えを、気持ちを伝えようという気になるのである。一方が言うことは何でも相手に受けとめてもらえるに違いない、という安心が、ますます相互の『信頼』関係を深めていくことになるのである。結婚した人々はすべて、この、常に相手を受け入れる『信頼』を相手に寄せられなければならない。夫婦の『信頼』は、結婚した夫婦が一生持ち続けていくべき生活態度なのである。そして、それには自らの訓練が必要になってくる。『信頼』は人に要求するものではなく、人から与えられるものである。

相互の『信頼』を大きくするための道具は夫婦の通じ合いである。ここで言う夫婦の通じ合いは心を開いた対話のことを言う。これは単にくさい煙を追い出すとか、相手を責めたり、放り出したりしてしまうよりもずっと役に立つのである。本当の意味での通じ合いをすると、実際の行動も言葉同様、生活を豊かにあたたかいものにし、一人の発した言葉がもう一人の心にしっかりと住み着くようになる。言葉は相手の心であり、又それ以上のものである。会話は自己との出会い（セルフ・エンカウンター）から流れ出ているものなのである。こうした通じ合いは夫婦二人の与える心と、しっかりと受け止める心をも含んでいる。二人が一体となった生き方を経験しているために、心も考え方も一つになりたいという意志が自然と働くに違いない。これこそエンカウンターエンカウンターたるどころである。キーは「相手の話を聴くことが心を開くこと、心と心の出会い」、ということである。己の心を与えようとすればそれ程、一人ひとりがしっかりと自分を持っている必要があるのだ。

相互の『信頼』は結婚生活の基本になくしてはならない。夫婦は互いにどんな些細なことまでも相手に隠してはならない。分かち合うこと、打ち明けて話すことは生活全般に対して及ぶことで、ここには感情、信念、希望、業績、痛み、傷ついたこと、心痛、恐れ、幸せなどすべてが含まれる。秘密があってはならない。フェラール夫妻は、これなしには本当の、心からの一体は不可能だと言っている。このおかげで二人は互いの心に安らぎを持つことが出来、自然と一体となれ、幸せでいられるのである。（厳密には専門的な仕事のことは、生活に直接関係しないので話さなくても良い）

通じ合いでは明瞭さと謙遜という二点が重要となって来る。聞き手は相手の言うことを

しっかりと理解しなければならない。「いちばん知っているのは私だ」とか「本当のことは私が知っているのさ」と言った態度では成り立たず相手に対して謙虚でいるというのも重要な要素なのである。上記のような態度は相互の『信頼』を欠くもととなる。神は、夫婦二人を通して話しかけられるのであって、決して一人に語られるわけではないのである。

この段階で、夫婦は自分達の相互の『信頼』や和解をはばんでいるものの正体を知るようになる。通じ合いをしながら、二人はその障害を取り除き相互の『信頼』を取り戻すに違いない。これはいつでもたやすいことではなく時には苦痛を伴うことである。夫婦は常に相手に正直で、謙虚で、優しくなければならない。

新しく参加する夫婦達にチームの夫婦達は自分たちが、いかにしてこうした問題に取り組んできたか、今なお取り組んでいるか、結果としてどんな夫婦関係が得られたかということなどを分かち合って助けとなっている。

第7段階

カナ

聖書の御言葉を実生活に生かすことがここでの目標となる。この段階はカナの婚礼(ヨハネ2章)の箇所を例とした参加者全夫婦の黙想である。これは婚姻の秘跡とその恩恵を示す代表的な段階である。

妨げをのり越えて相互の信頼を取り戻すには、しばしば人知を超えた力が必要とされる。通じ合いと相手に対して注意を払うだけでは、相互の和解や心を打ち開いて一体となって喜びを得るには不十分なときがある。夫婦は自分達にない偉大なる神の御力を必要としている。そこで、ここと次の段階では御言葉に従って行くことで、彼等の生活で捨て去ってしまった隠れた神の現存、働きに改めて気付かせてもらう様になっていくのである。

そこで、この段階を体験するには、出来ればチャペルの中など祈りに適した場所が望ましい。各自が福音書の写しを持っていること。神の御言葉がゆっくりと読まれるのをよく

聴いて、心のうちで、私に言われている神の御言葉は何だろう、この話を聞いて私は何を考え何を感じたのだろうと自問自答していくことが大事である。ここで出した答えは後で分かち合われることになる。特にマリアの役割、彼女のとりなしの力、召使に対して発せられた御言葉「何でもこの人の言うとおりにしてください」、に心を配らなくてはならない。

夫婦達は、かつてイエズスがカナでの婚礼に同席された様に、今も彼等の結婚のうちに存在されることに気付くようになり、イエズスが彼等のうちにいられる具体的な姿に更なる驚きを覚えるようになる。

司祭は聖書に沿って風景を描写説明し、チームの人達は彼等の生きた体験 (vivencia) から、この話の意味と、ここでの話が自分たちの結婚に意味する事とを話す。他の夫婦達も彼等や彼等の結婚に示される聖書の意味を分かち合う。

第8段階

婚姻の秘跡とその恵み

婚姻の秘跡とその恵みは、結婚はキリストと彼によって選ばれた人、教会としての人々との関係の生きたサインであるということとその重点としてあげている。結婚した者すべてが、結婚することの重要な意味が「秘跡」となっていることに気付くことが大事である。秘跡は、もともと日々の生活の中にイエズスの現存、働きを確かにすることで、結婚した夫婦間だけでなく彼等と他の人々との間にも見られる必要がある。婚姻の秘跡はカナの話を実際の夫婦の生活にも実在するものとした。これは彼等の生活の「畑に隠されている宝」⁸⁷⁴ (マタイ13:44) なのである。

婚姻の秘跡によって一人の男と女はイエズスのうちに、イエズスによって結びつけられた。イエズスは二人を一つにまとめる「くびき」である。そのように結びつけられて、二人は互いに見つめ合うのではない。かえって、御父の心のままに、イエズスと共に同じ方向を向くようにすべきなのである。イエズスにあって、イエズスと共に見ていくことこそ彼等の関係をしっかり一体と結びつけて行く力となるのである。聖パウロはエペソ人への⁸⁷⁴ 天の国は畑に隠されている宝に似ている。それを見つけて人はそのまま隠しておき、喜びのあまり、持ち物をことごとく売り払い、その畑を買う。

手紙の中で「キリストを恐れ敬う心をもって、互いに仕えあうべきである」と書いている。

イエズスと共に婚姻の秘跡のうちにくびきでつながれた夫婦は救い主御子、神の教会としてのイエズスとのつながりの、生きた証拠である。イエズスの存在が彼等を通して、その子どもたちに、他の人々へと流れ出ていくのである。イエズスは彼等に惜しみなく贈り物をする。そしてこのありがたい贈り物が「恩恵」と呼ばれる。それこそは愛の恩恵、すなわち聖霊であり、神御自身であって、愛はイエズス、御父と子との完全なる一体化から生まれるもの、神と共にある生活の中で分かち合われるのである。婚姻の秘跡を通して受ける恵みには一体となること、癒し、正しい親としての姿勢、相互に聖化しあうこと（すべての人が聖なる者なるようにと呼びかけられている）、証しすること（人に影響を与える）なども含まれる。この大いなる恵みのうちに生きる夫婦達はキリストの死と復活との生きたしるしである。なぜなら彼等は愛に生きる為に主においての夫婦として生きるように、何度も個人である自分に対して死んでいるからである。こうして夫婦達は、この世における神の現存と働きの生きたしるしとなり、また証し人となるのである。

ここに来て夫婦達は互いの内の深く聖なる愛の寛大さに感謝をし、神について生きていくことを誓い合うのである。彼等は一体となって生きていると、常にイエズスからのほとばしり出る神の助けが得られることにますます気付くようになる。イエズスの命そのものを受けながら、彼等はまたイエズスの強さ、忍耐力または堅忍、謙虚さ、許しと受け容れの力をも、受けている。イエズスと一体となった生き方の夫婦は彼等の生き方を通して、彼等自身や他の人に神の生きたしるしとなっているのである。こうした夫婦は、彼等の結婚や家族との生活に神の存在と働き（恩恵）を見、認め、彼等の行く所、会う人すべてにその現存を運んでいるのである。

司祭は婚姻の秘跡の意味を説明し、チームの人達は自分たちの結婚生活の中でのイエズスの存在と働き（恩恵）との生きた体験者として参加者と分かち合う。

第9段階

大いなる評価

ここでは「主において」の個人的な、深い内省をしていく。ここに来て、彼等は自分自身が誰なのか、又結婚のうちにある大いなる力を、結婚に伴う責任と共に気付かされることになる。そのうち少なくとも一方は、マリッジ・エンカウンターで体験できるようになっており、この段階と後に続く章とがマリッジ・エンカウンターの本質と言える部分である。

9章では、参加者一人ひとりが神の現存のうちにある自分を深く見つめた。各自が質問事項からなる「課題」を与えられ、自分たちの結婚生活の最も大事な部分、自己、結婚、神、子どもたち、家庭、教会、社会、そして使徒職などを通して評価する助けを得た。自己内省の前と内省の間、各自は神の御導き、現存と働きとに耳を傾け祈った。

9段階まで終えた後、参加者達は共に短い祈りをする。できればチャペルで祈られるのが望ましい。これには聖書やそれに代わる教書を読む形がとられ、もちろん参加者全員で行われる。

第10段階

大いなる通じ合い

ここでの目的は神の御計画に沿って生きて行くことを体験することである。夫婦達は神の現存に気付いてここまでの過程で得た個人的内省を分かち合う。彼等は互いに相手に対して、神が自分たちの口を通して話し掛けられる言葉の種となるのである。

行 動

自分達の結婚をあるべき姿にする

新しい結婚生活に踏み出させるマリッジ・エンカウンター・プログラムを体験して、夫婦達は『行動』部門へと移って行く。最終段階に至って、夫婦達はいよいよ神の御計画に沿って生きていこうという願いを持つようになる。こうした観点から結婚の靈性は、神の御計画に沿って生きて行くことすなわち一体となる体験や心を開くことの達成が大事とさ

れるクリスチャンとしての結婚を遂行するには、夫婦関係に何が必要なのか、という問題へと発展して行く。生活設計はこの二つの点から始まって行く。

第11段階

結婚の靈性

この結婚の靈性の段階では夫婦達は結婚の靈性、すなわち命、精神、魂、創造性、聖性と「主に在って」一体と結ばれた彼等の結婚の神秘さを支える行動について内省する。結婚に対する内省と通じ合いによって、夫婦達は神の靈（エペソ人への手紙4:22）を自分達の結婚にも見られることに気付いて行き、彼等が体験したこと、すなわち二人が強い絆で結ばれている今の状態をずっと続けて行きたいと望むようになる。どんな関係でも同じことが言えるが、この夫婦の関係についても栄養を与えられ育てられなければ、いつかはしぼんで消えてしまう。そこで結婚生活で一体となったことを体験し、彼等のつながりの内にイエズスの靈の存在やそれが大きく育って行くことを確かにするのが、この道が続けて行くために彼等がしなければならないこととなってくる。神の靈は彼等の結びつきを助ける力であり、これこそが結びつきから来る恵みなのである。

そこで、この結婚の靈性の段階では、イエズスの靈との関係を支え、食料、栄養、強さと深さとなるのに必要なあらゆる行動のために専念していくことになる。この行動は愛の靈のための食料であり、夫婦たちと家族の生活に、生きている神の愛に他ならない。

結婚の靈性は現実の生活と引き離してはならず、むしろすべての点で結びつけた方がよい。結婚の靈性は、夫婦とイエズスの靈とを、現実の生活をしながら強めていく助けとなる。従って、信仰と実生活との間のいかなるギャップをも取り除いてくれるのである。

このゴールに到達するために、夫婦はエンカウンターの4本柱に基づいた決まった行

動に専念しなければならない。すなわち、神の御計画のうちにある結婚、相互の信頼と通じ合い、カナ、そして婚姻の秘跡とその恵みである。こうした生き方をしていくには夫婦はともに相互の信頼と通じ合いを深め、向上し続けていく必要がある。二人の信頼から生じるものは、すべて日常の出来事や体験の中に見いだすことができる。二人が互いに見せる接し方と愛の質は二人が神に見せる接し方と愛と同じだと言える。この二つの姿は決して別々ではないのである。

二人が互いに、そして神に見せる接し方の力の源は、婚姻の秘跡とその恵みから来るものである。婚姻の秘跡を経て、一人の男性と女性とは新たなる存在、夫婦となり、イエズスはそのくびきとして二人を結ばれているのである。イエズスは彼らのうちに在って、共に生きていくことを望んでおられる。すなわち彼らの日常の生活に常に存在される。だから神の御言葉を聞き漏らさないように注意していなければならない。『この方の言われる通りにしなさい』。神は二人に互いの口を通して語りかけられているので、二人が相互に信頼し続けていなければ、神の御言葉を聞き漏らしてしまうことになる。一人一人別に、そして二人して、神御自身を顕わされた聖書の御言葉を聞いていくこともまた、必要である。このプログラムは結婚を控えた者たちのための結婚の靈性をも高めてくれる。二人でやることは夫婦生活をも含め、イエズスの霊を二人のうちにより宿していくことでもある。これこそ神の御計画のうちにあって金言にそった結婚であると言える。

チームの夫婦達がこれについての彼等の生活の中での『動き』を分かち合ってくれる。

第12段階

結婚の誓約

ここでは結婚がオープンになるように助けることが目的で、夫婦達はそれぞれ、

一般社会に広くクリスチャンとしての結婚を打ち立てること、それによって、世界をより神に認められた人間社会にしていく為の責任と使徒職とを内省することにある。マリッジエンカウンターのもともとのねらいは、結婚した夫婦達に「世界を神の御意志にそったものに造り直していく」為の生活の仕方を示していくことである。この章では結婚の靈性にそった生き方、すなわち神の示されるままに積極的に生きていくよう、夫婦達を奮い立たせていく。クリスチャンとしての結婚をすることは二人が互いに、そして子ども達や他の人たちと共に、神の現存を証ししていく使命を負うということである。「誓約」には「決定、約束、選択、責任、真実、そして奉獻と結果として神と結び付けるものすべて」を含んでいる。どんな人にもそれぞれの人にのみ出来ることがあり、その体験から得られた宝物を人々と分け合っていくべき義務と使命があるのである。

この義務や使徒職は結婚の靈性から生まれてくる。結婚の秘跡やその恩恵は結婚の靈性をしっかりと歩んでいくことで、他の人々に、クリスチャンの結婚による愛と一致とを示していく、という責任を負うことになるのである。そして、これは夫婦から家族へ、家族から一般へという順序で伝わっていく。結婚とは単にひとりの男性と女性だけのものではなく、その夫婦が出会うすべての人々と係わっていく問題である。このコースを体験したあとには、夫婦は自分達の結婚生活に対する堅固なる計画をたて、互いの関係のうちに、子ども達、教会、そして社会生活のうちにそれを見い出していくようになる。これを確かなものにするには一人ずつの内省と、夫婦の通じ合いが役に立つ。

チームの人達はいかにして神と結びついた結婚生活をより強く、深く、活力あるものにしていくかを実生活の中で如何に実行していくかについての分かち合われる。

第13段階

神への感謝の祈り

感謝の祈りは、神が自分達夫婦や家族へなされたすべての御業への賛美や感謝を参加者全員でささげ祝う喜びに満ちた御ミサ・聖祭である。人々は自他ともに家族に必要なものを神へ乞い願う。

エンカウターの後で

家路につくにあたって、夫婦達はそれぞれ2週間後までの課題を渡される。課題は2つあって、その1つは、家族全員が家庭における自分達のあり方を再検討するものである。親は子ども達に心、気持ち、そして魂を開いて相手の言葉に耳を傾けるということを身をもって示す。そして2つ目は、夫婦二人に対するもので2週間後のミーティングに戻るまでに完成させておくことが求められている。

結び

これが1960年スペインでの初めの夫婦が使った方法の要点である。これは生活と信仰が一つになった心からの結婚の靈性を示したもので、夫婦二人、そして二人と神との結びつきを大きく成長させてくれるものである。これが教皇ピオXII世チームがスペイン各地に、また世界の隅々にいたるまで広めた『コップ』といわれるものである。

CHAPTER X

1961年－70年

スペインでのマリッジ・エンカウンター的发展

ピオXII世の既婚者チームは、多くのカップルに伝え広めながら、運動をどんどんと大きくしていった。1960年代、教皇のチームは他の教区にまで広がり、1960－69年の間にはスペインの他の夫婦のための活動や家族のための運動とも一緒に活動をする程になっていた。スペインの司教の要請でこの運動はMFC^{註75}と命名されることになった。MFCはマリッジ・エンカウンターをその奉仕活動の一つとして取り入れたが、発展に伴い、ついには、教皇のチームの手の届かない程にまで広がって行った。

バルセロナの外までのマリッジ・エンカウンターの広がり、教皇チームは従来のマリッジ・エンカウンターの構想、精神やその方法が失われていくのではないかという危険を感じた。『時のしるし』を受けて教皇チームは、マリッジ・エンカウンターを一つに統合するようある夫婦を指名した。この夫婦は、ディエゴとフィノベルトメーグラネルで、スペイン全土、そして島々にいたるまで精力的に歩き回り、教皇チームだけのためだけでなくMFCのためにも、マリッジ・エンカウンターの昔からの構想や神秘を伝え広げていった。

スペインでのMOCEAMの基礎確立

ラテンアメリカでのMFCの創始者ペドロ・リカルド神父は1958年にバルセロナを訪れたおり、たくさんある結婚と家族のための集いはひとつにまとめられた方が良く、より価値もあり、ラテンアメリカでも同様にしていることなどを語った。司祭のこの話に教皇チームも早速取り掛かることにした。たくさんある集いの中で主だったふたつ、ピオXII世チームと『家族に関する使徒職』^{註76}の活動者は、1957年全国家族集会日にめざましい発展を遂げることになった。全国家族集会日は続く58年、59年そして60年にも開かれたが、この時に他のグループもこれに参加してきた。第3回全国家族集会日はソルソナの司教で、スペイン司教会議の書記および既婚者チームのアドバイザーであるタランコン司教

^{註75} Movimiento Familiar Cristiano

^{註76} "Obra" apostolica Familiar

^{注77}によって進行されたが、そこでいくつもある結婚のための、家族のための集いを一つにまとめようという要求がうねりのように各地に生じてきた。司教の力添えを得て、アドバイザーである各グループはMOCEAM^{注78}と呼ばれることになる連盟の原案をつくり出した。そしてこのMOCEAMから後にMFCへと発展していくことになる。

1962年8月、第1回目のMOCEAMが開かれた。会の中に教皇のチームとOAFのリーダー達とによって、会としての地位は、結婚と家族のための組織や運動が全国的連盟へとその姿を変え堅く結ばれるようになった為に引き上げられて行った。

スペインでのMFC (Christian Family Movement)の形成

第2回ヴァチカン会議(1962-65)の間、スペインの司教はスペイン国内のMOCEAMを早急に確固たる一つのものにまとめあげるようにせかされていた。1964年の11月、上記の教皇チームとOAFのリーダーはマドリッドでそのことについて話し合いを持った。

続く1月にはふたつのチームのメンバー、教皇チームからはジェイミー&メルセデス・フェラール-エスコダとカルボ神父が、そしてOAFからはペペ&イザベル・ガスコン・ラグナとサルバドル・マノズ・イグレシアス神父^{注79}とが、さらなる統一に関してザラゴザ^{注80}で話し合った。これらのふたつのチームの人々は自分達をスペインでのMFCの創始者だと自負していた。このMFCという名前は南アメリカのチームからつけられたもので、それは、南アメリカチームにとって、いつこの世界的運動に加わっても、こうした統合された名前なら大丈夫という訳なのである。また、この名前は彼等の望みと大志とを的確に言い表してもいた。

1966年2月、MOCEAMは3回目の会合をスペインのバルセロナで開いた。この会場で、ふたつのチームは来年の4月に開かれる会合に間に合うように共通の計画をたてた。4月にはMFCの運動をスペイン司教の全国会議で全国的レベルで認可してもらおうとし

^{注77} Bishop Tarancon, the bishop of Solsona and secretary of the Spanish

^{注78} 結婚の霊性や使徒職を深める為のカトリックの運動

^{注79} Fr. Salvador Munoz Iglesias

^{注80} Zaragoza

ていた。その前に、スペイン司教会議は、スペインにあるすべての同じ目的の集まりがMFCという一つの名のもとに統合されているように要請していた。

1967年11月、ふたつのチームと、他の参加を希望している団体とは一緒になって、古い名前や活動をすてて一つになることに決定した。こうして別個なものをひとつにまとめることによってMFCは、全国的な運動へと引き上げられていった。1968年2月24-25日、ペペとイザベラ・ガスコン・ラグナはMFCの全国的代表者に選ばれ、カルボ神父が全国的指導者に指名された。

参加したチームはそれぞれにあって自分達でやっていて、この運動の役に立つ活動を提供してきた。教皇のチームはマリッジ・エンカウンター・プログラムを提案した。このアイデアはMFCの奉仕の一つとして取り上げられ、結婚と家族のための靈的向上の役に立つこととなった。代表者とカルボ神父はディーゴ&フィーナ・バルトメ・グラネルをMFCのマリッジ・エンカウンターの指導者とすることにした。

教皇チームによるスペイン各地へのマリッジ・エンカウンターの広がり

一方、マリッジ・エンカウンターは1958年から67年の間にスペイン各地へ広まった。1958年に運動に参加した既婚者達がローマから戻ると、多くの司教が彼等の教区にもチームを形成するために教皇チームを招いた。広がり急速であった。バルセロナでの教皇チームはマリッジ・エンカウンターという新しい道具を手に入れた。問題は、バルセロナ以外の地でマリッジ・エンカウンターを体験し理解してもらえるように、どのように準備していくかということであった。解決のために教皇チームの司祭達が全国集会に呼ばれた。これは1962年9月、より良き世界運動の黙想センターであるセゴビアのラグランジャで開かれた。ここでカルボ神父はマリッジ・エンカウンターの第1と第2段階を説明し、居合わせた司祭達は各自の教区へ戻ってそれぞれの教皇チームにその体験と、要点とを伝授した。このようにしてマリッジ・エンカウンターは各地方の隅々まで広がっていったのである。

その結果、続く1963年には教皇チームのあるところではどこでも、すばらしい勢いをもって人数が膨れ上がっていった。3月8日から10日のセゴルベ-カステロン^{#81}でのマ

^{#81} Segorbe-Castellon

リッジ・エンカウンターでは17組の夫婦と司教が初体験をし、最終日には司教によって大きな感謝のミサがもたれた。司教は感服された様子であった。また、体験した人々の要請によって、さらに何回かのマリッジ・エンカウンターが催された。日程は始め、金曜日から日曜日までであったが、無理な人が多いので、結局土曜日と日曜日の2日間という形におさまった。

ディエゴとフィナはセゴルベ-カステロンでの初めの会に参加した。彼等は自分達が参加して夢中になった経験から、この運動をスペイン各地に広げることに惜しみない協力を提供していた。彼等には子どもがいなかったのと、経済的に恵まれていたのが彼等の奉仕的活動に幸いしていたのかも知れない。

一方、運動の名はスペイン中に知れ渡っていった。10月には、MOCEAMと司牧神学協会^{註82}とが会議を開いた。その会議の後、カルボ神父は「結婚している人たちの為のエンカウンター」^{註83}についての説明をした。説明は初めの3段階についてであったが、この会合で、MOCEAMの助けを得て司牧神学協会は夫婦のためのコースを作り、「結婚の司牧に関する小さなコース」^{註84}と名付けた。この「小さなコース」のおかげで運動はますます知れ渡るようになった。

1964年12月16日、10回目のエンカウンターがカステロンの教区内のベキ^{註85}で開かれた。このときジェイミー・フェラールは、「この運動はもはや教皇チームのない所でも広まっていく程大きくなった」と言っている。1965年11月、マリッジ・エンカウンターはヴァレンシアとパロマ・デ・マヨルカ^{註86}で大成功をおさめた。教皇チームはこの運動がスペイン中に広がっていくことを願った。これに伴い、この運動独自の構想と手段とを整える必要がでてきた。

マリッジ・エンカウンターのコーディネーターとの約束

1966年7月までにマリッジ・エンカウンター・プログラムは教皇チームの最も実りあ

^{註82} Institute of Pastoral Theology

^{註83} the Encounters for Married Couples (Encuentros Para Matrimonios)

^{註84} Cursillo De Pastoral Matrimonial

^{註85} Bechi

^{註86} Valencia and Palma de Mallorca

る活動のひとつとなった。教皇チームはこれを彼等の運動の中心とすることに決めた。マリッジ・エンカウンターを盛り上げてきたカルボ神父とディーゴ&フィーナとはコーディネーターに任命された。彼等はまず教皇チームのある教区から、この新しい使命を伝え、盛んにしていこうという計画をたてた。続く2・3ヶ月の間、彼等は各訪問地で、この結婚と家族のための新しい使命に関する説明を求められた。カルボ神父はアメリカを訪問していたので、1967年の活動はほとんどフィーナとディエゴの二人で行われていたことになる。

この二人の活動への熱意には目を見張るものがあった。1967年1月上旬、二人はパロマ・デ・マヨルカへ行き、そこの教皇チームと会ってマリッジ・エンカウンターの提示の仕方についての意見交換をした。同じ月の14日と15日には、二人はマドリッドでこれを紹介していた。1月21・22日はセヴィレにて、2月4/5日はヴァレンシアでマリッジ・エンカウンターを開いていた。このエンカウンターにはOAFから3組の夫婦が参加した。この人達はマドリッドで、この運動に携わっている教皇チームの人と話をしたことから、これを体験してみたいと興味を覚えたようであった。このヴァレンシアでの体験で、教皇チームとOAFチームとはより親しく交流する様になり、この運動がふたつのチームの橋渡しをした形になった。グラナダでは2月25/26両日に始まった。2度目はマドリッドで4月に開かれ、教皇チームとしてマリッジ・エンカウンターを開くのははじめてであった。そして続いていくつもの会が続くことになる。4月14/15日セヴィレ、5月4/5日ヴィルバオ5月20/21日ザラゴザ、6月3/4日カセレス、そしてその年の暮れにはセヴィレでも開かれた。そして夏の間はバルセロナ、ヴァレンシア、パルマ・デ・マヨルカといったところで開催されている。1967年4月MFCの創立の後、マリッジ・エンカウンターのプログラムはMFCのある所すべてで行われるようになった。ディエゴとフィーナによれば1967年夏の終わりには三つの所を除き、MFCのある所ではすべてがマリッジ・エンカウンターが行われるようになったということである。

マリッジ・エンカウンターのテキスト、スペインにて印刷される

1967年9月現在までのマリッジ・エンカウンターはカルボ神父の考案をタイプした原稿にそって行われてきた。要点と方法の4本柱からなる概要は印刷されてマリッジ・エンカウンター・プログラムを行なう各夫婦に手渡された。1967年9月カルボ神父が、アメ

リカへの二度目の訪問からスペインへ戻られた時、ディエゴとフィナ達と一緒に、互いに知らなかったそれぞれの体験を話しあった。カルボ神父は種を蒔いた農夫のベルトメウスと自分とをくらべられ、今や種を耕す時期が来たと考えられていた。問題はスペインとアメリカの両国でマリッジ・エンカウンターの本来的、そして真実の霊性と神秘をいかにして耕していくかということであった。彼等は『時のしるし』を読むことの方に注意を向けていたので、従来のテキストの出来は余り完全なものとは言えないままであった。これは説明を必要とし、構想と方法に関しても一段と深められたもっと詳しいアウトラインが必要とされた。

このために彼等はバルセロナで特別な集会を開いた。彼等はバルセロナ、バルマ・デ・マヨルカ、セゴルベ・カステロンそしてザラゴザでマリッジ・エンカウンターを開いている夫婦や司祭達を呼び集めた。集会はカルボ神父とディエゴ、フィナによって進行された。彼等はマリッジ・エンカウンターとは何であるか、あるいは何でないか、週末の二日間で参加者を奮い立たせる役員側の夫婦と司祭の役割は何であるか、MFCの奉仕としてのマリッジ・エンカウンターはどうあるべきか、という基本的な三点についてを討議した。各段階における要点と方法とは現行のまま行うことにして、このアウトラインは1967年11月に出版された。これはメキシコの司祭や夫婦達に、またカルボ神父が訪れたアメリカにも送られた。

運動はスペイン各地へ広がった。結婚と家族のためのいろいろな運動の統合に向けての討議が盛んになったため、ディエゴとフィナは11月3/4日にマドリッドのマヤダルホンダ^{註87}の特別マリッジ・エンカウンターに彼等を招待した。そこでは6つの地域からの夫婦、アメリカからはヘスラー神父、ガテマラからロペツ神父と二人の外国人司祭、が特別のマリッジ・エンカウンターを体験した。参加した夫婦はディエゴとフィナの二人を教皇のチームのまだない地域へ呼んで、マリッジ・エンカウンターをしてくれるようその予定を組んだ。そこで12月1/2日タラヴェラ、1968年1月13/14日にはトレド、そして2月17/18日にはムルシアで開催された。そして翌週にMFCは正式に確立され、参加者はマリッジ・エンカウンターを結婚と家族のための特別サービスとして取り入れ、ディエゴとフィナをMFCのマリッジ・エンカウンターの国際的代表者に推薦したのである。

^{註87} Majadalhonda(Madrid)

マリッジ・エンカウンターの発展

MFC主催の第一回マリッジ・エンカウンターは3月23/24日、より良き世界運動のセンターであるセゴヴィアで開かれた。5月の11/12日にはバルセロナで、アメリカへの旅に参加したいMFCの夫婦達を対象にして開催された。

6月1/2日の両日、MFCの代表はマドリッドに第一回「マリッジ・エンカウンターの教区チームの全国大会^{註85}」を開いた。この大会は、ベルトベウス夫妻とカルボ神父によって進行された。ここにはそれぞれの地域からひと組ないし、ふた組の夫婦と司祭が出席した。会の目的はマリッジ・エンカウンターがMFCによる奉仕であるという事実に気付かせることにあった。この会ではまた、前回バルセロナで討議されたマリッジ・エンカウンターとは何であるか、何でないか・マリッジエンカウンターのチームの人達の特徴、マリッジ・エンカウンターを活気あるものにしていく精神が力説された。1967年11月に印刷されたテキストを作り替えることも話し合われた。それに当る夫婦と司祭が決められ、7月13/14日にヴァレンシアで会う事に決まった。MFCはアメリカとメキシコで始まることになったエンカウンターを支援した。そして9月14/15日、マリッジ・エンカウンターは遂にサン・セバスチャンで開かれたのである。

MFCによるマリッジ・エンカウンターをまとめて、より活発にするために9月、2日間のミーティングが3ヶ所の異なった地域で開かれることがディエゴとフィナによって提案された。そして、ミーティングはムルシアとザラゴザ、そしてマドリッドで開かれた。10月1日にムルシアで開かれた会にはグラナダ、アルメリア、ヴァレンシア、そしてムルシアからの夫婦達が集まった。また同じ月の26/27日のザラゴザでの会にはザラゴザ、ビルバオ、サン・セバスチャン、セゴルベ-カステロンから、11月24/25日にはマドリッド、ヴァラドリド、トレド、タラヴェラ・デ・ラ・レイナ、そしてセゴビアからの夫婦が参加した。

国際指導司祭のカルボ神父とコーディネーターの二人がこれらの会の司会を担当した。そこに参加した夫婦達と司祭達とはエンカウンターをよりよくするための考えや提案等を出し合った。彼等は同時にマリッジ・エンカウンターのチームとなっている夫婦達の生活

⁸⁵ The First National Assembly of Diocesan Teams of Marriage Encounter

態度を検討し、彼等の生き方は、真実このマリッジ・エンカウンターに則ったものでなければならぬとした。

会合では、エンカウンター・チームをMFCがあるのにまだ取り入れていなかった所にもつくり始めていくことが決められた。これによって、初めてマリッジ・エンカウンターをMFCの当初からの活動として携わってきた人達は満足することが出来た。これらの人達は前述の場所のマリッジ・エンカウンターチームづくりを手伝うことに同意し、その人達が彼等自身で、これを開催出来る様になるまで手伝うことになった。ムルシアからのチームはアバカットとアリカントの、ザラゴザ・チームはホイスカとテロイル、グラナダ・チームはカデツ、バルセロナ・チームはレリダとサルソナの面倒を見ることに決まった。11月2/3日、ディエゴとフィナ、そしてカルボ神父はカナリー諸島のラスパルマスのMFCを訪れた。

11月初めの週末、MFCの国際担当のカップル（ペペ&イザベル・ガソン-ラグナ）と指導司祭（カルボ神父）はラスパルマスの黙想会で初めてのマリッジ・エンカウンターを開くためにカナリー諸島へ赴いた。そして翌週にはカルボ神父とピッチ-ボテイとルイズ-ルイズの夫婦がフランスのラプリーで開かれた第6回ICCFM代表者会議^{註89}に参加するために招かれていた。

11月の第3週末（15/16日）マリッジ・エンカウンター第2回「教区のチームの全国大会」がトレドで開かれた。これには全国代表のガソン-ラグナとMFCの国際指導司祭のカルボ神父が出席し、ベルトメウスや他の婚約者・家族や既婚者の生活・特にマリッジ・エンカウンターへの奉仕を含む使徒職を広げていく責任を負った夫婦達や、教区のチームからの多くの夫婦達皆が、マリッジ・エンカウンターを開くことにかかわり、協力していた。スペイン各地からの夫婦によって様々な点が付け加えられた。グラナダからの夫婦はエンカウンター環境について、バルセロナからはマリッジ・エンカウンターとポスト・エンカウンター^{註90}への支援参加、パルマ・デ・マヨルカは、この活動が今現在が都市中心部だけで行われているのでスペインの僻地へも広めていくこと、ビルボアからは結婚の霊性について、そしてカルボ神父自身はマリッジ・エンカウンターに精神と神秘の深まりを得られてきたことなどの、多くの提案や報告がもたらされた。

^{註89} ICCFM Executive Meeting

^{註90} Post Encounter

1969年11月3回目のマリッジ・エンカウンター「教区のチームの全国大会」が開催され、司祭達を含む非常に多くの夫婦が参加した。この会では主催者、MFCの代表者とガソン夫婦・カルボ神父たちはCEN^{註91} と呼ばれ、夫婦と家族のための様々なサービスに携わった。会議では今日の世界における結婚の現状、ザラゴザの夫婦によって励まされた話、ムルシィアからの対話と『相互の信頼』の話そしてバルセロナからの夫婦の結婚の霊性の話などが紹介された。カルボ神父と代表者達からはマリッジ・エンカウンターをもっと世界に広めていく大きな構想について語られた。

MFCは1970年から71年にかけて、引き続きこの運動をスペイン各地へと広めていった。カナリー諸島のラスパルマスの夫婦達は1970年1月ホイテヴェンツラとランザロテの島々へと普及させた。その年の2月4/5日初のエンカウンターがタラゴナで開かれ、次の週にはザモラ地区^{註92} へもたらされていた。つづく第4回のMFC国際会議は、1972年1月29/30日マドリッドで開かれた。教区のほとんどのチームがカルボ神父、ガソン夫妻、バルトメ夫妻、司教そしてMFCとCENの全国チームと対面した。目的はテキストの第3版についての校正と作り直しである。会の開催に先立って、参加者達はそれぞれの体験や提案などを考えておくように言われていた。これらは討議されて、次の編集への確かなアウトラインとなっていくのである。

会の後でバルトメ夫妻はスペイン中のMFCのある地域で、あと残り三ヶ所だけがマリッジ・エンカウンターを体験していないことを告げた。彼等はじきにそこでも開催されるようにと強く要望した。

マリッジ・レトルノ

ディエゴ&フィナーバルトメはマリッジ・エンカウンターを広めている間に、もとのマリッジ・エンカウンターの構想が部分的に薄れていっていることに気付いた。エンカウンターを体験して、夫婦二人は「主において」互いの和解を得てはいても、一致した夫婦として神との和解をする為の歩みは続けられていないのではないかということを感じたのである。そして、祈りという初めの原点がエンカウンターを体験した夫婦達に十分実現されていなかった。彼等はまた、特にチームの夫婦に、彼等の霊的な現状に栄養が不足し

^{註91} Comision Equipo Nacional

^{註92} Las Palmas in the Canary Islands, the island of Fuerteventura a & Lanzarote, Tarragona, Zamora

ていることにも気が付いた。二人はこれではマリッジ・エンカウンターの元来の構想が失われてしまうことを痛感し、カルボ神父と話し合いをもった。神父はこの話を聞いて、これはエンカウンターとは別のプログラム^{註93}を作らなければならないという印が示されたのだ、というふうを受け取られた。

ベルトメウス夫妻から話を聞いて、カルボ神父は彼等がこの新しいプログラムを直接経験できる機会を作る必要を感じ、それに着手し出した。1967年1月神父は構想のアウトラインを作り終えた。初めこれはマリッジ・リ・エンカウンターと呼ばれたが、後にマリッジ・レトルノ^{註94}と変更されることになった。

マリッジ・レトルノは週末を利用して、聖書を通して夫婦のあり方に注目したものであった。この期間中、まず、夫婦は彼等が神の御言葉を聞くのに妨げとなっているすべての人間的障害を取り除いて和解することから始めた。その後は、父（創造主である神）と子（救い主である神）と聖霊（聖化する神）^{註95}に出会う3段階になっていて、そのすべての段階に「観察する・判断する・行動する」という手段が含まれている。参加者はすべての段階で自分が神とどんな関係にあるかを観察する。また神が彼等に語られることに耳をすます。そして神の求められている自分と、現実の自分の姿とのギャップをいかに埋めたいかを考えだす。この体験を通して、神の御言葉は彼等の生活の根底の土壌となっていくのである。この体験の中で、夫婦はよりじかに、夫婦の祈りの出発点である神との和解を体験し、結婚の霊的な次元へと養われていくのである。

1967年2月、カルボ神父とディエゴ&フィナ・ベルトメはスペインのカルタヘナ^{註96}で初めてのマリッジ・レトルノを開いた。1971年にはアイルランドでカルボ神父とホセ&マルガリタ・ピッチ・ボティによる国際マリッジ・レトルノがICCFM主催で行われ、アメリカからのメンバー、パット&パティ・クローリー、ジェイミー&アーレーン・ヴェラン、デヴィン夫妻そしてハイネン神父の参加も見られた。

これらのスペイン人夫婦達と神父はマリッジ・エンカウンターこそ夫婦と神との間に和

^{註93} Encuentro de segundo grado

^{註94} Marriage Retorno (Retorno Conjugal)

^{註95} God as Father (Creator), Son, (Redeemer) and Holy Spirit (Sanctifier)

^{註96} Cartagena, Spain

解をもたらす根本的なものだと堅く信じていた。彼等はまた、これが一般的社会にある家族達を強め健全な姿にする助けの基本でもあるとも信じていた。そうした家族こそ「神の御旨にかなった社会に造り替える」主な人達なのである。彼らは、自分達は教皇の「行動への呼び掛け」に応えている、という充実感を感じていた。この使命にそって他のキリスト教の家族達のための活動にも接していった為にこの体験をスペインの外へまで伝えていくことができた。このことが1966年ICCFM^{注97}の広がり非常に大きな助けとなったのである。

^{注97} International Confederation of the Christian Family Movement

CHAPTER XI

1960年代

マリッジ・エンカウンター、スペイン国外への広がり

1960年代、スペインの結婚と家族のための運動^{註98}とラテン・アメリカのMFCとは頻繁に連絡を取り合い、そしてICCFMが生まれた。この一番の使命はラテンアメリカ、北米を含む他の地域へのマリッジ・エンカウンターの普及である。

ICCFMの確立

いろいろな場面で、世界中にある結婚した者の集いが一堂に会して国際的会議を開くことの必要性が生じてきた。まずリカルズ神父の影響である。神父のスペイン訪問によって二つの地域の運動が堅く結ばれるようになった。この近づきは、ラテンアメリカのMFCがカルボ神父とホセ&マルガリタ・ピッチ夫妻を1963年7月開かれたリオ・デ・ジャネイロでの第3回会議に招待したことでより深まった。彼らはスペインの各団体の代表として特に教皇チームの代表として出席した。この会議でのテーマは「家庭での父親、現代社会での羊飼い」というものであった。この会議でラテン・アメリカ代表団はメキシコからのペペ&ラズマ・アルヴァレス-イカザ夫妻をスパニッシュ・ラテン・アメリカMFCの代表に指名した。ここでカルボ神父とピッチ夫妻は非公式に今スペインで起きていること、特にMOCEAMのこと、スペイン中にある同じように既婚者のための、家族のための集いをひとつにまとめる為に起きている運動等に付いて話し合った。

2番目の場面は、1965年に始まったヴァチカン会議の第4会期が世界中のM&FMの国際的構想にまとめるように働きかけたことである。ラテン・アメリカMFC代表のペペ&ラズマはこれに招待された。彼らは教会で家族の代表として扱われた。11月、メキシコ代表の夫婦はフェラール夫妻、フランシスコ・クララソー氏と妻アサムタ・ラヴェントス達に彼等と一緒にローマに行って、彼らが呼ばれた会議に提出する、家族に関する希望と提案などを考えてくれるのを助けてくれるように頼んだ。彼らは次のような3つの問答を描きあげた。まず、会議に伝えるべき家族の問題点は何かということ、また彼らが今日の教会のあり方で一番気に入っているものは、そして今日の教会に変わってほしい、改めてほしい所は何かということであった。この共同事業は教皇チームの代表者にスペインの

^{註98} Marriage and Family Movements

MFCの大きな原動力となっただけではなく、「家族の家」^{註99}に世界中の運動をひとつにまとめなければならないという広大な価値を悟らせることになった。

最後のイベントはラテン・アメリカMFCのヴェネズエラ・カラカスでの第4回会議である。この会議のために、このグループはカルボ神父、フェラール夫妻だけでなく、世界中の結婚のための活動団体からの代表に出席を求めた。閉会に当たり、代表者はICCFM設立の書類にサインをした。創設メンバーの名はラテン・アメリカMFC、北米CFMそしてスペインのMFCである。ここでの主な目的は家族のための国際的発言者となることであつた。

ラテン・アメリカでの初めてのマリッジ・エンカウンター（1966）

カラカスでの会合でカルボ神父とフェラール夫妻はマリッジ・エンカウンターについて語った。ほとんどの参加者が、彼らの国でもこれを開催したいという興味を示してきた。閉会に際して、メキシコの代表者ペペ&ラズマはカルボ神父とフェラール夫妻とに自分達の所でもマリッジ・エンカウンターを開いてくれるようにメキシコ・シティーに招いた。そして、そこでの初回を開いた後、フェラール夫妻は彼等自身の用事のためスペインに帰国した。しかし、カルボ神父はメキシコに留まり、そこでエンカウンターを体験した人々と、メキシコの他の地区でもプログラムを催していった。こうしてマリッジ・エンカウンターはメキシコから、近くのラテン・アメリカの国々のMFCへと広がり始めていったのである。

北米での初めてのマリッジ・エンカウンター

1966年11月エンカウンターを一度経験したことのあるジェイミー&アナ・マリー・ベネット・アビーガはカルボ神父に休息してもらうために、フロリダ・マイアミへ招いた。マイアミに滞在中、彼らは神父と話し合い、スペイン語を話す夫婦達のためにもマリッジ・エンカウンターを開くことを決め11月に開くことにした。これにはキューバの7組の夫婦と2人の神父、ヴィラロンガ神父とテキサス州ブラウンヴィレの司教を引退されたフィッツパトリック神父^{註100}とが共に参加をされた。カルボ神父はこの人たちに神父の

^{註99} House of the Family

^{註100} Msgr. Fitzpatrick

作ったエンカウターのコピーを置いて帰国した。

パット&パティとマリッジ・エンカウター

1965年、北米でのCFMの創始者のパット&パティはローマからの帰りスペインのバルセロナに立ち寄った。ふたりはローマに10日間程滞在して、人口とバース・コントロールという題名の特別勉強会の討議に参加していた。彼らは結局バルセロナに「家族グループの会に参加するために」来たようなかたちとなった。一方、そこで二人は妻と夫が自分達の心のうちに秘めた考え、望み、希望そして夢といったものを全て話し合うことの重要性を発見した。スペイン人夫妻を訪ねて、妻のパティは次のように書き残している。

「我々は夫婦が自分達のうちなる考えを話し合うことの重要性について気付いた。スペイン人夫婦は教皇パウロが家族の現実について初めに回勅^{註101}の中に述べられた、対話の重大さに付いての言葉を取り上げている。

そばに座って対話の技術に付いての説明を聞きながら、どんなに感動を受けたかを今でもよく覚えている。夫婦として我々もやってみた。しかしスペインのグループは対話に焦点をあわせている。我々はこのアイデアをスペインのCFMの行動部門として持ち帰って北米でどのように使うかよく考えようと思う。

(パティ・クローリーによる)

スペイン人夫婦にとっては対話に焦点をあわせることは自分達が何者なのか、彼らや家族に、彼らの周りに起こるいろいろな出来事を通して呼びかけられる神の使徒職としての行動は何かといったものを、夫婦が「御言葉の光」の内に見つける助けになっている。この霊性と使徒職のつながりを通して夫婦と家族とは家族として、また主において、主との一致となって成長していかなければならない。スペイン人夫婦にとっては祈りは、どんなに命じられた行動が「壮大」なものであっても、何にも優先して第一番に置かれることに変わりはない。

1967年8月、米国CFMはインディアナ州のノートル・ダム大学^{註102}で集会を開いた。

^{註101} the first encyclical "Ecclesiam Suam

^{註102} Notre Dame University in Indiana

「それは何とも見事な顔ぶれであった。参加者の名前は次の通り。ハーヴェイ、コックス、ベルナルド、ハーリング神父、グレゴリー・バウム神父、ビル・アントニオ、シドニー・キャラハン、ジョン・トーマス神父、ゴードン・ツァーン神父。クラレンス・リバーズ神父^{注103}の典礼に我々は深い感動を覚えていた。すると次にレイ・レッポ^{注104}という名の青年が彼の音楽を、始めは集会に参加している何百人という学生達に、そしてそれからCFMに参加している我々全員にむけて演奏し始めたのである。

同時にノートルダムのセンターという同じ場所で、社会人の為の第3回ICCFMも開かれていた。マリッジ・エンカウンターの国際指導司祭カルボ神父はオブザーバーとしてそれに列席されていた。マリッジ・エンカウンターを高める努力をして来られた神父は、その会場でただちに「使徒職活動についての分かち合い^{注105}」の名のもとに表彰された。

この点から見て、最も大切な点はマリッジ・エンカウンターの普及ということである。これはスペインに始まりカルボ神父によってメキシコに持ち込まれ、そしてそこから他のラテン・アメリカ諸国へと広げられていった。また短期間の間に米国、バターソン/ニューワーク（ニュージャージー）、ニューヨーク、ランシング、エリー、デトロイトそしてシカゴへも広まっていった。その会場ではマリッジ・エンカウンターが夫婦としていかにして一致に到達するかということと一緒に、神との対話をするための有効的な方法を示すことを試みたことが指摘されている。ヘスラー神父、カルボ神父そしてゴメズ・ベネット夫妻達は、そこに参加しているリーダー達が、それを後で自分達でもやれる様にまずここで体験してみるようにと提案した。実際、参加者全員がそれに非常に興味を覚えていた。

CFMの代表の中にはメキシコからのアルフォンソ&メルセデス・ゴメズ-ベネット、スペインのマルガリタ・ピッチ-ボテイも混じっていた。最近エンカウンターを体験して興奮していたゴメズ夫妻はマリッジ・エンカウンターを紹介するクローリー夫妻に会議の間中、付きまとして面倒をかけていた。ゴメズ夫妻を、もう既に何ヶ月も前から計画が練られているスケジュールに加えるのは無理なように思われたにもかかわらず、二人は無理を

^{注103} Fr. Clarence Rivers

^{注104} Ray Repp

^{注105} (パティール・クローリーによる)

おして頼み込んできた。「しかたがないから彼等から解放されるためにも、ノートル・ダム大学の管理者に夫婦が二三日滞在可能かどうか聞いてみよう」とパティは書いている。そして大学側の許可がとれ、ゴメズ夫妻は、やっと参加できるようになった10組の夫婦達の所へ飛んで行って、熱心にマリッジ・エンカウンターについて語った。CFM参加者達は異なった5大陸からやってきた。これが初めての国際マリッジ・エンカウンターであり、また英語で開かれた最初でもあった。参加者を活気づけて助けをしてくれるecclesialチームの顔ぶれはアルフォンソ・メルセデス・ゴメズベネトとドナルド・ヘスラーMM神父¹⁰⁶であった。

フロリダのロバート&メアリー・ムンソン夫妻はこれを体験して家に帰る道中、カルボ神父が1年前に残していったマリッジ・エンカウンターのアウトラインを探し求めた。彼等はこのアウトラインを英訳した。これがマリッジ・エンカウンター・プログラムの初の英訳となった。こうしてマリッジ・エンカウンターはマイアミを始めとする米国各市でももたれるようになったのである。

「スパニッシュ・アメリカンのエンカウンター」の形成

1967年10月、第4回ICCFMの大会が初めてスペイン・マドリッドで開かれた。その時に、米国CFM創立に熱心だったパット&パティ・クローリーはそこでフェラル夫妻とカルボ神父に出会えた。二人はペペ&ラズマ・アルヴァレズイカザのスペイン人夫妻をアメリカに招いた。そして、マリッジ・エンカウンターをアメリカの貧しい地域に生活するCFMカップルやヒスパニックの夫婦の間に広めていく力となって欲しいと頼んだ。そこで、この夫婦達と司祭は「スパニッシュ・アメリカン・ファミリー・エンカウンター」¹⁰⁷を造った。この活動の主な目的はアメリカの貧しい地域のヒスパニックの夫婦達の間にもマリッジ・エンカウンターを広めMFC/USAを生み出すことであった。しかし、パティと夫のパットは「米国に来たスペイン人夫婦には、少なくともひと組は英語で話をすべきで、そうでなければ英語で体験を分かち合うことはできない」と主張していた。

スペインのMFCは、彼等のいうことを理解し、マリッジ・エンカウンターの発展のために招待を快く受ける旨を返事した。マリッジ・エンカウンターを開く時と場所などのス

¹⁰⁶ Fr. Donald Hessler MM

¹⁰⁷ Encuentro Familiar America-Espana (EFAE)

ケジュールや、アメリカでの滞在費用はアメリカ側CFMがもってくれることになったので、往復航空費用はスペイン側がもつことにした。そして翌年の1968年8月ニュージャーシー・ノワックで5回目のICCMFが開かれることになったのである。

米国諸都市に持ち込まれたエンカウンター

8月4日、米国CFMは51組の夫婦と彼等の子ども達、そしてスペインMFCからの17人の司祭が一堂に会することとなった。スペインMFCはマリッジ・エンカウンターをするのに17のチーム編成をしてやって来た。これらのチームは8月4日から28日の間に、30に及ぶ都市をマリッジ・エンカウンターの実験を提供するためにまわって歩いた。その参加者の多くはヒスパニックや他のスペイン語を話さない夫婦達、そして大半はCFMのメンバーからなっていた。カルボ神父は彼等のほとんどが大都市に隣接した貧しい地域に住んでいる人々であったと伝えている。

この体験の後、次々と熱心な反響が寄せられて来た。11月、フランス・ラプリーデの第6回ICCFMエグゼクティブ・ミーティングが開催すると同時に「家族の問題点と価値観」についての調査がはじまり、次のような結果になった。

「クローリー夫妻が1968年8月のEFAE についての報告をする。

マリッジ・エンカウンターは米国連邦にもたらされたもっとも優れた活動の一つである。マリッジ・エンカウンターをする計画は1969年8月ノートル・ダムスの毎年恒例の大会の時にたてられていた。」ケニー神父とジェイミー・ウェランは米国でのマリッジ・エンカウターの発展の簡単な説明をし、およそ80回ものプログラムがすでに今日までに開かれていることを伝えた。彼等はまた、現状から考えて、マリッジ・エンカウンターは国際的な活動として永く残るに違いないと断言した。

ジェイミーとアーレン・ウェランはICCFMはマリッジ・エンカウターの代理者となるはずであったが、すでに各国で独立したものとなってしまっていると述べている。

マリッジ・エンカウターのテキスト、スペイン語にて印刷される

マリッジ・エンカウンターのテキストの印刷は急を要していた。テキストは1966年、カルボ神父がスペインに帰国した時、既にはっきりとした形になってはいたが、1967年以降にはそれがもっと使いやすく、手に入れやすい状態で発行される必要に迫られて来ていた。なぜならマリッジ・エンカウンターがスペイン内外へと急速に広まっていたからである。この要望に応えるには、謄写版印刷ではすでに、賄いきれなくなっていた。スペインの代表者夫婦は1968年6月の初めの2日間、このテキストを印刷する計画をたてるために、マリッジ・エンカウンターの教区チームの会合を持つことを計画した。

企画者（ディエゴ&フィナ・バルトメ）と国際指導司祭カルボ神父はこの会合を企画し、その議長を勤めた。スペインの6つの教区からの夫婦6組と、ガテマラからはロペズ神父、米国からヘスラー神父が彼等に加わった。会合の後、彼等はMFCのサービスの一つとしてのマリッジ・エンカウンターそしてマリッジ・エンカウンターとは何か、又何ではないか、体験を助けるチームやその人達の特徴、そして各エンカウンターでの人々を力づける正しい霊性といったことに関して話し合った。各段階の方法と要点とは従来の謄写版印刷された通りのかたちで残されることになった。

この会合で、いくつかの結論を得ることが出来た。新たな企画のアウトラインが必要なので、「テキスト」はスペイン語で書かれた。続く2・3ヶ月の間に、多大なる努力の末、テキストの再編は終わりをむかえ、印刷されて1969年11月には発送の準備が整うまでになった。テキストはメキシコとアメリカへと送られた。これが世界中のマリッジ・エンカウンター・プログラムの基本となるのである。また、最新の「テキスト」によれば、ここでスペイン人夫婦達はマドリッドのICCFMで決められた、アメリカの各都市へマリッジ・エンカウンターを伝え広めていく後援者になる、という10月のEFAEの同意書を受理していた。

米国でのマリッジ・エンカウンターとスペインMFC

1969年7月、ピッチ夫妻とカルボ神父とは米国CFMで、MFC/米国の誕生に立ち会ってもらえないだろうかという招待を受けた。これはEFAEの努力のおかげで、スペイン語圏の夫婦達の間での急速な進展がみられたためである。スペイン語で行われる夫婦の会は、当時サン・アントニオの司教補助で、米国ヒスパニックの委任司教をされていたパト

リック・フローレス司教によって導かれていた。この会合で、グスタフ&イザベル・エルビッティが代表者に任命された。この新しくなったMFC/米国の基本的活動の一つがマリッジ・エンカウンターであった。

ICCFMのもとでのマリッジ・エンカウンター

1969年8月ノートル・ダムで開かれた大会ではふたつのマリッジ・エンカウンターが催された。これはICCFMと同一のものであるので、ここには世界中の夫婦が詰めかけてきた。メキシコのALCOCER夫妻、フィリピンのSISSON夫妻、インドのD'SILVA夫妻、スペインのGASCON & PICH夫妻、ニュージーランドのNOLAN夫妻、スコットランドのTHOMPSON夫妻、アイルランドのO'SIOCHAIN夫妻、イギリスのMURPHY夫妻、アメリカのMULDOON夫妻、LUCEY夫妻、WEISSERT夫妻そしてアメリカのFr. CHUCK GALLAGHER S.J. 達がマリッジ・エンカウンターを体験した。又、自分の国でマリッジ・エンカウンターを開きたい人達のための特別講座も設けられた。CFMの熱心な夫婦達のおかげでこの活動は10月にはフィリピンで、そして、そこからさらに台湾へも広がって行くことになった。また、ノーラン夫妻はニュージーランドへまでも持ち帰ったのである。

この集まりをきっかけとして、ICCFMはマリッジ・エンカウンター拡大の代理役となった。会の中に、いろいろな役割を確立し、そのうちの一つがマリッジ・エンコンターの会であった。ICCFMで委員会のメンバーを助けることで、国際的關係に長く従事していたホセ&マルガリータ・ピッチ-ボティは家族をより良くする為の方法の中での自分達の役割を発展させ、会の代表者夫婦となることになった。この夫婦は連合での各会合における、マリッジ・エンコンターの進歩についての報告もすることになっていた。この会合で、カルボ神父はICCFMにマリッジ・エンカウンターを開く権利を授けた。

CHAPTER XII

1969-1971, 米国でのマリッジ・エンカウンター

1968年8月エンカウンター体験の後、米国のCFMの夫婦達は彼等の住んでいる地域でのマリッジ・エンカウンターを強めていくことに全精力を投入した。ノートル・ダムでのチームメンバーであり多くのスペイン人夫婦達にマリッジ・エンカウンターを伝えたドナルド・ヘスラー神父は、アメリカ中の夫婦達がマリッジ・エンカウンターを待ち望んでいるのを感じてた。

アメリカでマリッジ・エンカウンターが開かれてみると、CFMとマリッジ・エンカウンターとの関係は難しく、それぞれ別の独立した組織へとなくなっていった。これは全くマリッジ・エンカウターの役割を変えてしまうことになった。スペインではこれはMFCの中の一つの活動であったのに、アメリカではそれ自身が独立した組織を設立してしまっていた。それに続いてそのマリッジ・エンカウンターも、またいくつもからなる別個の団体へと分裂していった。

エルベロン・ニュージャージーでの会合

ヘスラー神父の緊急呼び出しがかかり、1969年1月24日から26日の週末を使ってニュージャージーのエルベロンにあるヴァラ・ステラ・マリスに集まることになった。これに該当する人達は既に英語で2回以上のマリッジ・エンカウンターを経験したことのある夫婦、そして司祭達全てに及んだ。12人がこれに応えた。ジョン・J・フィッツパトリック司教（フロリダ）、チャールズ・ギャラガー・神父S.J.（ニューヨーク）、フランク・ハイネン神父（ニュージャージー）、ジェローム・ハラダス神父（モントリオール）、ジェード・マイリ神父（ウエスト・ヴァージニア）、ロバート&メアリー・マンソン（フロリダ）、ジャイミー&アーリーン・ウェラン（ニュージャージー）、ポール・ウルフ夫人（アイオワ）、デイヴィッド&ドレーン・ライト（ケベック）といった人々である。彼等は米国におけるマリッジ・エンカウターの全米執行委員会を形成し、その長にジェイミー&アーリーン・ウェランを選出した。この執行委員会の目的と所属する人々の役割は米国およびカナダでのマリッジ・エンカウターの拡大のための情報、公表そしてコミュニ

ケーションの中央機関とすることであった。彼等はアメリカとカナダを地理的に区分し、それぞれの地区に責任者を割り当てた。

この席上では、後に多くのチームにとってエンカウンター・ウィークエンドをするのに使いやすいような、指導書へ対しての注釈書をつくって、テクニックを冊子に編集しようということが話し合われた。そのとき、基本となったものはマイアミでカルボ神父が残してくれたスペイン語から英語へ翻訳されたエンカウンターのコピーだけであった。エルベロンでの会合で、マリッジ・エンカウンターは完全にアメリカ国土に確立されることになった。

CFMから独立した米国でのマリッジ・エンカウンター

スペインでうまくいっているマリッジ・エンカウンターとCFMとの関係は米国では成立しなかった。スペインでは初めからマリッジ・エンカウンターはMFCの為の活動の一つであったし、フィナ&ディエゴが言うようにMFCもリーダーシップに熱心に関わっていた。米国ではその起こりも対象もそれとは違っていたので、CFMのリーダーはマリッジ・エンカウンターを彼等の活動の一つとは受け取っていなかったのである。

クローリー夫妻はマリッジ・エンカウンターを体験してはいなかったが、1971年にアイルランドで開かれたマリッジ・レトルノには参加していた。彼等はマリッジ・エンカウンターを米国へ伝える為に非常に貢献していた。彼等は多分、スペインでのマリッジ・エンカウンターとMFCとの関係を十分に理解していなかったため、実際にそれをCFMの活動の一つとして広めて行くことはしなかった。多くのCFMのリーダー達はマリッジ・エンカウンターに興味を示さなかった。その一つの理由としては、CFMのリーダーがエンカウンターを経験していなかった為に、それが本当はCFMの助けとなる可能性を持っていることに気付かなかったことがあげられる。米国でのCFMの起こりはスペインやラテン・アメリカのMFCとは違っていた。米国でのCFMはシカゴのいくつかの夫婦達のグループによって組織された市民活動グループから生まれたものなのである。彼等はパット&パティの骨折りに応えて、一つになることを決定してCFMを作り上げた。初期の目的は、夫婦と家族とが一体となることを社会的行動を通して成し遂げることであった。スペインやラテン・アメリカではMFCは、結婚と家族生活を高めるグループの集まりで形成

され、夫婦が一体となること、そして一体となった夫婦と神との一体を目指し、世界中の夫婦にそれを広めることを目指しての活動であった。初期のマリッジ・エンカウンターの目的は、夫婦が「オープンになるための一体化」するのを助けることで、彼等が一つとなってさらに、神と一体となることであり、同時に社会における自分達の使徒職や奉仕の形を見つけることでもあった。この起こりの相違は結果として、恐らくCFMのリーダーにマリッジ・エンカウンターが彼等の活動を脅かすという恐れを抱かせていたに違いない。これはマリッジ・エンカウンターを経験した多くのCFMのメンバーがCFMの活動の中にこの活動を一生懸命取り込もうとするようになることによって、事をより大きくしていった。又は、恐らくマリッジ・エンカウンターの人々がCFMを自分達の活動をコントロールしているように感じ、CFMの支配下から逃れようとしていたからかも知れない。アメリカにおけるマリッジ・エンカウンターとCFMとの分離の理由は、これらすべてによるものであろう。分裂は1969年4月に起こった。

その月にパット&パティ・クローリーはジェイミー&アーレーン・ウェランに会った。クローリー夫妻はCFMとマリッジ・エンカウンターとをより近く、心からの相互援助協力の関係にしておくように勧めた。このことはこの二つがアメリカでの結婚と家族のための別個の活動であったことを示している。

1969年8月CFMの大会でマリッジ・エンカウンターの国際・執行委員会は集まって「CFMとマリッジ・エンカウンターは異なった目的を持ちながら、家族と教会という同じ関心を持った二つの、それぞれに独立した運動である。そこで連合チームはCFMのエクゼクティブ・ボードと共通の関心事については、必要に応じて会合を持つ」、という同義案を発表した。

この発表はアメリカにおけるCFMとマリッジ・エンカウンターとを歴然と分けるものとなった。この時の代表者はジェイミー&アーリーネ・ウェレン（ニュー・ジャージー）、チャールス・ギャラガー神父（ニューヨーク）、ジェロメ・ハラダス神父（ロードアイランド）、フランク・ハイネン神父（ニュージャージー）、ミッキー・ケニー神父（ケベック）、ジュディ・マイリ神父（ウエストヴァージニア）、ボブ&メアリー・ムンソン（フロリダ）、デイブ&ドーレーン・ライト（ケベック）である。委員会に加えて、ハリエット・ガルゼロ（ニューヨーク）、ジョン&ケイ・デヴィンそしてジェローム・ダ

ン神父（シカゴ）らが参加した。フィッツパトリック司教は他の委員会のために早くから辞任していた。フランク・ハイネン神父はジェイミー&アーリーン・ウェレンのやっているマリッジ・エンカウンターのエクゼクティブ・セクレタリー・チームに加わった。

この委員会はニュージャージー・エルベロンでの会合で決まったことを受理した。委員会はまた、マリッジ・エンカウンター・プログラムを実行する時のガイドラインを用意するのに必要な、さらに大きな仕事を手がけ出した。その仕事とは、米国とカナダにわたってマリッジ・エンカウンターの発展を調整すること、エンカウンターを体験した夫婦達、司祭達そして参加することに興味を持っている人たちのために渡す資料の作成、その地域の総合事務所^{#108} になることなどである。一般的には委員会は、米国中の異なった都市にある地方のマリッジ・エンカウンターの必要に応じていつでも手伝えるようになっていた。

マリッジ・エンカウンター・グループ同士の分裂

アメリカでは、マリッジ・エンカウンターの夫婦と司祭達は完全に独立した存在で、マリッジ・エンカウンターがCFMの活動の一つとして残っているスペインやラテン・アメリカとは根本的に違っていた。この自立は、家族と家族に示された「神の御旨にかなった世界に根本から造りかえる」という使命とマリッジ・エンカウンターとの結びつきの視点を失わせてしまったように見える。地理的に区分された地方ごとに、次第にマリッジ・エンカウンターに関しての様々なテクニクと解釈があらわれて来た。これは特にニューヨーク・メトロ・マリッジ・エンカウンターとして知られるロング・アイランド・グループで顕著だった。このグループは規模の大きさと、感情面ばかりを強調して家族に対する心配りなどの指示を排斥し、分かち合う余地のないやり方で、非常に強くなっていった。ここは、また彼等の決まった地区の境界線をも守らなかった。その結果、痛みと混乱、競争と他のグループとの争いがもたらされた。そして結果として、ふたつのセンターが、シカゴとニューヨークとに生まれた。1971年、これらふたつのセンターはそれぞれから自立し、現在のワールドワイド・マリッジ・エンカウンターとなるニューヨーク・イクスプレッションと、後にナショナル・マリッジ・エンカウンターとなるシカゴ・イクスプレッションという、大きなグループへと発展していったのである。米国内には他にもマリッ

^{#108} a clearing house between areas

ジ・エンカウンターのグループがあって、そのどれもが独自に成立している。これらの分裂と共通のゴールを失ったことで、グループ間に競争が現れて、マリッジ・エンカウンターの力を弱めることとなった。このことは結果として、夫婦達が神の御計画に沿った結婚生活をしていき、自らの家族を聖性の中心に置くということに専念するよりも、他のグループより大きくなることに、より興味を覚えさせることとなってしまっている。

むすび

「マリッジ・エンカウンターの起こりと構想」はその初期の目的を語り尽くせたと
思います。マリッジ・エンカウンター・プログラムは結婚したカップルに現代社会での夫
婦としての生き方、すなわち、結婚の霊性を体験する為の好機、を昔から今日に至るまで
ずっと紹介して参りました。このプログラムでは夫婦達に結婚の秘跡、聖書、教会での教
えといったものと、家族・家庭で生活する上での夫婦のあり方との間を結ぶ方法を現実
に即して理解してもらうきっかけを提供しているのです。教会では一人の男性とその妻とは
結婚の誓約という形をとることによって慈愛に満ち、彼等自身を救いへと高めていくよう
に示しています。これはすべての夫婦に対して示されていること、要求されている霊性な
のです。司祭とか修道女のような独身の者の霊性はこれにはふさわしくありません。結婚の
霊性はひとり一人が別個に聖人である夫婦によって生み出されるものではなく、模範的あ
るいは敬虔な夫婦二人から生じるものなのです。

プログラムで行われた霊性の為の初めての方法は1943年スペインので結婚式をあげた
カトリック信者、ジェイミー・フェラールとメルセデス・エスコラとともに始まりまし
た。彼等はカトリック信者の夫婦として歩む方向を探していました。彼等は教会のうち
に、夫婦として洗礼の約束を満たしてくれる『何か』を模索していました。独身時代、彼
等はこれらの誓いを守って熱心なキリスト教徒としての生活をしてきました。結婚したら
今度は夫婦として引き続きこの生活形態を続けて行けるものと信じていました。

市民団体も教会もこの新しい現実に気付きました。ジェイミー&メルセデスは結婚して
も洗礼の約束が生きているものと信じていましたが、結婚の秘跡は洗礼の秘跡での生き方
を変えてしまっているように感じました。結婚した理由の一つはこれらの誓いを互いに満
たす為に助け合うことでした。彼等の新生活は今まで通り敬虔なものでした。彼等は結婚
の結びつきの中にこそ、神が特別の賜り物（恩恵）を与えて下さるものと信じていまし
た。神は温厚であられるイエズスとして、彼等を夫婦として強く結ばれ、力を与えて下さ
る生きた『くびき』となりました。神は夫婦としての彼等と共におられます。こうして
神を身近に感じながら、彼等は社会で、夫婦・家族としての生活を通して神の御旨に沿っ
ていこうと決めていました。しかし、実際には彼等のこうした生き方を直接助けてくれる
団体も運動も見つけることはできませんでした。教会に結婚生活を霊的に栄養つけて欲し

く、飢え渴いている彼等や結婚した夫婦達を癒してくれるものは何も見当たらなかったのです。

メルセデスとジェイミーは、彼等や他の夫婦達が夫婦としてクリスチャン生活を送るのを助けてくれる様な、今までになかった新しい『何か』を必死に追い求めました。およそ10年の間、二人は夫婦の関係における婚姻の秘跡の精神を活気づけ、豊かにし、そして深めてくれる『何か』に出会える様に祈り求めました。1952年夏の終わり、二人はガブリエル・カルボ神父に出会いました。二人の言い分に理解を示したカルボ神父は、快く夫婦と家族のための靈性を高める手伝いをしてくれることになりました。この三人はすぐに他の同じ思いでいる夫婦達や、後には多くの司祭達とも交流を持つことになりました。司祭や夫婦達はカルボ神父と共に、直ちに結婚の靈性を高めること、すなわち夫婦として「神において」、「神と共に」成長することを終生続けられる方法探しに取り掛かりました。

この靈性の基本となるのは聖書を通して教会で教えられる神の御言葉です。これらの夫婦達にも他の人々同様、喜び・楽しみそして幸せな時と共に問題・苦難・面倒を抱えた生活がありました。問題は、聖書や教会がいかに夫婦としての結びつき、また信仰を持った夫婦のための、成長の源に関与していかれるかということでした。答えは、彼等のあるプロセス・方法を取り入れ向上させるために導いていくことになりました。

このプロセスはカーディーン神父がYoung Christian Worker Association に使っていたものでした。カルボ神父は、スペインのサラマンカでの神学時代その運動に参加していた時、それを見つけて使っていました。そして、カルボ神父はこれこそが信仰と実生活とを結び付けるものだと気付きました。その方法とは、『観察する・判断する・行動する』ことでした。

この方法によって夫婦は、自分達の結婚の現状・神の望んでおられる結婚の姿、そして、あるべき結婚生活にしていく為にすべき行動を見極めることができるのです。夫婦が結婚の現状を見直す方法の中で用いる話題は、1939年から1943年に渡って出された教皇ピオXII世の新婚者に対する79項に及ぶ演説からとられています。教皇のこの79項のメッセージは単に夫婦達にクリスチャンとしての生活を勧め励ますだけでなく、結婚生活をし

ていく上で起きるいろいろな事柄や、夫婦、家族、家庭としてのあらゆる問題に立ち向かっていく様にといったことが述べられています。教皇は結婚をサポートされるだけでなく、結婚とは、結婚固有の霊性を持った生き方のことであるとも断言されました。こうした話に加え、結婚や家族生活に関して教会が教えている教義全般についてもプログラムの中には含まれていました。

このスペイン人の夫婦にとって、神の御言葉はふたりして分かち合うべき最も重要な部分でした。聖書は、ふたりを結び付けるかなめでした。全く異なったふたりの人間が心や考え方、意志や思いをひとつにして生きていくには共通する関心事を生活源としてもつ必要があります。この夫婦にとっては神の御言葉がそれに当りました。神の御言葉は彼等のうちに生きていて、生きる力を与えてくれました。御言葉は神の霊の源であり、神の霊は100倍、60倍または10倍の実りをその見返りとして夫婦に与えるのです。また聖書は彼等の独身時代の霊性の源でもありました。御言葉は結婚に対する神の御計画を示していました。例えば、創世記で、神は一人の男と一人の女からひと組の夫婦を造りました。この夫婦と楽園を歩かれながら、神はふたりに話し掛けられ御自身の思いを教えられました。彼等はふたりとも神の前に「裸」でした。

そこでは神の御言葉は彼等の結婚に対して「照らし」でありました。このスペイン人夫婦は自分達を、御言葉の照らしの内にある夫婦・又家族の中のふたり、として捉えていました。御言葉を通して、ふたりは家の、うち外にあって御心にかなった自分達のあるべき姿や、生き方がどんなものかを理解するようになりました。御言葉に従って生きていくことで、神の現存と働きとを自分達の結婚生活の中にじかに感じられるようになったのです。

どのようにして彼等は神の現存と働きかけとを感じられるようになったのでしょうか。まず、彼等にとって特別大切な御言葉は、『心の清い人は幸いである、その人は神を見るであらう』でした。もし夫婦が互いに正直で謙虚に自分自身と出会えば、自分勝手に利己的になることはめったになく、互いにより純粋で率直になれると信じていました。出会いとは一生懸命聴くことです。この夫婦は二人して、どのように生きるべきかについて、照らしのうちに自分達に語られる神の御声を聴きました。こうして、生活しながら自分達に起こっていることに気付き、また何が起こるかを察するようになりました。自分達の心に浮

かぶ考え・感情・夢・望み・希望を、そしてふたりに顕される神の御言葉を受け入れる時、彼等は互いに誠実になることができ、自分達の身勝手や、変なプライドを持っていることにも気付くようになりました。彼等は神が二人を導き方向を示されていることをより確かに感じました。神は御言葉だけではなく、婚姻の秘跡の賜物、一体となることの恩恵、和解、聖性、在るべき親の姿、そしてあらゆる必要な瞬間に応じて、彼等に働き掛けていました。このようにして、イエズスは、結婚・家族そして家庭・彼等の関係する人々との関係において、彼等が御父の御旨を反映させるのに必要な答を見つける助けを下さいました。また、これらを通して二人は神が常に一緒にいらして、自分達に働きかけて下さっていることを実感していました。そのことを意識すればする程、二人は増々、正直で真摯になっていきました。二人は自分達に起こったこうした出来事を全て書き取っておきました（この自己との出会いをマリッジ・エンカウンター・プログラムでは『内省』と呼んでいます）。御言葉が歩んでいく道を照らす『照らし』となってくれるので、夫婦はイエズスと同じ方向を目指して行くことが出来ました。

夫婦は御言葉が彼等の一人一人別に語られることを互いに話し合っ神の示されることを理解していかなければなりません。互いが相手の言葉に注意深く耳を傾け、十分に理解し合う様に働きかけているものは、心のうちで燃える炎です。彼等は内省で気付いたことを何でも話し合いました。（この話し合いは『夫婦の対話』と呼ばれるようになります）。対話の間中、夫婦としてのあり方に付いての神の呼びかけに注意を払い、より神の御旨にかなう生き方を見つけていかなければなりません。この対話の目的はその時々語られる神の御言葉を理解して、『主において』の生活により近づく為に直すべき所を見つけることです。彼等は心からそれに従いました。こうして御言葉は彼等の生活の基盤となったのです。対話によって、互いの理解はより深まりはしますが、これが対話の本来の目的なのではありません。

二人して祈ることと聖書は彼等の日常生活の土台となる部分でした。ここから、対話をしていくという習慣が二人の間に展開していくのです。夫婦二人に示されたこの状態は一日24時間、オープンでいること、相手の言うことを聴くこと、そして相手を通して語られた神の御言葉に心からの注意を払って耳を傾けていくこととなります。彼等はチャンスのある限り互いに起こったことすべてを話し合いました。そしてこの対話が彼等のライ

フスタイルとなりました。

彼等はこれを『相互の信頼』と呼びました。『相互の信頼』は二人が完全に一体となる為には不可欠なものでした。互いに一生懸命心を開き、聴き入りました。彼等は神がいつでも彼等に語りかけておられると確信していました。時には、片方が必要な考えを相手から聞くことができました。相手にとっては、自分の言うことが大事な意味を持っているのだと確信を持つことが大事です。メルセデスはジェイミーが、思ったことを何でも話してくれると言っています。時にはそれは彼女がちょうど疑問に思っていることの答えであったり、後日、役に立つ考えであったりしました。彼女がそのことを伝えると、彼も同じような経験をしていたことが分かりました。互いの言うことを注意深く聴くことによってふたりは神から賜る、一体となった喜びをより強く感じるようになると共に、結婚したことで神の現存と働きかけに増々気づく様になりました。彼等も他の人々も、神は日々ひとりづつを通して夫婦達に語りかけられていると信じています。「相互の信頼・対話・オープンにすること」等は、秘跡の恵みが明らかにされるのに必要な天然の調味料といったところでしょう。

バルセロナの若いカップルは、互いに相手のその日の行動を全部知っていたと話してくれました。共に晩の祈りをする時、互いにその日の出来事、アイデア・考え・洞察・恐れ・喜び・そして憂鬱な気分などを含む全て、また、翌日の予定も話し合うそうです。その結果、相手がいつどこで神の助けをより必要としているのか察することが出来、それに対して祈りを運ぶことが出来たそうです。

すべてを祈りの中で分かち合うので、神は二人に何が起こったか、何をしようと考えているのか全てお見通しで、我々は正直にならざるを得ないのです。よく次の日に、妻が今どうしているか考えたり、いつも以上に助けがいる時がいつだったか、などを思い出します。そして祈るのです。私は妻と一体なのを感じます。時々晩に妻はその時『何か』が働いた様に感じた、と話してくれます。同じことは私にも起こります。物理的には離れていても、我々は二人が心も精神も完全に一体であるのを感じます。予定が変わる時はできるだけ早く伝えるようにしています。

(夫の話より)

こうした夫婦が結婚に対して飢え渴き、一生懸命探していた『何か』とはこの結婚の靈性なのです。彼等は同じ思いを持つ夫婦だれもが参加自由な会を形成し始めました。教皇ピオXII世の「より良き世界を造る」という呼びかけに影響を受けて、彼等は自分達の事を当初『より良き世界の為の既婚者チーム』と呼んでいました。この名は後に『ピオXII世の既婚者チーム』と改められるようになりました。彼等の構想は教皇の、「家族を通してより良き世界を造る」ことの成就でした。1958年、彼等は教皇が世界中の夫婦を強くするように彼等に語られているように受け取りました。教皇は彼等に、家族が神の御言葉が生きていて、行く道を指し示している所となるように、そして他の夫婦達も同様になるよう助けていくことを命じられました。以来、チームの夫婦達はこうした生活の仕方を広めて、同じように結婚生活により満足と充実とを渴き求める人達の助けをしていく使徒職を与えられたと信じたのでした。

結婚生活のあり方を探しにカルボ神父と出会った1960年、神父はそれ以降8年以上つきあうことになるこの夫婦に、ずば抜けて力強い絆で結ばれた人達だという印象をもちました。彼等の活気は生活の姿勢、彼等の結婚の靈性からくるものでした。この探し求める夫婦達のために、神父はマリッジ・エンカウンター・プログラムという青写真を描いて、教皇チームの生活の姿勢を紹介しました。この中で夫婦はこの靈性の根本になる所、すなわち聖書と結婚に対する神の御計画、『相互の信頼』と対話の必要性、婚姻の秘跡に示されるイエズスの現存と贈り物、そして二人の間での呼び掛けを、彼等の家族・家庭そして教会や一般社会の中に見い出すはずでした。こうした生き方を通じて、夫婦は神の現存と働きとを生活の中に見い出すのです。この体験は御旨のうちに結婚生活していれば、必要なものは総て備わっていること、必要なものは全て二人のもとにあって外に探しに行く必要はないことに気付かせるようになります。従って、プロセスは彼等の中にある可能性を現実のものにさせれば良いだけなのです。恐らく彼等はメルセデス夫妻に「一番上等なブドウ酒はこれから出て来るに違いない」と叫ぶでしょう。

プログラムの目的は夫婦に彼等の場所を神の御計画のうちに見つけさせることと、結婚に秘められた無限の可能性を探す手伝いをする事で、どんな宗教だろうと、さらに無宗教だろうと問題ではなく、すべての夫婦達のために開かれたのです。第一回目のプログラムはスペインでカトリックの夫婦のために開かれました。そして彼等は自分達が信仰の光のうちに何者であるかを見つけることになるのです。カトリック以外のキリスト教徒も

『観察する・判断する・行動する』という方法をとることによって自分達が何者なのか、何者でないのか、自分達夫婦の結びつきの中に、家族や家庭とのかかわりで自分達の宗派の中で示されるそれぞれの神の現存と働き掛けとを発見することになります。用語は違ってても信仰は同じです。聖書はすべてのキリスト教徒の拠り所なのです。同様にユダヤ教では、人間の行為に働きかける神の断罪について語っているヘブライ語の聖書が、その中心に置かれています。マリッジ・エンカウンターでは、神が誓約を守られて、今もなお我々の生活に現れ、慈愛に満ちた働き掛けをして下さっていることを教えています。このことはマリッジ・エンカウンターが他の信仰の人達にも、又宗教をもたない多くの人々にも同じ様に大きな助けとなっている事を示しています。この方法はそれぞれのやり方の中で、彼等の結婚生活に実際に現存される神との触れ合いを感じられるようにしてくれるのです。マリッジ・エンカウンターはこの方法を使って神のこの御力を確信し、彼等が彼等だけで生き抜いているのではないこと、自分達の日々の関係の中で超自然的な力が働いていることに気付かせてくれるのです。多分これは『神』という概念の新たなる解釈に目を開かせてくれているのかもしれない。キリスト教国ではない日本で、信仰を持つ多くの夫婦達がマリッジ・エンカウンターによって全能なる神の存在に気付くようになり、キリスト教信者となって来ています。このことがエンカウターの目的ではないのですが、結果としてしばしば見かける光景とはなっています。

多くの夫婦が確かな絆を失いつつあると感じる今日、この方法は自分達夫婦の結びつきをもっと深く、力強くしたいと望んでいる総べての人達に二人の間の新たなる可能性を見つける助けとなるであろう。『観察する・判断する・行動する』という方法は、日々の生活に強く堅固で活気があって、常に眼を見張らせられるような創造的な夫婦関係を提供してくれるに違いありません。こうして、より良き世界に向かっての運動に大きな影響を与える、健全で一般家族の見本となる様な、力に溢れた家族がもっともっと増えていくことでしょう。こうした家族のおかげで世界は、「未開社会から人間社会へ、そして人間社会から神の御国へ」と移っていくのです。この変遷は家族への特別な呼びかけに気付いて理解した夫婦によって始まり、そして続けられていくのです。教皇ピオXII世の言葉が浮かんできます。「この方法によってのみ人間性が保証され、家族や個々の魂が平和と慰めを得ることが出来る。他の方法では探し求めても無駄である。全世界の夫婦達よ、ともに努力を続けていきましょう！」